
TALES OF SYMPHONIA
テイルズ オブ シンフォニア
ラタトスクの騎士
テイルズ オブ シンフォニア
ラタトスクの騎士
世界（とき）の願い③
矢島さら
SPECIAL STORY
ファミ通文庫

矢島さら

Sara Yajima

横浜市生まれ。ゲームノベライズを中心に、ファンタジー小説やエッセイなど、幅広いジャンルの執筆を手掛ける。また、カエルを心から愛してやまない「かえる友の会」会員として、精力的に活動中。主な著書に『テイルズ オブ』シリーズ（エンターブレイン）、『まきこママの通販推理生活』（ベネッセ）、『ガーコとケロタン』（世界文化社）他多数。
http://sarah.m78.com/

株式会社バンダイナムコゲームス

奥村大悟

Daigo Okumura

『テイルズ オブ』シリーズのキャラクターデザイン（〝エターニア〟の大精霊、〝シンフォニア〟のマーテル、〝アビス〟のイオン、ミュウなど）を数多く手掛けているほか、『テイルズ オブ ザ ワールド～サモナーズ リネージ～』、『テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-』では、メインキャラクターのデザインを担当。アメリカ製のゲームが面白過ぎて、朝起きられないことが最近の悩み。



カバーイラスト　株式会社バンダイナムコゲームス 奥村大悟

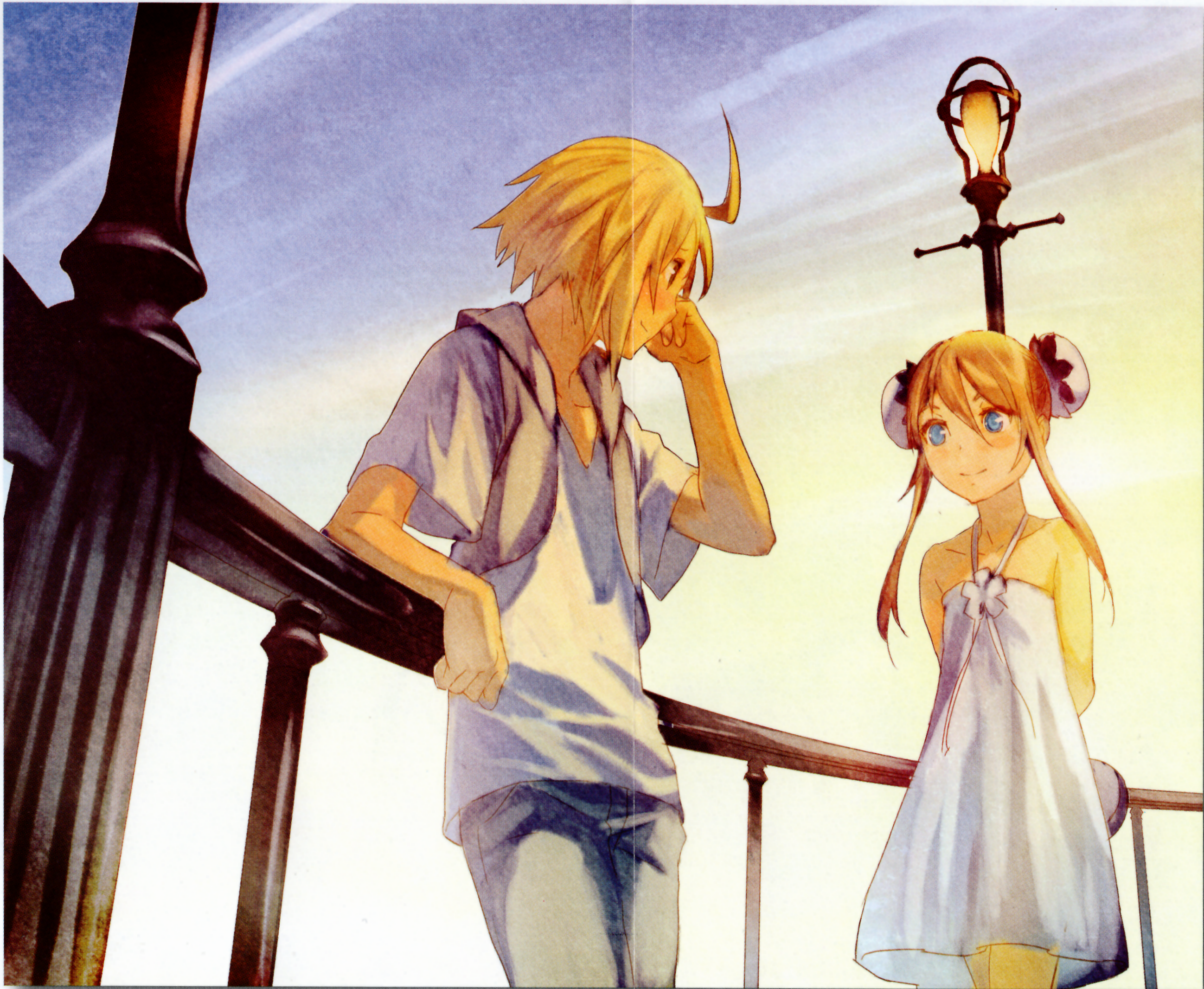
テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-

世界(とき)の願い③

矢島さら

ファミ通文庫


Richter
Lloyd
Tenebrae
Emil
Marta
Aqua



テイルズ オブ シンフォニア

TALES OF SYMPHONIA
ラタトスクの騎士

世界(とき)の願い③

Contents



テイルズ オブ シンフォニア－ラタトスクの騎士－

世界(とき)の願い③

矢島さら

ファミ通文庫

口絵・本文イラスト　株式会社バンダイナムコゲームス　奥村大悟

12

「ここは、関係者以外立ち入り禁止だ」
雷の神殿に入ろうとすると、甲冑（かっちゅう）に身を包んだふたりの警備の兵士が、すかさず武器を振り上げて叫んだ。マーテル教団兵だ。
またか、とエミル・キャスタニエは思う。地の神殿でも内部の崩落を理由に中に入ることを許されなかったのだ。
「そんな！　関係者って一体……」
マルタ・ルアルディは唇（くちびる）を尖（とが）らせたが、そのとたん、
「いいから帰れ帰れ！」
と、警備兵のひとりに突き飛ばされた。
「マルタ！　大丈夫？」
かろうじてエミルに支えられたマルタのすぐ近くで、放電の火花がバチバチと音をたてる。

「何するんだい！」
怒りの声をあげたのは、藤林しいなだ。エミルはそれでもまだ冷静さを保っていた。
「あ、あの、すみません！　お話を……」
「ガキがうるせーんだよ！」
兵士の方は少年と話すつもりなどないらしい。エミルに向かって勢いよく武器を突き出した。
「うわぁ!?」
通路の端にしりもちをつき、背中をしたたか打ちつけたエミルを見て、
「エミル！」
マルタが悲鳴をあげる。それまで事態を静観していたリーガル・ブライアンが、
「いい加減にしないか！」
と、声を荒らげたときだった。
ぎゅっと閉じていたエミルのまぶたが開く。その瞳(ひとみ)は、緑から燃えるような赤に変わっていた。
「……だからおまえには任(まか)せられねぇってんだよ」
「あ？　何言ってるんだ……」
せせら笑うような兵士が、突然、

「うわぁっ⁉」
と叫び声をあげた。エミルの左腕に胸倉を摑まれ、通路の下へ投げ捨てるように宙ぶらりんにされたのだ。エミルが右手に握った剣は、もうひとりの兵士に突きつけられている。ほんの一瞬のできごとだった。
「マルタを傷つける奴はゆるさねえっ！」
「ま、待って、エミル！　攻撃しないで！」
あわてて駆け寄るマルタに、エミルは目を剝いた。
「どうしてだ。こいつら、おまえを……」
「その人たちを敵に回したら、神殿に入れなくなっちゃうよ！」
ふん、とエミルは唇を歪め、
「こいつら全員殺しちまえばいい」
と吐き捨てる。
「エミル！　あんた、またラタトスクモードなんだね。落ち着いて、元のエミルに戻るんだよ」
「元のエミルじゃマルタは守れねぇ！」
しいなに噛みつくエミルに、リーガルが厳しい口調になって言った。
「エミル。今はおまえのやり方でもマルタは守れぬ」

「何！」
「とにかく剣を引け。無用な争いを引き起こしては我らに不利になる」
舌打ちをし、エミルは摑んでいた兵士を通路に叩きつけ、剣を収めた。神殿の奥から騒ぎを聞きつけたらしいひとりの老人が現れたのは、そのときだった。
「な、何事ですか……」
「シュナイダーさま！　怪しい奴らが、無理矢理神殿に入ろうと……」
兵士が訴えかけるのを、リーガルが遮る。
「それは誤解だ。我らはただ、何故ここが封鎖されているのか聞こうとしただけだ」
薄暗がりに目を凝らしていた老人は、リーガルの顔を認めると驚きの声をあげた。
「……あ、あなたは、ブライアン公爵⁉」
その言葉に、ふたりの兵士はぎょっとなった。
「ブライアン公爵って、あのレザレノ・カンパニーの……」
「へ……へへへへ……。な、なんだ、そうならそうと仰しゃって下さいよ。それなら我々も……」
彼らはこそこそとその場を離れてゆく。
「——どうやら何か失礼があったようですね」
老人はため息をつき、

「私は、サイバックの王立研究院で院長を務めておりますシュナイダーです。実は現在、雷の神殿は危険なので、王立研究院の許可がないと立ち入りできないことになっています」
　と、申し訳なさそうに説明した。
「そんな……。一体何があったんですか？　私たち、どうしても中に入らないといけないんです」
　マルタが訴える。すると、
「何か事情がおありのようですね。……では、王立研究院でお待ちいただけますか」
　仕事を終えてからお話を伺いますとシュナイダーは言い、それから何気なくエミルに視線を当てて息を飲んだ。
「き……きみは……」
「……何だ？　間の抜けたツラで俺を見つめて」
　エミルはじろりと老人を睨む。
「エミルを知ってるんですか？」
　マルタが訊ねると、シュナイダーはどこかほっとしたような口調で、
「エミル……。そうだな、彼の筈がない……」
　と、つぶやく。

「なんだい、知り合いにでも似てるのかい？」
「……はは、いえ、何でもないんです。では、私はこれで」
しいなに向かってつくり笑いを浮かべると、シュナイダーはそそくさと神殿の奥へ戻って行った。
「……誰に似てるのかな」
マルタが覗き込もうとするのに、エミルはプイと顔をそむける。
「……知るか！　へっ、胸くそ悪い」
「やれやれ、ラタトスクモードのエミルは口が悪くていけないよ」
しいなはリーガルと顔を見合わせると、肩をすくめた。

王立研究院は、学園都市サイバックの街の奥にあった。
しいなは、かつてロイドたちと研究院を訪れたことがあるのだと言う。
エミルは仲間たちと中でシュナイダー院長の帰りを待つことにしたのだが、
「おっと」
入り口で、中から出てきた白衣姿の研究員らしき男とぶつかりそうになった。

「キキキ、君は、アステル……アステルじゃないか！」
エミルの顔をひと目見るなり、眼鏡（めがね）の奥の目を丸くして彼は叫んだ。
「生きていたのか、アステル！　だから言っただろ！　ハーフエルフなんかと仲良くするとろくなことはないって！」
「な……なんだよ！　誰がアステルだ！　俺は……」
エミルがムッとするのにも気づかぬ様子で、研究員はまくしたてる。
「だからアステルだろう？　ラタトスクとかいう精霊を調べに行ってそのまま死んじまったって……」
「ちょっと待って！」
マルタの顔色が変わる。
「ラタトスク？　ここではラタトスクのことを調べてるんですか？」
「なんだい、あんた。アステルの知り合いか？」
エミルに連れがいることに初めて気づいたように、彼は怪訝（けげん）そうな顔になった。
「この人はエミル。アステルって人じゃないんだってば」
マルタはもどかしそうに研究員に訴える。そのとき、
「皆、少し落ち着くがいい」
とリーガルが言い、研究員の前に進み出た。

「私はリーガル・ブライアン。シュナイダー院長をこちらで待つようにと言われたのだが……」
「ブライアン公爵！　し、失礼いたしました。院長はただいま外出中ですが……」
「知っている」
「そ、そうでしたね」
眼鏡の研究員は目を白黒させながら、院長の部屋の場所を教えてくれた。

研究院の中は冷んやりとした空気に満たされている。階段脇に展示されている巨大な動物の骨格標本にエミルが気を取られていると、マルタが言った。
「アステルって人とエミルって、そんなに似てるのかな」
「そうらしいねぇ……」
しいなは応え、それから表情を険しくする。
「それにしても、ここはいまだにハーフエルフをあの扱いかい。……気に入らないねぇ」
「……人は簡単には変われぬ。ハーフエルフへの差別的感情は四千年以上に及ぶ。一朝一夕では変わらぬだろう」

と、リーガルが言うのに、彼女はため息をついてみせた。
「そりゃ……そうかもしれないけどさ。あの様子じゃ、まだハーフエルフを地下に閉じ込めて研究させてるんじゃないのかねぇ」
「ここってそんなことしてたんですか？」
マルタが口元に手を当てて驚いた。リーガルは、
「なら、地下に寄ってみるか？」
と、訊ねる。
「……ハーフエルフがいるかもしれないところ……ですか？」
「なんだい、まさかあんたもかい？　リフィルたちとは仲良くなれたんだろう？」
しいなにぐっと睨まれて、マルタはリフィルとジーニアスの顔を思い浮かべた。
（ふたりとも……、全然悪い人じゃない。ううん、それどころか、一緒にいるのは楽しかったよ）
「……そう……だよね。うん、こんな気持ちでいたらリフィルさんやジーニアスに悪いもんね。ごめんなさい」
「よし、では行こうか」
うなだれるマルタに優しく微笑みかけ、リーガルが促した。

階段を地下へと降り、しばらく廊下を進むと、やけにがらんとした部屋に出た。石の床はひどく冷たく、設置されたいくつかの機械から発せられている光さえも温かみを持っているとは言い難い。
「ここだよ。昔はここでハーフエルフが強制的に研究をさせられていたんだ。一生閉じこめられたままでね」
感情を押し殺すように、しいなが言った。
「こんなところで……。ひどい……。ねぇ、エミル」
眉を寄せたマルタが声をかけたが、エミルはただ壁に向かって突っ立っている。
「……エミル。どうした？」
リーガルに重ねて言われ、エミルはハッと我に返った。
「あ……あれ？　ここは……？」
彼は不思議そうにあたりを見回し、首を傾げる。
(どこだろう、ここ……)
突然、記憶が甦った。
「あ！」

「どうしたんだい、エミル。今、目を覚ましたって顔して……」
心配するしいなにはおかまいなしに、エミルはあわててマルタに向き直った。
「マルタ！　怪我は!?　あの嫌な教団兵は……」
「エミル？　どうしちゃったの？」
「……え？」
マルタのぽかんとした表情に、エミルはとまどう。
「エミル、しっかりしとくれよ。雷の神殿は立ち入り禁止になってるからサイバックの王立研究院に行こうってなったんじゃないか」
「そ、そうな……の……？」
いつの間にと思いながら、エミルは振り返った。しいなはエミルの頭から抜け落ちている記憶を補完するように、ここへ来るまでの事情を説明してくれた。
「……疲れているのかもしれぬな。エミル、少し宿で休むといい。院長が戻ったら使いをやろう」
「……は、はい……」
「私も一緒に行くよ」
「……う、うん。ありがとう」
マルタに付き添われて階段を上がる。研究院の外へ出たエミルは、そこに白衣を着た

眼鏡の男が立っているのを見た。

「……似てるなぁ……」

「え？」

エミルは首を傾げる。白衣を着てるからここの研究員かな、と思う。

「アステルって人に似てるんだって」

マルタが囁く。

「僕が？」

先ほど同じことを言われたときの記憶がない彼は、研究員をじっと見た。

「そっくりだよ。双子かと思ったぐらい。けど、アステルはリヒターに殺されたって話だから……」

「リヒター!?」

思わずエミルは大きな声を出してしまう。

「うん？　リヒターを知ってるのかい？　ここの研究員だったハーフエルフなんだけど」

「ハーフエルフ……。確かにリヒターは魔法が使えたけど……」

マルタに視線を向けられて、エミルは研究員に訊ねた。

「リヒターさんって赤い髪の背が高い人……」

「ああ、髪は赤かったな」

彼はすぐに頷き、それから声をひそめた。
「あいつ、ラタトスクって精霊の調査に行って、そこでアステルを殺したらしいんだ。アステルはリヒターの親友だったんだぜ、まったくひどい奴だよ。ハーフエルフはろくなモンじゃないな」
「……う、嘘だ！　リヒターさんがそんなことする訳ない！」
エミルは拳を握りしめて叫ぶと、ダッと駆け出してゆく。
「エミル、待って！」
マルタは研究員への挨拶もそこそこに、エミルの後を追った。幸い、通路の先はすぐに海水を引き込んだ運河になっている。
「エミル、ちょっと落ち着こう」
背後からそっと声をかけると、水面をじっと見つめたまま、
「……リヒターさんは僕を見てアステルって人を思い出してたんだ」
と、エミルはぽつりと漏らした。
「エミル……」
「だから、僕に優しくしてくれたんだ……。きっと、そうなんだ」
それは、あれほど友達を欲しがっていたエミルの嫉妬の言葉のようにも、マルタには聞こえる。が、彼は冷静に続けた。

「やっぱりリヒターさんがアステルって人を殺してたら、その人にそっくりな僕に優しくしてくれる筈がないよ」
「うん……エミルが信じるなら、私も信じる。だから今は……宿屋で休もう？　ね？」
「……うん……」
エミルはようやく顔を上げると、頷いた。

リヒターが迫る。あの形相で、あの技で——。
「うわぁっ!?」
エミルは叫び声をあげながら飛び起きた。
「……またあの夢……」
(どうしてリヒターさんが僕を殺そうとするんだろう……)
ここが安全な宿屋のベッドの上だとわかっていても、エミルの心臓はまだ破裂せんばかりにバクバクしている。
「お目覚めですか」
ベッドの傍らに控えていたらしいセンチュリオン・テネブラエが静かに声をかけてきた。

「……テネブラエ……。うん……変な夢見ちゃったけどね」
「変な夢……ですか」
「うん……。僕がリヒターさんに殺される夢……」
エミルは言い、ふと気づいて訊ねる。
「そういえばマルタは？」
「リーガルさんに呼び出されて外に行きました。追いかけますか？」
「うん」
部屋の中にはまだ悪夢の残滓が漂っている気がする。エミルはそそくさとベッドを降りた。

テネブラエによれば、院長が戻ってきたので、マルタは王立研究院に向かったという。エミルも急いで研究院への道を戻り始める。と、円形の広場を通りかかったときだった。
「……エミルがエミルじゃない？」
突然耳に飛び込んできた自分の名を口にするマルタの声に、エミルはハッと物陰に隠れた。そっと覗くと、彼女はリーガルとしいなと話をしているところだった。

「少なくともリフィルはそうではないかと私に手紙でそう知らせてきた」
リーガルが言う。いったい何の話をしているのだろう。
(手紙っていえば、いつかのラブレターのこと、かな……？)
エミルはそれが自分とどういう関係があるのか、理解できなかった。リーガルが言葉を続ける。
「しばらく見守らせてもらったが、確かにラタトスクの憑依（ひょうい）だけではラタトスクモードの説明がつかないようだ」
リーガルの言う通りかもしれない、としいながが言った。
「昔、あたしたちは、仲間の体に別の誰かが乗り移る現象を見たことがある。エミルのラタトスクモードもラタトスクの力の憑依なんだろ？　それにしちゃ、憑依されてる時間も長いし、その間の記憶も自分のものとして覚えてるだろ……」
マルタはちょっと首を傾げ、
「でも最近エミルはラタトスクモードになったときのこと覚えてないみたいです」
と、応える。
「我々の知っている憑依状態はその間も『憑依されている』という意識があるのだ。エミルの場合は自分だという確固たる意識があった。そして最近は記憶がなくなってきている。——リフィルの予測通りだ」

「リフィルさんは……なんて？」
あれを愛の手紙と思い込んで興奮していた自分が、マルタは悔しかった。リフィルの方がよほどエミルをしっかり観察している。
「リフィルは、本来のエミルが記憶喪失に陥っていると考えていたようだ。現在のエミルは、失われた記憶を自分で上書きして作り上げた架空の人格だというのだな」
「そんな筈ないです。エミルのおじさんもおばさんも、エミルをちゃんと甥として認識してたし」
マルタが即座に反論すると、
「そこは私にもわからぬ」
と、リーガルはため息をついた。
「ただ、リフィルは、本来のエミルは記憶ごと眠っていると考えていたようだ。それがラタトスクとの契約によって刺激を受けて目覚めたのではないかとな。そうでなければ力を借りているだけなのに性格まで変わるとは思えないと……」
そのとき、マルタが肩を落として歩いてくるエミルに気づいた。
「エミル！」
「……つまり……今の僕は偽者ってこと……ですか？」
顔も上げずに、エミルはそう訊ねた。

(現在のエミルは、失われた記憶を自分で上書きして作り上げた架空の人格——架空の……)

エミルの頭の中で、リーガルの言葉がぐるぐる回っている。

「聞かれてしまったか……」

質問に答えないリーガルに、エミルは食ってかかった。

「リーガルさん！」

「違う、そうではない。おまえもまたエミルだ。だが、記憶を失った状態で社会と向き合うために生み出された人格がおまえで……」

「じゃあ僕は何なんですか！　僕は……僕は……」

語尾が微かに震えてしまう。リーガルはそれに気づかぬふりで静かに唇を動かし続ける。

「これはあくまで私の仮説だ。リフィルは違うというかもしれぬ。だが……おまえは本当は『アステル』なのではないか」

「僕はエミルです！」

エミルは叫んだ。

「アステルって人は死んだ筈で……」

自分の言葉に、彼はハッとする。

（僕がアステルって人だから、リヒターさんに殺された記憶がある……？）
そういうことなのだろうか。だったら何故自分は今、こうして生きているのだろう。
ふいに言葉を飲み込んだエミルの顔を、マルタが覗き込む。
「エミル。シュナイダーさんが帰ってきたんだって。王立研究院に行ってこのこと、ちゃんと聞いてみよう」
「……マルタ……。だけど……」
ううん、とマルタは首を振る。
「今のエミルの状態を、そのままにはできないよ」
「マルタの言う通りだよ。ただ、これだけはわかっとくれ」
しいなが身振り手振りを交え、一生懸命伝えようとする。
「リーガルはあんたを偽者呼ばわりしたくて言ったんじゃない。あんたが消えてしまうんじゃないかって心配して、この話を切りだしたんだ。あたしもリーガルも、きっとリフィルたちだって、今のエミルが大事なんだよ」
エミルの胸に、しいなの言葉がしみた。
「……あ……ありがとう……」
「エミル、すまなかったな」
リーガルが頭を下げた。

（今の僕が大事だと言ってくれる人たちがいるんだ……）
「いいんです……。僕だって僕に何が起きてるのか知りたい……。行きましょう、王立研究院へ」
冷静にならなくては、とエミルは自分に言い聞かせた。

シュナイダー院長の部屋は、王立研究院の二階の奥にあった。大きな本棚からあふれた書物が、机の上にも戸棚の上にも、所狭しと積み上げられている。
「お待たせしてすみませんでした」
シュナイダーはエミルたちを見ると、わざわざ椅子から立ち上がった。
「……あの、お願いした雷の神殿のこともそうなんですけど……。アステルって人のこと教えてもらえませんか。それと……リヒターさんのことも」
マルタがおずおずと切り出す。すると、院長は目を細めてエミルを見つめた。
「アステルに瓜二つだと思ったが、やはりキミはアステルの親戚か何かなのか」
「……」
返答に困っているエミルに代わり、

「いや……実は……」
と、リーガルが事のあらましを説明する。
「……実に興味深いですね」
ふう、とため息を漏らすと、院長は今度はやや無遠慮にエミルの顔をいくつかの角度から観察した。
「確かに、エミルくんはアステルと同一人物かもしれません。それほどよく似ている。エミルくん、ルインのご親戚は幼い頃のキミと面識があるのかね」
「……いえ。パルマコスタが襲われてから初めて会いました」
エミルは院長に首を振ってみせた。
「なら、アステルがエミルと名乗っていてもわからないかもしれませんね」
「でも、ここで働いていたっていう割にエミルは若いと思うんですけど……」
マルタも見慣れているはずのエミルの横顔に、改めて視線をあてて言った。
「アステルがここで研究を始めたのは彼が九歳の頃です。ハーフエルフかと思うほど賢い子供でした」
シュナイダーは言い、
「彼が生きていれば十八歳。エミルくんは……」
と、聞く。

「十六です。でも記憶を失っていたとしたら……」
エミルの言葉を引き取るように、
「ええ、本当はいくつなのかはわかりませんね」
院長は頷いた。
「アステルはここで何を研究していたんだい？」
机の上に積まれている書物の一冊をポンと叩き、しいなが訊ねた。
「元々は精霊の研究を行っていました。あなたもメルトキオの精霊研究所で一度くらいは見かけたことがあると思います」
「だからか！　エミルに見覚えがあったのは……」
しいなはやっと合点がいったという風に、何度も大きく頷いた。
「その後、精霊と自然環境の関係を調べるうちに、魔物がマナの調整役を担っているという仮説を立てましてね。それを証明するためラタトスクの実地調査に向かいました。それがおよそ二年前のことです」
「リヒターさんはその時に……」
エミルが水を向けると、院長はすぐに、
「ええ。リヒターはここで働くハーフエルフでした」
と答えた。

「アステルとはウマがあったようで研究も合同で行っていましたから、実地調査もふたりで向かいました」

「実地調査で何かあったんですか」

マルタが訊ねる。

「……詳しいことはわかりません。リヒターはアステルは死んだ、と言ってここを辞めてしまいましたから」

「エミルがアステルなのかどうか調べる方法はないものだろうか」

腕組みをするリーガルを見て、院長はちょっと考えていたが、

「……雷の神殿で、現在も調査を続けている研究員の中に、アステルと同期のリリーナという者がいます。彼女はアステルと親しかったし、ラタトスクについてもそれなりに詳しい。許可証を出しますので行ってみてください」

と言ってくれた。

「でもいいんですか？　凄く大事そうに守っているみたいなのに」

マルタは、さっき警備兵に突き飛ばされたことを思い出した。

「実は最近この辺りでは、落雷が頻発しているんです。その原因が雷の神殿のようなんですよ。しかも神殿内は一部次元境界が狂っていて……」

「次元境界？」

聞き慣れない言葉に、しいなが聞き返す。

「……つまり、そう……この世界と別の世界が混じり合いそうになっているというか……まあ、一般の方には難しいと思いますので説明はやめておきましょう。とにかく危険なので、くれぐれも無理をなさらないで下さい」

そう注意をして、シュナイダー院長は、エミルたちを送り出してくれた。

雷の神殿へ戻ると、驚いたことに警備兵がふたりともぐったりと倒れていた。エミルは、院長が持たせてくれた許可証をなくさないようしっかり握りしめていたのだが、これでは素通りできそうだ。

「……死んでいるようです」

テネブラエの言葉に、マルタが息を飲む。

「……そんな……」

「一体誰が……」

エミルは、マルタと顔を見合わせた。リーガルが通路の奥へと目を走らせる。

「ここにコアがあることを考えると、それを狙う者……」

「ロイド？」
エミルがハッとすると、
「まさか！」
と、しいながすぐに否定する。マルタは泣きそうな表情になった。
「なら……ヴァンガードかも……」
「……マルタ。つらいかもしれないけど……」
エミルが言いかけると、彼女は気丈に背筋を伸ばす。
「ううん。私はヴァンガードがやることに反対だし、パパを止めたいんだもん。つらくなんてない。ただ、こうして命を落としてしまった人に……申し訳なくて……」
「そうだね。ひどい奴らだったけど、死んでいいわけじゃない」
しいなもマルタと一緒に、兵士たちの変わり果てた姿に目を落とした。
「僕、この人たちを埋葬(まいそう)してあげたいです。このままなんて……」
エミルは言ったが、リーガルは首を縦に振らなかった。
「だが、ヴァンガードが来ているかもしれないのなら、一刻の猶予もない。今はこのままにしておくしかないだろう」
「そうですね。……すみません」
エミルはリーガルにとも兵士たちにともつかず、謝罪の言葉を口にした。

「……あれは何でしょうか」

しいなの案内で神殿の内部へ進むうち、テネブラエが脚を止めた。エミルたちの少し先に、白い紙切れのようなものが落ちている。

「何かの研究資料の一部、みたい……」

エミルはそれを拾い上げて、薄闇の中で目を凝らした。ぎっしりと細かい文字が書き込まれている。

「えっと……、つまりラタトスクは、次元境界を一定のレベルに抑えるための……」

「ラタトスク!?　それラタトスクの資料なの？」

エミルが読み上げた文章に驚き、マルタもあわてて書類を覗き込む。

「そうみたい……。なんかむずかしいこと書いてあってよくわかんないけど……」

「確か王立研究院の奴らがここに来てるって話だったね」

「うむ。彼らが落としたのかもしれぬな」

しいなとリーガルが頷きあった。

「そうですね。僕、持っておきます」

持ち主がいたら返してあげよう、と思いながらエミルは再び歩き出した。
ときおり、遠くで小規模な雷が発生している。建物の中なのにどうして雷が落ちるんだろう、とエミルが不思議に感じたときだった。
神殿の奥――広間の大階段の上――から、若い男がふたり、慌てふためいて走ってくるのが見えた。着ている白衣は、王立研究院で会った研究員のものとよく似ている。
男のひとりがエミルたちに気づいた。
「……お、おまえらもヴァンガードか!?」
「ち、違います！　僕たちは王立研究院の許可を貰ってここに来ました」
エミルの言葉を聞いたもうひとりの男が、足踏みしながら忠告する。
「だったらあんたたちも早く逃げるんだな。ヴァンガードがいきなり来て、誰彼(だれかれ)かまわず殺そうとしてるんだ」
「……止めなきゃ！」
「うん、行こう！」
マルタとエミルが走り出そうとするのを、
「ちょっとお待ちよ！」
と、しいなが呼び止めた。
「エミル、例の資料を渡した方がいいんじゃないのかい」

「資料？」

研究員が怪訝そうな顔をする。リーガルは、

「ラタトスクに関する研究資料のようだったが……」

と、説明してやる。すぐに研究員は、

「それならリリーナが落としたと言っていた奴じゃないか？」

と、同僚に同意を求めた。

「ああ」

エミルは振り向き、

「リリーナさんは……」

と、訊ねる。シュナイダーが言っていた、アステルの同期だったという研究員のことだろう。

「俺たちよりもっと奥で調査をしていた。無事だといいんだが……」

「エミル、行こう！」

マルタはすでに階段を昇りきっている。

「うん。リリーナさんは僕らが助けます。皆さんは逃げて下さい」

エミルは言い、しいなと一緒に走り出す。リーガルだけは、

「できれば王立軍の出動を要請してくれ」

と、善後策を考えていたようだった。
「わかった」
「あんたたちが持ってるって資料はリリーナに渡してやってくれ。血眼になって探していたから」
頼んだよ、と口々に言う男たちに、
「はい！」
と、エミルは背中で返事をした。

神殿の内部を捜しながら進んだにも関わらず、エミルたちはなかなかヴァンガードと出食わさなかった。
通路から、いくつめかのがらんとした部屋に走りこんだエミルは、ハッと足を止める。そこに、思いがけなくロイド・アーヴィングの姿を見たからだった。
「ロイド！」
思わず叫ぶと、ロイドはちらりとエミルたちに視線をくれ、そのまま走り去る。
「待って下さい！　ロイドさん！」

エミルが追いかけようとしたときだった。
「おい、こっちだ！　マルタさまも一緒だ！」
バラバラとヴァンガード兵が走りこんでくると、たちまちエミルたちの進路を塞（ふさ）いでしまう。
「ど、どうしよう……」
エミルはじりっと後退する。マルタが、
「選択権はないみたい」
と肩をすくめた。
「そうらしいねぇ……来るよ！」
しいなの声にエミルは剣の鞘（さや）を払った。
幸い、兵士は四人しかいなかった。片付けるのに手間はかからなかったが、ロイドが逃げ切るには充分すぎるほどの時間だったろう。
「ロイドに逃げられてしまいましたね。コアを奪われてしまうかもしれません」
テネブラエが長いしっぽを神経質そうに揺らしながら現れた。
「けど今はロイドよりリリーナさんだよ。ヴァンガードの襲撃に巻き込まれていたりしたら……」
マルタが心配そうに眉を曇らせる。経験からして、ヴァンガード兵がこれっぽっちの

人数で動いているとは考えにくい。別部隊がいる可能性が高いのだ。
「そうだよね。わかってる。急ごう！」
エミルは頷き、仲間たちの先頭に立って駆け出した。
(うっ！)
しばらく行くと、突然息が詰まるような強い衝撃があった。
「こ……この匂い……！」
メロメロコウだ。エミルは腕で顔を覆い、やっとのことで息を吸う。細めた目に映る人影——それが誰であるのかは見なくともわかった。
「女！　このデクス様に惹かれて動けないって気持ちはわかるが」
くねくねとおかしな動きでポーズをとりながら喚いているのは、やはりあのデクスだ。アイアンメイデンを脇に置き、若い女性をぐっと睨みつけた。体は相変わらず妙な曲線を描き続けている。
「そこをどかないとぶち殺すことになるぜぇっ！」
「ち、違います！　あ……あなたみたいな人、興味ありませんっ！」
女性はポニーテールにまとめた髪をふるふると振りながらまずそう否定すると、
「ただこの先にあると思われるセンチュリオン・コアは危険なんです！」
と、必死に説明する。

あれがリリーナさんだな、とエミルは思った。
「デクス！　やめなさい！」
デクスの背後から、マルタが叫ぶ。ハッとデクスとリリーナがマルタを、そしてエミルを見た。リリーナの瞳が驚愕に見開かれる。
「アステル!?」
「マルタ！　邪魔してもらっちゃ困るんだよぉっ！」
デクスは素早くアイアンメイデンの蓋を開けると、中から取り出した大剣でマルタを薙ぎ払おうとする。すぐにそれはマルタをかばって前に出たエミルに突きつけられた。
「少年。いいのか？　ラタトスクモードとかいう奴にならなくても」
デクスは振り上げた武器をめちゃくちゃに操ると、
「わははははははっ！　どうだこの力！　どうだこの美しさ！　どうだこの香り！」
と、エミルを狂ったように攻撃し続けた。エミルはやっとのことでそれを防ぐことしかできない。
(どうしてラタトスクモードにならないの……。このままじゃ……)
「さあ！　俺さまに憧れて死ね！」
デクスが武器を高く掲げた。もう逃げられない。
(死んじゃうよっ！　助けて！　助けてよ、もうひとりの『僕』！)

エミルは、きゅっと目を閉じた。そのとき、心の中でラタトスクモードのエミルの声がした。
――そうやって、おまえはいつも俺に嫌な役割ばかり押しつけるんだな。
エミルが目を開ける。その赤い瞳には、情け容赦のない光があった。
「――開け、境界の扉！」
彼が左手をあげるやいなや、前方に黒い空間が口を開けた。それは激しく渦巻きながら大きさを増す。
リリーナが、デクスが、吸い込まれてゆく。アイアンメイデンまでが持ち主を追いかけるように黒い空間に消えたところで、
「エミル！　エミル、やめて！」
マルタが叫びながらエミルに駆け寄った。
「……」
「エミル！」
腕を掴まれ、ようやくエミルは空間を閉じる。リーガルとしいなが走って来た。
「――助かった、か。しかし……」
「ああ……。今のは一体……。それにリリーナは……」
ふたりは呆然と、今はもう何の痕跡も留めてはいない通路を見つめる。デクスとリリ

ーナなど、最初からいなかったかのようだ。
「エミル……、今のもラタトスクの騎士の力なの……？」
マルタが怖々訊ねると、エミルは、
「――多分な」
と肩をすくめて短く応えた。
「多分って、ずいぶん曖昧だねぇ」
しいなが呆れる。
「頭に浮かんだ言葉をそのまま言っただけだ。文句ならラタトスクに言ってくれ」
「もう一度、あの変な空間を作ることはできないの？　あの中にリリーナさんが……」
マルタに言われ、エミルはカッとなった。
「……知らねぇよ！　どうやってやったのかもわかってねぇのに、できる訳ねぇだろ！　別にいいじゃねぇか。リリーナなんて女がどうなろうと」
「何言ってるんだい！　そんな訳にはいかないだろ！　心配じゃないのかい」
しいなが真顔で詰め寄った。
「別に。それより邪魔な奴らも消えたことだし、センチュリオン・コアを探しに……」
パシ――ンッ！
突然、神殿の通路に乾いた音が響き渡る。マルタがエミルの頬を叩いたのだった。

「――てめぇっ！　何しやがる！」

「最低」

マルタはくるりとエミルに背を向けた。と、テネブラエが現れた。

「リリーナさんの行方（ゆくえ）は私に心当たりがあります」

「ホント!?」

マルタが思わず振り返る。

「はい。先ほどの技は、ラタトスクさまが私たちセンチュリオンを祭壇（さいだん）に戻すときに行っていた方法によく似ています。ですからどこかの祭壇に戻されたのでしょう」

「ラタトスクというのはそんなに簡単に人間を移動させることができるのか」

リーガルが訊ねた。

「いえ、センチュリオンのみの筈です」

首を振ったテネブラエは、

「ですから、あの中の誰かがコアを持っているのではないでしょうか。コアに対して働きかけた力が周囲を巻き込んでしまったのでしょう」

と推測した。しいなはこめかみを掻き、

「ん～、難しいねぇ。つまり、リリーナはどこにいるんだい？」

と、単刀直入（たんとうちょくにゅう）に聞いた。

「私たちもロイドもコアを持っていないセンチュリオンの祭壇だと思います」
「考えられるのは、雷か土……？」
マルタが考えながら言う。
「なら、まずはさっさとここの祭壇を見に行けばいい。行くぞ」
エミルは尊大な口調でマルタを促す。彼女はもう一度顔を背けてみせた。

祭壇の間に近づくにつれ、火花のスパークの量が増してゆくようだった。床にも電気が走っているのがわかる。
祭壇の前には先客がいた。ロイドだった。
「遅かったな」
エミルたちの気配に、彼はゆっくりと振り返る。その手には静かに輝くコアが握られている。
「――おまえがな」
エミルは鼻で笑った。
「なに？」

「もうちょっと早けりゃ、俺と会わずに済んだのにな」
「……」
祭壇の周りから譜陣の描かれた床まで、バチバチとスパークが走っては消える。ロイドはそれにちらりと視線を走らせた。
「赤トンボみてえにピュンピュン飛びやがって。今度は逃がさないぜ。さっさとコアをよこしな！」
エミルが喚く。
「……おまえにかまっているヒマはない」
「——へぇ……、やるのかい？　おもしれぇ」
ロイドは挑発に乗ろうともせず、エミルに忠告した。
「やめておけ。痛い目に遭うぞ」
「ほざけ、赤トンボ野郎！」
エミルが剣を抜いた瞬間だった。彼の体を雷が駆け抜ける。
「うわあああああっ！」
それはまるで、天井から床までを一気に貫く火柱のようだった。
「——だから忠告しただろ。それじゃあな」
体の自由の利かないエミルを横目に、ロイドは祭壇の間を横切ってゆく。

「待て、ロイド……」

エミルがようやく雷から解放されたときには、もう彼は姿を消していた。それでもなお追いかけようとしたとき、上方に巨大な光の玉が出現した。それは激しいスパークを繰り返しながら、次第にコウモリにも似た魔物を形作る。

「な、なにこいつ！」

じりっ、とマルタがスピナーに手を伸ばしながら後退する。

「コーデュロイです！」

テネブラエが叫んだ。

「やばいよ、これ。ピリピリくる」

魔物の体から零(こぼ)れ落(お)ちる火花を浴び、しいなが顔をしかめた。

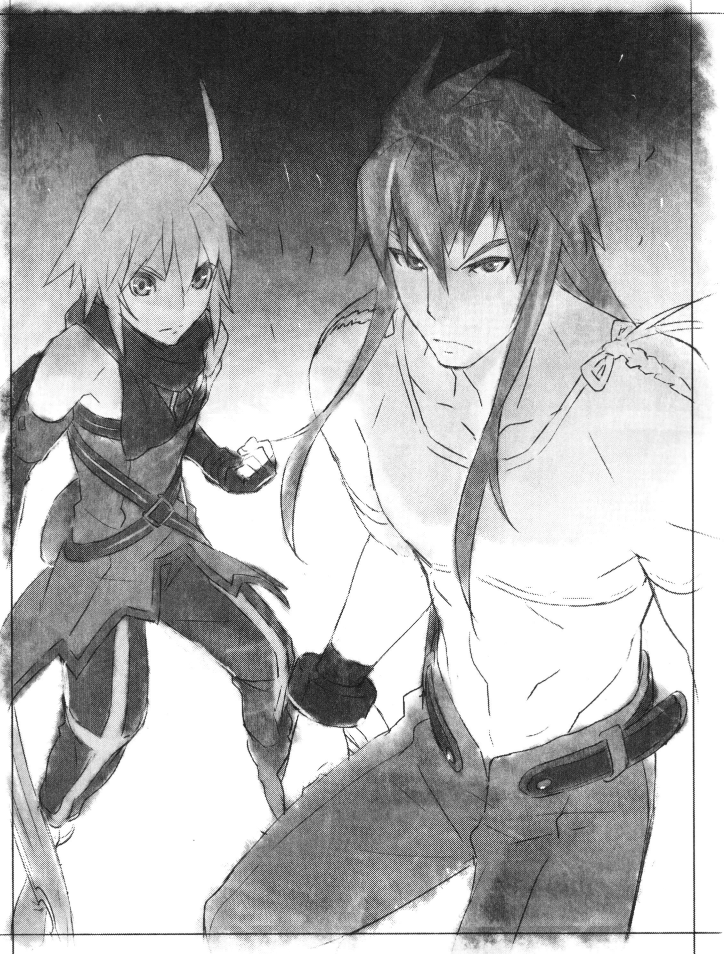
「くそったれ！　邪魔するんじゃねぇよ！」

ロイド追跡を阻(はば)まれたエミルは上目遣いに魔物を睨みつけ、手にしていた剣をいまいましそうに構える。

コーデュロイが翼を広げ、数体のウェアバット(ウルフ)を従えて降りて来た。

マルタはテネブラエに召喚(しょうかん)された魔物たちが小物に向かっていくのを視界の端に捉え、

「フォトン！」



援護のつもりでまずウェアバットたちの上に、強い光の爆発を起こさせた。その間に、エミルとしいな、リーガルがコーデュロイと向き合う。
「蛇拘符（じゃこうふ）っ！」
唸り声を上げながら迫ってきたコーデュロイに、しいなが札（ふだ）を振り回し、放った。動きの鈍った魔物は、リーガルの蹴りをまともに食らい、怒り狂う。
「行くぜ！　砕覇双撃衝（さいはそうげきしょう）っ！」
魔物に駆け寄り、エミルが突きを繰り出す。
「マルタっ、時間が惜しい」
「わかってる！」
こうしている間にも、ロイドは遠ざかってゆくのだ。
「鳳凰震脚（ほうおうしんきゃく）！」
マルタは回転斬りでコーデュロイのギザギザした硬質の翼を、そして腹を——こちらはいくらか柔らかそうだった——を傷つける。
（トニトルスのコア、早く取り返さなきゃ！）
だが、魔物はなかなか屈（くっ）しなかった。結局、エミルが魔王地顎陣（まおうちがくじん）で息の根を止めたときには、もうずいぶんと時間がたってしまっていた。
「ふう、やったか……。これでロイドを……」

点滅を繰り返している床の上から消滅する魔物に視線を当てたまま、剣を鞘に収めるエミルに、
「エミル。残念ですがトニトルスの気配は完全に消えてしまいました」
と、宙を泳ぐような足取りで近づいて来たテネブラエが言う。
「……フン、逃げ足の早い奴だ」
チッ、とエミルは舌打ちをした。
(また逃げられたか。くそっ！)
あたりをくまなく調べていたマルタが、
「リリーナさん……ここにはいないみたい……」
と、ため息をつく。
「ではソルムの祭壇ということになりますね」
テネブラエの言葉にしいなが困り顔で頷いた。
「ってことは地の神殿だね。あそこは地震の落石でふさがっちまってるんだよねぇ……そろそろ開通してるといいんだけど……」
「ではメルトキオの方に戻ることになるな。だがその前にシュナイダー院長にことの次第を報告すべきだろう」
リーガルの提案に、

「そうですね」
と、返事をしたマルタはさっさと歩き出した。完全に無視されているエミルはあわててしまう。
「——待てよ！」
「……」
「……悪かったよ。だから機嫌を直してくれよ」
いったんは足を止めたマルタだったが、そのまま祭壇の間を出で行く。
「マルタ……」
エミルの赤い瞳がわずかに翳った。

神殿の入り口まで戻ると、人声が聞こえてきた。
「ブライアン公爵！　ご無事でしたか」
王立軍の兵士がひとり、リーガルを認めて走り寄る。
「来てくれたか」
彼らはヴァンガードに殺されたふたりの兵士の亡骸を丁重に担架に乗せて運び出しているところだった。

「ヴァンガードは……」
「とりあえず今はここにはいない」
リーガルが答えると王立軍の兵士は敬礼し、仕事に戻って行く。
「ふん……。わざわざ弱い奴の死体を片付けるなんざご苦労なことだな」
「エミル！」
思わず呟いた言葉に、マルタが形相を変えてこちらに手を伸ばしてくる。
「な、なんだよ。何をそんなに怒ってるんだよ」
振り払おうとした手と手が触れた、そのときだった。あの光景が――目を開けてマルタを見ているにもかかわらず――目の前に現れた。
「うわぁぁぁああぁぁぁぁ!?」
彼はその場にうずくまってしまう。
「大丈夫かい？」
しいなの声に我に返ったエミルは立ち上がり、頭を抱えていた腕を降ろした。
「……あ……ああ。……また変な記憶が……」
「変な記憶？」
リーガルが訊ねた。
「おれがリヒターに殺される記憶だ。あんたの言う通り俺はアステル……なのかもしれ

ないな」
「それを知るにはリリーナに話を聞くしかない」
「ふん……」
エミルは強がってみせたが、うまくいかなかった。

地の神殿へ向かう道を歩きながら、マルタは押し黙ったままだった。エミルは仏頂面でその背中を見つめている。
と、しいなの目の前に白煙がたった。
「頭領。ご裁可いただきたい件があるのですが」
ミズホの民のつなぎだ。しいなを待っていたらしい。
「――こっちも急いでるんだけどねぇ」
頭を掻き掻き困ってみせるしいなに、リーガルが助け舟を出した。
「いや、ここで少し休憩してはどうだろう。急いだところで、神殿の入り口がふさがっていてはどうにもならぬのだし」
「私はかまいませんけど……」

すぐにマルタは頷いた。リーガルは何か思いついたのか、
「しいな。すまぬがつなぎの者に社への伝言を頼めないか？」
と切り出した。
「いいよ。じゃあ一緒に来とくれ。エミルたちはここで待ってるんだよ」
しいなは言い、エミルとマルタを残すと、三人でその場を離れて行った。
ふたりきりになってしまうと、さっきまで気にもならなかった風の音がやけに耳につく。エミルは青い草を踏みしめ、こちらに背を向けて立っているマルタに一歩近づいた。
「……マルタ、どうしてそんな風に怒ってるんだ？　俺が乱暴なのが、そんなに嫌なのか？」
「……」
マルタは答えない。ぎこちない空気が、とうとうエミルを爆発させた。
「マルタ！　ここまでおまえを守ってこれたのは俺の力だ！　確かにあのめめしい俺に比べたら、今の俺の方が嫌な奴かもしれないが、結局あいつは何もできないんだぞ！」
すると、マルタはくるりと振り返って言った。
「だけどエミルはリリーナさんを見捨てたりはしない」
「リリーナ？　はっ！　そりゃあいつが何者か知りたいからだろ」
エミルは両手を広げてせせら笑い、再び鋭い光を瞳に乗せる。

「俺は、俺が何者かなんてどうでもいい。俺はおまえを守る。他の奴はどうでもいいんだ」
「そんなの……そんなの私の好きなエミルじゃない！　あなたはエミルじゃない！」
マルタの瞳が潤んだ。拳でエミルの胸を叩く。
「エミルを返して！　エミルを出して！」
「……おまえまで……臆病者のあいつを選ぶのか」
何度も何度も叩かれ、エミルは低く呻くように言った。マルタはキッと顔を上げる。
「臆病で何が悪いの！　それでもエミルは必死に私を守ろうとしてくれた！」
「危険な部分は全部俺に押しつけてな！」
思わずエミルは怒鳴り返していた。
「あいつが俺に助けを求めたんだ。――もう、俺はあいつに俺を渡さない。渡さないからな！」
「！」
マルタは再びエミルに背を向けてしまう。そのせいで、エミルの悲しそうな表情を見ることはなかった。
しいなたちの足音が近づいてくる。
「お待たせ。何とか片付いたよ――って、なんだい、何か変な空気だね」

しいなはふたりの顔を覗き込んだが、エミルもマルタも黙りこくっているのだった。
「……喧嘩(けんか)でもしたのか？」
「ま、喧嘩するほど仲がいいっていうしね。ほっときなよ、リーガル」
「うむ……」
リーガルはしいなと顔を見合わせると、仕方がないなというようにため息をついた。

シュナイダー院長は、王立研究院の私室にいた。エミルが持っていた資料を見せられると、
「そうですか……。とりあえずリリーナの資料はお預かりします」
と、手を出した。エミルはわざとそれを乱暴に投げつける。
「エミル！」
マルタが非難の声をあげた。
「……ふん。俺はエミルじゃないんだろ」
「そう思うなら、エミルを早く出して！」
いつまでも反発し合っているふたりを、しいなが年長者らしい口調で叱(しか)った。

「ふたりともいい加減におしよ。シュナイダーさん、困ってるだろう」
マルタは、おろおろと手の中の資料とエミルを見比べている院長に、
「……ごめんなさい」
と謝った。だが、
「ふん……」
エミルは態度を改めるつもりはないようだった。成り行きを見守っていたリーガルが、おもむろに話題を変える。
「院長。院長はラタトスクに関してどの程度の知識をお持ちか」
シュナイダーは、ほっとした表情で口を開いた。
「生命の源（みなもと）であるマナの調整力を司（つかさど）っているらしいとは聞いています。おそらく魔物を用いてマナの偏（かたよ）りを調整していたのでしょう。かつて存在していたという、マナを生み出す大樹カーラーンの精霊と言われています」
なるほど、とリーガルは頷いてみせ、質問を重ねた。
「リヒターはラタトスクを魔王だと称しているようですが、それについては……」
「現地調査の後、そのようなことは言っていました。ですが、それはあり得ないことです。魔王などという存在があるとすれば、それは魔界ニブルヘイムの魔族ということになるでしょう。ですが、ラタトスクは精霊。こちら側の生物です」

「ニブルヘイム……か」
しいなが意味ありげに呟いた。
「もしかして、しいな、ニブルヘイムへ行ったことがあるの？」
魔界なんでしょ、とマルタが驚く。
「まさか！　ただ、その片鱗を見たことはあるよ」
シュナイダーは、
「ラタトスクのことなら、こちらよりメルトキオの精霊研究所の方が詳しいかもしれません。リリーナも現在は、主にあちらを拠点にして資料を整理していますから」
と、教えてくれた。
「どちらにしろメルトキオの方へ戻るのだ。寄ってみてもいいかもしれぬな」
リーガルが言うと院長は、
「リリーナを頼みます」
と頭を下げた。

メルトキオの精霊研究所の受付では、若い所員が書類の整理をしていた。

「……しぃな！　最近忙しそうだな」
懐かしそうに笑ったが、エミルを見るなり声をうわずらせた。
「アステル……!?」
「……けっ、またかよ」
エミルは吐き捨て、プイと横を向く。
「ああ、ごめんよ。こいつ、口が悪くてねぇ」
しぃなは愛想笑いでごまかし、
「それよりちょっと聞きたいことがあるんだけど……」
と、すぐに真顔になった。
「ラタトスクのことなら確かにリリーナが調べていたな」
しぃなの話を聞き終わった所員は、そう言って頷いた。
「アステルの遺した資料を引き継いでね。地下にまとめてあったと思うから、目を通していくといいよ」
彼は四人の訪問者を均等に見ながら、親切に教えてくれた。最後にエミルに視線を戻すと、ひとりごちる。
「しかしアステルじゃないとは……信じられないな……」

地下の資料棚の前にいた所員たちは、しいなを見ると快く場所を譲ってくれた。エミルは礼も言わず、きちんと整理されたファイルを片っ端から調べてゆく。やがて、
「……どうやらこいつみたいだな」
と、青いファイルをマルタに突きつけた。彼女はその乱暴な仕草を無視して資料を開いた。たどたどしく文字を追ってみる。
「魔界の扉──ギンヌンガ・ガップを護りし者。その名をラタトスクという……」
「テネブラエ。魔界って、シュナイダー院長も言ってたニブルヘイムのことかい?」
しいなの問いに、テネブラエは「はい」と答えた。
「ならば、ギンヌンガ・ガップというのはニブルヘイムとこの世界を繋ぐ扉と考えていいのか」
リーガルもファイルを横目で見ながら訊ねる。
「そうですね。ラタトスクさまは扉の守護者ですから」
「そんな存在が魔王になるなんて考えられないよ。むしろ、この世界の守護者じゃないか」
しいなが首を振った。

「ふん。リヒターの奴、ラタトスクの力でハーフエルフを差別するこの世界に復讐しようなんて考えてるんじゃないか？」

「……」

「何だ」

しいなに見つめられて、エミルは彼女を睨み返す。

「いや、ラタトスクモードだとリヒターのこと、これっぽっちも庇（かば）わないんだねぇ」

「ふん。俺がもしもアステルなんだとしたら、リヒターに殺されかかったのかもしれないんだぜ。どうして庇う……」

ふいにエミルは頭を抱え、体をふたつに折った。

「リヒターさんはそんな人じゃ……」

「エミル!?」

元のエミルの出現に、マルタは敏感だった。が、彼をはねのけるように、

「おまえは出てくるんじゃねぇっ！」

ラタトスクモードのエミルが体をのけぞらせた。ふたりのエミルがひとつの体を取り合っている様子に、リーガルが声をかける。

「……エミル。今、おまえの中で何が起きているのだ？」

どちらのエミルに聞いているのか、リーガルも混乱していた。

「――どうでもいいだろ」
吐き捨てた口調から、ラタトスクモードのエミルのままだとわかる。しいなはカッとなり、
「良くないよ！　テネブラエ、これは一体どういうことなんだ」
と、脇に控えていたテネブラエを問い詰めた。
「マルタさまを守ろうという意識が強くなっているだけだと思いますが……」
「……そう……なのかねぇ……」
疑り深い目を向けられても、エミルは平然としていた。そして、何事もなかったかのように、
「……ここにある資料で目新しいものはもうなさそうだな。早いトコ、この陰気臭い場所から出ようぜ」
と、さっさと踵を返して行ってしまった。
マルタたちが急いで追いかける。と、受付で先ほどの所員が、
「もういいのか？」
と、声をかけてきた。
「ああ、ありがとう」
しいなが礼を言う。彼は思い出したように続けた。

「そうだ、マルタっていったっけ」
「はい？」
「額のそれ、ラタトスクのコアなんだよね」
「は、はい……」
マルタは前髪に手をやり、とまどいながらも返事をする。
「体、大丈夫かい？」
「ど、どういうことだよ」
しいながびっくりしてマルタの体を上から下まで見た。特に変わったところはなさそうだ。
「リリーナから聞いたことがあるんだ。センチュリオン・コアの構成とエクスフィアの構成は似ているって。有機物か無機物かとか、他にも細かな違いはあるみたいだけど」
「だから何だ」
エミルがじろりと所員を見、先を促す。
「エクスフィアってのは、そのまま体につけると有毒なものだったんだ。最終的にエクスフィアに乗っ取られてしまう。ラタトスク・コアというのもセンチュリオン・コアに似ているなら、気にかけておいた方がいいんじゃないか？」
リーガルがマルタの前に立つと、

「マルタ、どこかうつろな感じはするか？　他に何か変化は……」
と、訊ねる。かつてエクスフィア鉱山を所有していた彼は、エクスフィアの害に詳しかった。
「……あ、ははは、大丈夫。何ともないですよ」
マルタは、みんなの視線を一気に浴び、手のひらをひらひら振りながら笑った。
「大体そんな危険なものならテネブラエが教えてくれると思うし」
「……そ、そうだよね。だけど、念のため調べてもらうかい？」
しいなが気遣わしげに聞いたが、マルタは相手にしなかった。
「平気平気。ホントに。超元気だもん。それよりリリーナさんが気になるよ」
「そういえば、地の神殿の道が開通したらしいって話を聞いたけど」
所員が言うのを聞き、マルタは浮き足立つ。
「なら、すぐ行かないと！」
「……わかったよ。でも調子がおかしかったらすぐに言うんだよ」
しいなはなおも心配そうに念を押した。

精霊研究所を出ると、あたりが騒がしい。雷の神殿で見たのと同じ甲冑を身につけた男たちが、忙しそうに行き来している。王立軍だ。
「何かあったのかい」
しいなが兵士のひとりを捕まえて聞いた。
「地の神殿の落石をどかしたら、奥から怪我をした女が見つかったんだ」
と、兵士は応えた。
「まさかリリーナさんじゃ……」
マルタがしいなと顔を見合わせる。リーガルが、
「その女性は今どこにいるのだ？」
と兵士に訊ねた。
「まだ神殿にいるよ」
それを聞くなり、エミルがさっさと大股で歩き出す。
「エミル！　どこへ行くんだい」
「リリーナって女のところに行くんだろ」
ぶっきらぼうに背中で答えるエミルに、しいなはため息を漏らす。
「……」
マルタはエミルの頑(かたく)なな様子をじっと見つめている。

「よし、では行こうか」
リーガルに促され、しいなとマルタはあわててエミルの後に続いた。

気にするまいとすればするほど、マルタの足どりは重くなる。さっきあんなに強がってしまった自分が、なんだか惨めだった。
「おい……大丈夫か？」
立ち止まってしまったマルタに気づき、エミルが草を踏みしめながら戻ってきた。
「……別に、平気」
そっけない返事に、
「……あいつじゃなきゃ、駄目なんだな」
エミルは悲しそうに目を閉じるとうつむいた。
(なんとかなるだろ)
「どうしたの、マルタ？」
「エミル！　元に戻ったの!?」
優しげなエミルの声に、マルタの表情はぱっと輝く。

「う、うん。それよりマルタ、どうしたの?」
「……ううん、何でもない」
「嘘つかないでよ。わかってるよ。マルタ、本当は不安なんでしょ」
(うまくいってるじゃねぇか)
「……エミルにはわかっちゃうんだね」
ふうっ、とマルタは吐息を漏らす。
「私、エクスフィアって石のこと、聞いたことある。最終的には化け物になっちゃうんだって。もしも……ラタトスクを解放するのが間に合わなかったら、私もそうなっちゃうのかな?」
「テネブラエは、おまえにそんな危険なことさせないよ」
「おまえ……?」
マルタの怪訝そうな声に、エミルはぎくりとする。
「……あ、ラタトスクモードの口調がうつっちゃった」
あわてて言い訳し、今度は用心深く言葉を選ぶ。
「とにかく、大丈夫。絶対。マルタのことは僕が守る。ヴァンガードからもラタトスクの寄生からも」
「……うん。ありがと。大丈夫。それにラタトスクは危険な存在じゃないって信じてる

から」
そのとき、前方からしいなの声が飛んできた。
「ふたりとも！　おいてくよ！」
「うん！」
マルタは元気のいい返事をし、それからもじもじと恥ずかしそうに言う。
「ねぇ、エミル。もしも間違ってたらごめん。今のキミはラタトスクモードのエミルだよね」
「！」
エミルは思わず顔を上げてマルタを見てしまう。
（しまった！）
「ごめんね。私、ずっと怒ってて、嫌な奴だよね。なのに、なぐさめようとしてくれたんだね」
エミルの瞳の色を確認して、マルタは微笑んだ。
「やっぱりキミもいつものエミルと同じで優しいんだね」
「……な……べ……別にそんなんじゃねぇぞ！」
エミルはマルタに背を向け、唇を尖らせた。
「ただ、おまえがいつまでも怒っててうぜぇから……」

「うん、うざかった。反省してる。ごめん」

マルタはさっぱりとした顔で、ぴょこんと頭を下げる。

「だからキミも人の命なんてどうでもいいなんて言わないでね」

「もう何してるんだい！」

しいなの焦(じ)れた声が再び聞こえた。

「あ、ごめんっ！」

マルタが走ってゆく。それを見送って、エミルは再び――今度は演技ではなく――うつむいた。

「……俺は優しくなんてねぇよ。ただおまえが助けてくれって言ったから助けようと思っただけだ。だから……」

「まさか……エミル、記憶が……」

マルタと入れ違いに現れたテネブラエが、低く訊ねる。彼はエミルが微かに頷いたのを見てとった。

「……俺はおとなしく戦いだけ引き受ける。もしも、もうひとりの俺が足を引っ張りそうになったら――頼むぞ、テネブラエ」

「……わかりました」

闇のセンチュリオンは、しっかりとそう承諾(しょうだく)した。

13

ふいに、エミルの閉ざされていた意識が息を吹き返した。
(あ、ここ……)
ここは知っている。前にも来たことがある。
「……あの……ここ地の神殿なんですよね。僕らどうしてここに……」
エミルは同行している仲間たちに問いかける。
「ん？　あれ？　いつの間にかラタトスクモードがとけてる」
しいながエミルの顔を覗(のぞ)き込(こ)んで目を見張った。
「……すみません。僕、最近ラタトスクモードの頃の記憶がほとんどないんです」
「そのようだな……。どこから記憶がない？」
リーガルが訊ねる。エミルはちょっと考え、
「雷の神殿で、デクスに殺されそうになったあたりです」
と、答えた。そう、確かもうダメだと思った記憶がある。

「じゃあ、かいつまんで説明するよ」
しいなは気軽に説明役を引き受けた。
話を聞き終わったエミルは、マルタがなぜか少し複雑そうな顔で自分を見ていることに気づいた。ラタトスクモードの自分が何か嫌なことでも言ったのだろうか。
「……ありがとう。ようやく状況がわかったよ。迷惑かけて……ごめんなさい」
「気にしないどくれ」
しいなが笑ったとき、ひとりの兵士が小走りに通りかかった。王立軍だ。
「リリーナは……ここで見つかった女性はどうした？」
リーガルが声をかけると、兵士は足を止めずに教えてくれた。
「この奥にいる。これから運ぶところだ」
応急処置が終わり、兵士たちは搬送のための通路の安全を確認しているところだという。
「行きましょう！　リリーナさんが心配です」
「エミル……。うん、行こう」
それまでどこか浮かない顔をしていたマルタが、うれしそうに言った。

リリーナが座っている通路脇には、除去した落石が寄せてあった。
「……大丈夫。歩けます」
差し出された兵士の手をやんわり断り、リリーナは自力で立ち上がった。足首に痛みが走ったが、たいしたことはなさそうだ。
そのとき、見覚えのある顔がいくつか、走りこんでくるのが見えた。
「リリーナさん！」
「あなたたち……雷の神殿で……」
彼女の視線はやはりエミルに吸い寄せられてしまうようだった。
「すみません……。僕のせいで……」
「……あなたのせいじゃないわよ」
こんなに似ているのにあの人ではないのだと思いながら、リリーナはうなだれている少年に向かって微笑んでみせる。
「元々、あそこは次元境界が狂っていたの。だから、立ち入りが禁じられていたんだもの」
「だけど……僕が……その、ラタトスクの力で……」
「あなたのその容姿(ようし)で、ラタトスクなんて言われると思い出しちゃうわ」

「アステルさん……ですか」
マルタもエミルの横顔に視線を投げかける。
「……ええ。アステルは私の大切な人だったから。リヒターに殺されたけれど」
ハッとエミルが顔を上げる。
「本当にリヒターさんがアステルさんを殺したんですか!?」
「……信じたくはなかったけど、そうとしか思えないわ。アステルが遺(のこ)した、ラタトスクに関する研究資料を根こそぎ奪って姿を消したんだもの」
そう言って、リリーナは微かに眉(まゆ)を寄せた。痛むのは足だけではないのだ。
「すみません。そろそろいいですか」
兵士が遠慮がちに声をかけてきた。リーガルは彼に向かってちょっと手をあげる。
「引き留めてすまない。だが、もうひとつだけいいだろうか」
「ええ」
リリーナは頷いた。
「アステル殿には何か特徴がなかっただろうか。ほくろとかあざのような……」
「首に星形のあざがあったわ」
(星形の、あざ……!?)
エミルはドキリとした。顔が強張(こわば)るのがわかる。

「ごく小さなものだけど……それが何か？」
「いや、何でもない。ありがとう」
リーガルはあっさりと礼だけを述べた。
「そうだ。こっちも伝えることがあるの。一緒に飛ばされてきた、ヴァンガードの香水がきつい男だけど……」
リリーナは今度ははっきりと顔をしかめる。
「デクスのこと？」
マルタが聞くと、彼女は「そう、そんな名前だったわね」と頷き、
「あいつ、部下と一緒に、祭壇（さいだん）からさらに奥の方へ歩いて行ったわ。まるでそっちに出口があるって確信しているみたいだった。あなたたち、奴らと敵対してるんでしょ？一応知らせておくわね」
と、教えてくれた。
それから彼女は待っていた兵士の肩を借り、片足をひきずるようにして歩いて行った。
「エミル、星形のあざというのは……」
リーガルの視線を避け、エミルは首に巻いたマフラーを手で押さえる。
「……鎖骨（さこつ）の上の方にそれらしいのが……あります」
「じゃあ、あんたはやっぱりアステル……」

息を飲むしいなに、エミルは必死で首を振る。
「わかりません！　そんなの実感がない……」
そのとき、
「……キミはキミだよ」
マルタの言葉が静かに、だが力強い響きでエミルの耳に流れ込んできた。
「マルタ……」
「名前なんて、関係ない。昔アステルって人だったとしても、キミがキミだってことは変わらないよ。……ちょっぴり怖がりだけど優しくて、一生懸命なキミだってことは」
彼女は一生懸命、エミルのために言葉を探りあてる。
「だから、無理に思い出さなくてもいいよ。時間が解決してくれるから。ね？」
「……マルタ……ありがとう……」
やっと、エミルはそれだけ唇を動かした。
「そうだね、マルタの言う通りだよ。ごめん、あたしもうっかり追いつめるようなこと言っちまってさ」
しいなが頭を掻く。
「そんなことないです。僕がいっぱいいっぱいになっちゃったからいけないんです——」
ふっ、とエミルが微笑んだ。

「でも、もう大丈夫。僕にはマルタも、みんなもいるから」
自分が何者であったとしても、こんなに心強いことはないよね、とエミルは思う。
「うむ。我らは知り合って間もない。歳も離れている。だがそれでも、私はおまえの友としてできうる限りの協力をしよう」
「はい！」
リーガルの言葉に、エミルはしっかりと頷いてみせた。
「ところで皆さん、この後はどうしますか」
テネブラエが聞いた。
「ここにはソルムのコアがあるんだよね」
マルタは言ったが、
「……あるとは思えません」
闇のセンチュリオンははっきりと否定する。
「ここに飛ばされるには、次元境界に吸い込まれた人間が、ソルムのコアを持っていなければなりませんから」
「ってことは……ヴァンガードの奴らが持ってるってことかい？」
「そうなるな」
しいなとリーガルが顔を見合わせる。あのとき、雷の神殿には相当数のヴァンガード

が侵入していたはずだった。
「だったらデクスたちを追いかけないと」
エミルはいてもたってもいられなくなった。
「うん。とにかく祭壇まで行ってみよう」
走り出したマルタのあとを追って、エミルたちも動き出した。

「……やっぱりソルムのコアはないね」
空（から）の祭壇を目にして、マルタはため息をついた。
「ならば、やはりすでにヴァンガードが手に入れていたと考えるべきだな」
リーガルが腕組みをする。
「けど、ここで行き止まりだよね。デクスたち、どこに行っちゃったんだろう」
祭壇の後ろへ回ってみたエミルは首をひねった。そこには壁があるだけだ。
「……どこからか、魔物の気配を感じます。もしかしたら……」
ゆっくりと頭を巡らせていたテネブラエが告げる。
「魔物……？」

戻ってきたエミルは注意深くあたりを見回してみた。そこにはやはりデクスの姿も魔物の姿もない。
(待てよ。前にもこんなことが……)
「隠し通路でもあるのかな。探してみるよ」
彼は言い、近くの壁を調べ始めた。するとほどなく、本当に隠し通路が見つかった。
「やった！」
メロメロコウの痕跡が残っていないかとくんくんあたりの匂いをかいでいるエミルに、
「……なんかエミル、成長した？」
マルタが眩しそうな表情で問いかける。
「えっ」
驚いて振り返ったエミルは、マルタを見て笑顔になった。
「……もし成長したなら、きっとマルタやみんなのおかげだよ」
「ふふ……」
「あはは……」
ふたりはそれからしばらく見つめ合ったまま笑い続けた。
「喧嘩してたと思ったら、今度は見せつけられちゃうって訳かい」
しいなが半ば呆れた声で言う。

「えへ、いいでしょ、しいな」
マルタは幸せそのものの表情で、可愛らしく首を傾げてみせた。
「あはは、こいつはやられたね。ふたりが仲がいいことはわかったから、その通路の奥に行ってみようよ」
「うん」
エミルもまだその唇に笑みを乗せたまま、先に通路へと踏み込む。ひどく暗いのに、不思議と怖さは感じなかった。
通路を進むうち、キィーキィーという高い音が聞こえてきた。テネブラエが気配を感じたという魔物の声だろうか。やがて急に視界が開けると、果たして広場のような場所に巨大な魔物が四体並んでいるのが見えた。
「……あれはルーキン！」
テネブラエがエミルたちに注意を促す。
「い……いもむし……」
しいなが気持ち悪そうな声を出す。魔物は蝶（ちょう）や蛾（が）の幼虫によく似ているように見えた。が、何故か体の後ろにそれぞれ一台ずつ、人も充分に乗れそうな大きさの荷車を引いている。
さらに魔物を観察していたマルタが、

「なんかあの子たち、アリスが使ってるのと同じような機械つけてるけど……、まさか……」

と眉をひそめた。

確かに、首にあたる部分に小さな箱のようなものが見える。

「はずしてあげよう」

すぐさまエミルは魔物に近づこうとした。ヘリオンのことを思い出したのだ。

(あのときは僕もテネブラエも大変だった……それでも僕たちはこうして生きてる。だけど、操られていた魔物は……)

ヘリオンが空中高く粉々に砕け散った光景が脳裏に甦ったとき、テネブラエが鋭く叫んだ。

「いけません。怒りで我を忘れています。鎮めなければ！」

ルーキンたちはギィギィと声を濁らせ、エミルたちに襲いかかってきた。怒りのためだろうか、さっきまで黄色かった触角が心なしか赤く染まって見える。

「こら、じっとしなさい！」

マルタがスピナーで機械を留めているロープを切ろうとするのだが、ルーキンたちはそのつどくるりと丸まってしまい、うまくいかない。それどころか、油断するとこちらが危ない。

「手荒なことはしたくないんだけどな……」
エミルは仕方なく、四体の魔物に刃を振るう。薄闇の中、体を傷つけずにロープだけ斬るのは簡単なことではなかった。
ようやくすべての機械を取り去ると、
「キィーキィー！」
ルーキンたちは我に返ったような鳴き声をあげた。
「……どうやら落ち着いたようです」
テネブラエがほっとしたように言う。
ルーキンたちは穏やかにお互いの鼻を押しつけ合うようにしている。まるで何ごとか相談でもしているかのようだ。
「やっぱりあの子たち、ヴァンガードに……？」
マルタがテネブラエに訊ねた。
「はい、操られていたようですね。ここから隣の大陸にある鉱山への乗り物として使われていたようです」
「……鉱山……？　まさか……エクスフィア鉱山ではないだろうな」
鉱山と聞いてリーガルは眉を曇らせる。
「そこまではなんとも……」

テネブラエが言葉を濁したときだった。

「キィキィキィ」

一体のルーキンが、ごろごろと荷車を引いてテネブラエの前までやって来ると、顔をもぞもぞ複雑に動かしてみせる。テネブラエは、

「興味があるなら乗せていくが、と言っています。どうします？」

と、エミルたちを振り返った。

「乗せてもらおうよ。リーガルさんもこの先が気になってるみたいだし」

「そうだね」

エミルとマルタの言葉に、

「ありがとう」

リーガルは気遣わしげな表情のまま、礼を述べた。

「キィキィ？」

ルーキンは太すぎて曲がらない首を揺らし、自分たちの後ろの荷車に乗れと促した。

四体のルーキンの荷車にエミルたちが分乗するやいなや、

「うわっ!?」

魔物は思いもよらぬ速度で走り出す。そして、すぐに停まった。

「キィ――」

「もう着いたと言っています。降りてください」
「……す、すごいスピードだったね」
荷車から降りたエミルは、ふらふらしながらテネブラエに言う。
「目が回る……」
マルタも足元が定まらない様子だった。しいなが苦笑しながら腕を支えてやっている。
ルーキンたちが戻って行くごろごろという空の荷車の音も耳に入らぬように、ひとりリーガルだけが呆然（ぼうぜん）とその場に立ち尽くしていた。
崩れた鉱道に残る通行止めの標識やロープ——、土の色も、その匂いさえも彼のよく知るところだった。
「なんということだ……。ここはトイズバレー鉱山だ」
「トイズバレーって、確か……」
マルタがあたりを見回しながら首を傾げた。
「うむ……我が社が所有していたエクスフィア鉱山だ」
低く呻くようにリーガルが頷く。
「爆破してエクスフィアもろとも地中に埋めたのだが、このような形で外部とつながっていたとは」
「まさか、ヴァンガードの奴ら、ここからエクスフィアを掘ってるんじゃ……」

「……確かにパパ、エクスフィアを探していたけど……」
しいなとマルタが不安そうに言うのに、
「……いや、この辺りはあらかた掘り尽くしている。もっと奥を掘らないとないだろう」
と、リーガルは否定した。
「しかし、いつ悪用されないとも限らぬな。とにかくここを出てレザレノ本社に知らせなければ……」
「……その前に地上への通路が塞がってないことを祈るよ」
勝手知ったる鉱道の出口へ向かうリーガルの背中に向かって、しいなが言う。
「塞がってたらどうするの」
エミルは、ふと疑問に思って訊ねた。
「そりゃ、今まで来た道を引き返すのさ」
当然じゃないか、としいなが答える。
もうあの超高速の荷車に乗るのは嫌だな、とエミルは身震いした。
幸いなことに、エミルたちは無事に外に出ることができた。爆破にも耐えたということは、それだけ鉱山の岩盤が頑丈だったのだろう。結果としてヴァンガードに目をつけ

られることになってしまったのだ。
「やっと地上だよ！　やっぱり太陽ってのはいいもんだねぇ……」
思い切り伸びをして、しいなが浮かれた口調（くちょう）になる。
「僕もそう思う」
「私も！」
降り注ぐ太陽の下、賛同するエミルとマルタを、テネブラエは渋い顔で眺めている。
「残念です。みなさん、闇のすばらしさをご理解いただけないとは」
「……暗いところにいい思い出がないのでな」
リーガルがちらりとしいなを見た。
「……あ、あはははは……はは……」
暗い落とし穴に落ちてはリーガルに助けてもらっているしいなは、ごまかし笑いをし、
「さ、それよりレザレノの本社に行くんだろ」
と話題を変えた。
「うむ。アルタミラに本社がある。すまぬが寄り道させてくれ」
「もちろんです」
鉱山に入れないようにしなくては、いつまたヴァンガードに悪用されるかわからない。
急いでリーガルさんの会社に行かなくては、とエミルは思った。

「ここがアルタミラ……！」
エミルは歓声をあげた。
道々マルタやしいなから、アルタミラは〝ゆりかごから墓場まで〟をコンセプトにレザレノ・カンパニーが総力をあげて造った、一大リゾートだと聞かされていた。しかも街の中のどこへ移動するにも、乗り物に乗って行けるという。
（海だ！　遊園地もあるし、ホテルも見える……！　みんな、楽しそうだなぁ）
歓声をあげて波と戯(たわむ)れる家族連れに、エミルは目を細めて眺め入った。が、マルタは「……あれ」と首を傾げた。
「前来たときはもっとにぎやかだったのに……」
「異常気象がひどくなって、海が危険になったのでな」
リーガルも幾分渋い顔になっている。
「リゾートとしての運営規模を縮小せざるを得なくなってしまったのだ」
そうなのか、とエミルは驚いた。
「僕、これでも充分にぎやかだと思った……。本来の街を見てみたかったな」

するとリーガルは優しく微笑み、
「ラタトスクが目覚めれば状況は変わるのだろう？　そうしたらおまえとマルタを招待しよう」
と約束してくれた。
「ホントですか！」
エミルは心が浮き立つのを覚えた。マルタはその場でぴょんと跳ねてみせる。
「良かったね、エミル」
「うん！」
「これはますますラタトスクの解放、頑張らないと！」
ふたりは顔を見合わせ、何度も頷きあった。ラタトスクを目覚めさせるまでにはまだ時間がかかりそうだか、その日が来ないかもしれないなどとは思いたくない。きっと来る、とエミルは自分に言い聞かせる。
「どこにレザレノ本社があるんですか？」
エミルは本来の目的を思い出すと、訊ねた。
「奥のビルだ。行こう」
彼方（かなた）にそびえ立つひときわ高い建物を示した。

エミルたちは、エレメンタルレールでレザレノ本社まで行くと、巨大なビルを最上階まで昇った。

「リーガルさま！」

四人服から執務用の正装に着替えたリーガルを社長室で迎えたのは、ジョルジュだった。白髪で品のいい老人だ。

「ジョルジュ。心配をかけたな」

「ご無事で何よりでございます」

レザレノ・カンパニーの社長としてリーガルの留守をしっかりと守っていたジョルジュは、恭しく一礼する。

「うむ。ところで帰って早々だが、大事な話がある」

「何でございましょう？」

「エクスフィア鉱山のことだ。実は……」

リーガルは、現在の鉱山の様子を手短に説明する。エミルたちはおとなしく背後に控えていた。

「……というわけで、再度の爆破と地の神殿との分断が必要になりそうだ」

「かしこまりました。さっそく調査隊を派遣して……」
ジョルジュが今後の仕事の確認をしかけたとき、ノックもそこそこに、レザレノの社員らしき若い男が転がるように部屋に入って来た。
「た、大変です！　ヴァンガードが街で暴動を起こしています！」
「そんな！」
エミルは思わず声をあげた。
「いきなり暴動だと？　どういうことだ」
「それが……よくわからないのですが、ヴァンガード首領の娘を出せ、と……」
会長に問いただされ、しどろもどろになった男の言葉に、マルタは、
「あっ……！」
と口元を押さえる。タイミングがよすぎるのは、ヴァンガードに監視されていたせいだろう。浮かれていた自分に腹が立った。
「我が社がその娘を連れ去り、アルタミラに監禁している。その報復措置だと言っているのです」
「そんな……言いがかりじゃない！　話をつけてくる！」
マルタはカッとなり、社長室から駆け出して行く。
「マルタ！」

エミルが叫んだが、彼女は止まらない。
「ひとりで行かせるのは危険だよ。マルタを追いかけよう！」
「ああ」
リーガルはしいなに頷き、
「ジョルジュ、アルタミラ全体に非常事態宣言を出し、外出禁止を徹底させてくれ」
と、ジョルジュに命じた。
「おまかせを」
ジョルジュが了解したのを見て、
「我々も急ごう」
リーガルはしいなと共に廊下に飛び出し、エミルの後を追った。

「マルタ！　待って！」
エミルは、カーゴ乗り場にいるマルタを見つけると、叫んだ。背後からしいなたちの足音が響いてくる。
「みんな……」

振り向いたマルタをリーガルが諭す。

「無策で行くのは危険だ。ひとまず落ち着け」

「だけど……私のせいでアルタミラが……」

マルタは俯いた。そのとき、外の様子を窺っていたテネブラエがハッと身を硬くする。

「ホークが来ます！」

リーガルが窓から覗くと、確かにヴァンガードのホークがこちらに歩いてくるのが見えた。

「まずいな。ひとまずどこかに身を隠さねば」

「とりあえずホテルへ逃げよう。あそこなら、観光客に紛れ込める」

せわしなく考えを巡らせていたしいなが、そう提案する。しかし、マルタは賛成できない様子だった。

「でも関係ない人たちに迷惑が……」

ここで騒ぎを起こすのも良くないよ、としいなは言い聞かせる。

「レザレノがマルタを拉致したってのが本当だと思われちゃうもの」

「……うん……。ごめんなさい……」

ひとりで突っ走ってしまった自分が恥ずかしくて、マルタは小さく呟いた。

ホテルレザレノのロビーに駆け込んだところで、

「しまった！　あんたはヴァンガードの！」

しいながあわてて足を止める。アリスがやって来るのが目に入ったからだ。エミルたちはしっかり見つかってしまった。

「アリスちゃんでーす♡」

と、自分の髪をさらりと撫でてみせた。それからいつもの鞭をペチペチと鳴らしながら、にっこり笑う。

「凄い偶然！　やっぱりアリスちゃんが可愛いからマーテル様もアリスちゃんの味方なのね～」

「……マルタは渡さない」

エミルは、マルタを隠すように前に出た。

「へ～、じゃあやっぱり、ブルートさまの大切なひとり娘マルタちゃんを本当に拉致したってワケ？」

「リーガルさんは、そんなことしてない！　私たちを心配して、協力……」

そんなことはどうでもいいの、とアリスはマルタを遮る。

「少なくともマルタちゃんはレザレノにいてブルートさまのところに帰ってこない。それで充分なの。アルタミラを制圧する理由はね」
「く……」
マルタは悔しそうに言葉をつまらせた。
「本当ならここで痛めつけちゃうんだけど、今日はブルートさまの命令だから我慢するわね。――今夜ひと晩、猶予をあげる」
アリスはとろけそうな微笑を浮かべ、
「私たち、カジノを拠点にしているの。マルタちゃんを帰してくれれば街の人間に危害は加えないわ。でも、もしもマルタちゃんが戻ってこなかったら、皆殺しにしちゃうから♡」
と、表情とは裏腹の恐ろしい言葉を口にした。
「何だと……」
リーガルがぎりりと歯軋(はぎし)りするのを見て、アリスはまたうれしそうに笑う。
「ふふ、街のあちこちに爆弾を仕掛けてあるの。人質を逃がそうとしても無駄よ。街の周囲は私たちの仲間が押さえてるから。じゃ、しっかり考えてね～」
軽やかな歩調でアリスはロビーを横切り、去ってゆく。それを見送り、マルタは、
「……私、パパのところに……」

と言いかけた。

「マルタ！」

エミルがダメだというように首を振る。しいなもマルタに向き直った。

「まあ待ちなって。ロイドなら言うだろうよ。何か方法がある筈だって。まずは部屋を取って、そこでゆっくり考えよう」

「しいなの言う通りだ。とりあえず最上階のロイヤルスイートを使ってくれ」

リーガルは言い、

「私は何とか街の人間を逃がす方法がないか社の者と善後策（ぜんごさく）を練る」

と、大股にロビーから出て行った。

「ここにもミズホの民（たみ）は入り込んでる筈さ。何か手はないか、ちょっと調べてくるよ。ふたりは休んでるんだよ」

フロントが開いてたら手続きしておくからね、と言い置いて、しいなも足早に去って行く。閑散（かんさん）としたロビーは、それだけで気が滅入りそうだった。

「……マルタ、行こう」

「……うん」

マルタは頷き、エミルと共にエレベーターホールの方へ歩き出した。

ロイヤルスイートルームの大きな窓からは、暮れなずむ空とその下に広がるリゾート施設が一望できた。

だが、マルタとエミルのふたりには、海を眺める余裕もない。

「……結局、私の責任なんだ……。私が甘かったから……」

「そんな風に考えちゃ駄目だよ」

エミルは、豪華なソファに座ろうともせず、立ったままのマルタに言った。

「マルタは、ヴァンガードがラタトスク・コアで暴動を起こそうとしてるのを止めようとしたんだ。それは悪いことじゃないよ」

マルタは顔をあげ、それからまた目を伏せてしまう。

「……だけど、結局私は子供で……無力なんだって思い知らされた。ラタトスクのコアに寄生されなかったらとっくに失敗してどこかで死んでいたかもしれない」

「でも、今、マルタは生きてる。リーガルさんもしいなも何か手はないか探してくれてる。僕らも何かできることを……」

マルタの後ろで街の灯がちらちらと輝き出す。

「ありがとう、エミル。だけど、私にできることは、多分今、ふたつだけ。この街の人

たちを全員見捨てて逃げるか……それとも……」
「それとも……？」
ふいにマルタが声を張る。
「テネブラエ！　エミルを止めて！」
彼女は部屋を飛び出した。あわてて追いかけようとするエミルの前に、テネブラエが先回りして立ちはだかる。
「テネブラエ！　どいてよ！」
エミルが焦れたが、
「できません」
テネブラエは硬い表情で彼を見上げた。
「マルタが奴らのところに帰ったら、ラタトスクのコアを悪用されちゃうんだよ！」
「……もうひとりのあなたは知っている筈です」
その瞬間、エミルの瞳(ひとみ)が変化する。
「……テネブラエ、裏切るのか」
「……思い出してください。あなたが殺されたときのことを！」
「アステルだった頃のことに興味はない。とにかく、そこをどけ！」
赤い瞳のうちに、激しい怒りが燃えている。テネブラエはすごすごと道を開けた。

「奴ら、確かに街のあちこちに爆弾を仕掛けているようだ」

リーガルが、明かりを落としたロビーの隅で言った。

ひと通りの情報収集を終え、戻ってきたところに、ロイヤルスイートルームへ行こうとしていたしいなとばったり出食わしたのだった。

「仲間からの話でも、街の外は完全に包囲されているらしいよ。なんとか全ての爆弾の位置がわかれば、対応もできるんだけどねぇ……」

しいながそう言いかけたとき、エレベーターホールの方からバタバタと足音がした。

「おい！　マルタを見なかったか!?」

ロビーに飛び込んできたのはエミルだ。

「……いや？」

「あたしたち、今戻ったところなんだよ。マルタがどうしたんだい？」

リーガルもしいなも、一体何が起こったのかという顔をしている。

「あいつ、この街を救う取り引きに応じるつもりなんだよ！」

「早まった真似を……！」

しいなが唇を噛んだ。
「奴ら、カジノを拠点にしているといったな。ならばマルタはカジノか」
「くそったれ！」
こんな悪態をつくのは間違いなくラタトスクモードのエミルだと思いながら、リーガルは叱りつけるような口調になる。
「おまえまで早まってどうする」
「じゃあ見殺しにしろってのか！」
エミルはロビー中に響き渡るほどの大声で喚いた。
「落ち着きなよ、エミル。マルタはブルートの娘だ。そうそう殺される訳ないだろ」
あわててしいながエミルの肩に手をかけた。
「それは……」
そうだな、とエミルは口の中で呟く。
「それにカジノにいるというなら好都合だ」
リーガルの言葉に、
「どういうことだ」
エミルは上目遣いで訊ねた。
「奴らは街に爆弾を仕掛けている。その起爆装置も当然カジノにあるだろう。マルタを

奪還(だっかん)し、それを破壊すれば、一時的だが奴らは無力になる」
「そうか！　その隙に街の人間を逃がすんだね！」
しいながパッと顔を輝かせた。
「その通りだ」
リーガルは頷く。
「よし、あたしはミズホの仲間に街の人間を逃がす手はずを整えさせる。しばらくまっとくれ！」
「私も準備を整えてくる。エミル、無茶はせず待機していてくれ。何なら少し休んでおくといい」
ああ、と頷くエミルを残して、ふたりは立ち去った。
「……マルタ……」
エミルは窓の外に広がる暗い海に目をやり、呟いた。

部屋に戻ると、
「エミル……。許してください」
現れたテネブラエが、居住(いず)まいを正し許しを乞うた。

「……マルタを無事に取り戻せたら。――いや、マルタも無事で街の連中にも被害が出なければ許してやる」
「……変わられましたね。今の言葉をマルタさまが聞いたら喜ぶでしょう」
ふうっ、とエミルは息を吐き、覚悟を決めたように口を開いた。
「……あいつに体を明け渡す。多分また記憶がないだろうから、おまえから説明してやれ。どうせ俺たちの話は聞いていていたんだろう？」
「御意（ぎょい）」
テネブラエは答えた。

「エミル、起きな」
しいなの声が降って来た。
「う……ん……あ！」
エミルはあわてて飛び起きる。もうひとりの自分が、体を明け渡すと言っていたというのを思い出したのだった。
（よかった。僕のままだ……）

「準備が完了した」
リーガルが部屋に入って来たのを見て、エミルはベッドから降りるとしゃっきり床に立った。
「あ、はい。テネブラエから話は聞きました。あの、マルタは無事……ですよね」
「少なくとも、街から出たという話はないよ」
しいなが心配性のエミルに微笑みかけてやる。
「夜のうちに作戦を決行する。カジノに行こう」
「わかりました」
エミルはリーガルたちについてエレベーターホールに出た。
「ここからは作戦のため、私は手錠をつける」
そう言って、リーガルは頑丈そうな手錠を自ら装着してみせた。しっかりとした厚みがあり、重そうに見える。
ずいぶんごつい手錠だなあ、とエミルが思っていると、
「……そんなものつけてどうするつもりだい」
しいなが訊ねた。
「これはただの手錠ではない。手錠型の遠隔制御装置(えんかくせいぎょそうち)だ」
「エンカクセイギョ？」

エミルが聞き返した。
「うむ。これでカジノの電源回路をコントロールできる」
「そんなものがあったのかい！」
驚いたしいなはまじまじと手錠を見つめた。
「だが、この装置はまだ開発中で、遠隔操作できる距離が短い。カジノ内に潜り込む必要がある」
リーガルは少し残念そうだった。
「なら、潜入してから手錠をすれば……。あれ？　そもそも手錠にする意味は……」
しいなは考えていたが、すぐにその理由を理解したようだった。
「あ！　そうか！　あんたの地位を利用するんだね」
「そういうことだ。レザレノ・カンパニーの会長でありテセアラの公爵である私なら、奴らにとってもそれなりに価値のあるプレゼントになるだろう」
リーガルは頷きながら、手錠を装着した両手首を掲げる。
「でもいいのかい、リーガル。あんた、その……また手錠を……」
「案ずるな。もう慣れたさ」
「いや、その〝慣れ〟を心配してるんだけどさ」
しいなは困った顔で笑う。そのとき、エミルが遠慮がちに声をかけた。

「あの……」
「ん?」
リーガルとしいなが同時にエミルを見た。
「プレゼントならリボンとか……かけた方がいいのかな?」
ぷっ、としいなは吹き出してしまう。
「よしなよ。受け取ってもらえるもんも、受け取ってもらえなくなっちまう」
「……心外だが同意せざるをえんな。さあ、行こう」
渋い表情でリーガルは眉を寄せた。

ホテルのエントランスを出たところで、街の様子を窺(うかが)ってみる。夜の闇の中で、武器を構え、見回りに余念のないヴァンガード兵が何人も見受けられた。
「すっかりあいつらに占拠されちゃいましたね」
エミルがため息をついたが。
「無駄に争って血を流すより、このほうがずっとましだ」
リーガルは少しの迷いもなくそう言ってのける。エミルはホテルの灯を背中に浴びて

いる彼を、見上げた。
「リーガルさんって……」
「ん？」
「いえ、リーガルさんって、本当に大人なんだなって思って……」
自分に同じことが言えるだろうか、とエミルは考える。
フッ、とリーガルは笑みを漏らした。
「おまえも歳を取ればこうなる」
「……手錠してそれはしまらないねぇ」
しいなが揶揄するように言う。
「リボンがないだけましですよ」
「はは、違いない」
ふたりの言葉に、リーガルはくったくなく笑った。
(歳をとれば……か)
今のエミルには自分が歳を取ったところなど想像できない。そんな日は無事にやってくるのだろうか？
不安になっちゃダメだ、と彼は自分に言い聞かせた。

「なんだ、おまえたち」

カーゴ乗り場に立っていた見張りのヴァンガード兵は、三人を見るなりさっと行く手を阻(はば)んだ。

「アリスさまに贈り物を持って来ました」

エミルは、打ち合わせ通りのセリフを口にする。

「贈り物だと?」

「ああ。アリスさまが泣いて喜ぶ最高の贈り物さ」

しいながもったいぶった口調で言うと、兵士はすぐに話に乗って来た。

「何だ、それは?」

「私だ」

リーガルが、装着している手錠をよく見えるようにちょっと持ち上げる。

「あんたたちでも知ってるだろ。泣く子も黙るレザレノ・カンパニー会長、リーガル・ブライアン公爵さ」

「どうですか」

兵士はしいなとエミルを交互に見ながら、首を傾げた。

「だが、おまえたちはどうしてこいつを……」
「僕たちもヴァンガードに入れて欲しいんです」
「そのための貢(みつ)ぎ物(もの)ってことさ」
頷き合うエミルとしいなを、兵士はすっかり信用したようだった。要人であるリーガルを上層部に連れて行けば、自分の株が上がると思ったのかもしれなかった。
「わ、わかった。アリスさまに取り次いでやる。俺について来い」

カジノの入り口で待たされていると、別の兵士が出てきて言った。
「おまえたち、通っていいそうだ。くれぐれも失礼のないようにな」
エミルたちはそっと目配せし、カジノに足を踏み入れる。アリスはフロントの前にいた。
「あら、ヴァンガードに入りたいって、あなたたちだったの？」
少しも驚いていない口調で言い、アリスは鞭(むち)を鳴らす。
「は……はい……」
エミルは殊勝(しゅしょう)な返事をする。アリスはにっこりしながら、

「そんな見え透いた嘘ついてリーガルを連れてくるなんて、おバカさんね♡　さ、ホーくん。こいつら、捕まえちゃって」

と、さっと手を上げて合図する。物陰で待機していたらしいホークが部下の兵士と共に現れた。兵士はエミルたちをぐるりと取り囲んでしまう。

「私、ブルートさまを迎えに行ってくるから、そいつらをちゃんと牢屋に入れといてね。あと、起爆装置の管理もよろしく」

「お任せ下さい」

ホークは首にかけた筒状の機械に触れ、アリスに応えた。

「エミル！　みんな！」

地下の小部屋にいたマルタは、連行されてきた三人を見るや、声を上げた。

たまたま空いていた場所に鍵をつけ、アリスが牢屋として使っているのだろう。

「バカな奴らだ。せいぜいそこでおとなしくしてろよ」

ヴァンガード兵は蔑みの目でエミルたちを一瞥すると、出て行った。

「マルタ！　無事で良かった！」

エミルがマルタに駆け寄る。大丈夫、怪我もしていないようだ。
「みんな、どうしてここに……」
「あんたも街のみんなも救う方法が見つかったんだよ」
しいなが安心させるように明るい表情で言うと、マルタは驚いた。
「私……そんな方法ないってあきらめてたのに……」
「簡単にあきらめちゃダメだって前に教えてくれたのはマルタだったよ」
「エミル……ありがとう……」
マルタは少し蒼ざめた頬を緩ませた。
「マルタ、ホークが起爆装置みたいなもの持ってなかった？」
エミルは気になっていたことを訊ねてみる。アリスの言葉が本当なら、ホークが管理しているはずだ。
「……そう言えば、アリスがホークにそれらしいものを渡してた。むやみにスイッチを押すと街が燃えちゃうとか、なんとかかって……」
「そういや、変なものぶら下げてたねぇ」
しいなはマルタに、それらしきものの形状を聞いた。やはり、あれが起爆装置に間違いないようだ。
「よし、では次の狙いはホークだ。ミッションスタート！」

リーガルが手錠のボタンを押す。ほとんど同時に灯りが消えた。手錠がカジノの電源回路をコントロールする遠隔制御であることを聞かされたマルタは、
「すごい……」
と、暗闇で目をみはる。
「今、カジノ全体の電源が落ちている。牢の鍵も開いている筈だ」
「よし、行こう！」
エミルは先頭に立って、牢から飛び出した。
案の定、カジノ内は騒然となっている。リーガルはホークを見つけると、充分に近づいてから、電源を入れた。
「お、おまえたち!?　何故ここにいる！」
目の前のエミルたちに気づくと、ホークは手に持った起爆装置のスイッチをあわてて入れた。装置が赤い明滅を繰り返し始める。
まずい、とエミルは焦（あせ）った。
「テネブラエ！」
「お任せ下さい！」
ホークの背後に現れたテネブラエは、長いしっぽを使って、装置をひょいと取り上げた。

「き、貴様！　その起爆装置を返せ！」
ホークは色の悪い顔をさらに蒼ざめさせ、腕を振り回したり、その場でぴょんぴょん跳ねたりしている。
だが、テネブラエはとっくにより高い位置に移動していた。鼻先に器用に装置を立てていたかと思うと、ぱくっと飲み込んでしまう。
「ああっ!?」
ホークの情けない声が響く。テネブラエは「ごちそうさま」とでも言いたげに、しっぽの先で口元を拭ってみせた。
しいなはにやりとし、
「さ、用は済んだ！　ずらかるよ！」
と、仲間たちに呼びかけた。
「ま、待て！　逃がしてたまるか！」
ホークが喚いた。
「おまえたちを逃がせば俺がアリスさまに殺されるっ！」
その顔は恐怖に引きつっているように見える。
しいなが振り返りざま、ヴァンガード兵たちに向かって札を投げた。追いすがる残りの兵士はマルタが倒す。

「エミル、時間をかけるな！」

「はいっ！」

リーガルとエミルはホークに対峙したが、起爆装置を失い、動揺しきっている男は敵ではなかった。グローブに装着した武器すら重たそうだ。

ほどなく、彼はがっくりと膝をついてしまう。そのときだった。

「何の騒ぎだ……」

抑揚の少ない、恐ろしげな声が響いてきた。エミルたちがハッと顔を上げると、不機嫌極まりない表情のブルートが地上へ続く階段に立ちはだかっていた。

「パパ……」

マルタはふらふらと前へ出ると、父親を見上げる。が、娘を見るブルートの瞳に温かみは感じられない。

「……マルタ……。シルヴァラント王朝の末裔ともあろう者が、そんな下賤な奴らと行動を共にしていたのか」

「パパ！　まだそんなこと言ってるの!?　今の私たちにシルヴァラント王家なんて関係ないじゃない！」

必死に訴えるマルタに、

「……おまえこそ、まだそんな自覚のないことを言っているのか」

と、ブルートは狙いを定めるように杖の先を向けた。
「な、何をするんですか！」
エミルが剣の柄に手をかけると、
「……おまえたちのような薄汚い豚どもといるからマルタも目覚めようとしないのだ。ソルムのコアの加護を受けた我が力、とくと味わうがいい！」
ブルートはカッと目を見開く。
「愚か者に王の裁きを！」
階段からひらりと飛び降りるブルートに向かって、
「幽玄符っ！」
しいなが札を振り回しかけた。だが、
「ニザフィヨル！」
逆に闇の弾を打ち込まれ、しいなは声もなく倒れた。すかさずマルタが治癒術を使う。
ブルートの圧倒的な力に、エミルはたじろいだ。
（くそぅっ、ソルムのコアの力なんかに負けてたまるか！）
「鳳翼旋！」
長身のブルートに斬りつけるが、びくともしない。それどころか彼は平然と詠唱を始める。

「魂を凍らす魔狼の咆哮——響き渡れ！　ブラッディハウリング！」
闇を赤々と照らす爆発が起きた。
「うわあっ！」
「きゃあああっ！」
気がつくと、エミルの近くでリーガルとしいなが倒れ伏していた。
「許さない！」
エミルはブルートをキッと睨みつけると、剣を構えなおして突進してゆく。だが、そのとき発動されたアームスヴァルトーニルの黒い波動に行く手を阻まれた。ブルートに近づくことすらできない。
「……っ、強い……」
エミルは、すっかり息が上がってしまっていた。倒れたリーガルたちはなんとか体勢を立て直したところだったが、まだふらついているようだ。
「……ふん、雑魚にしてはましな動きをするではないか。だがこのまま私を倒せなければ、おまえたちはここから出られぬぞ」
ブルートは言い、床に落ちていた剣——ホークの部下のものだった——をゆっくりと拾い上げる。
「……く……」

そのときエミルたちの背後で、ホークがようやくよろよろと立ち上がる気配がした。
「ブルート総帥(そうすい)の前で、これ以上醜態(しゅうたい)はみせられん！」
ホークが床を蹴る。リーガルが叫んだ。
「エミル！」
すんでのところでホークの武器を剣で受け止めたエミルに向かって、
「さらばだ、小僧！」
ブルートが剣を突き出した。
「だ……だめぇっ！」
マルタが叫ぶのと同時に、エミルはホークを力いっぱい跳ね除ける。宙を舞った体は、ブルートの剣に吸い寄せられるように落ち、背中から深く貫かれた。
「ええいっ！　邪魔をするな！」
獲物を捕らえ損ねたブルートが瀕死のホークを一喝する。
「今だ！　ずらかるよ！」
しいなの声に、エミルたちは一気に階段を駆け上がった。

「おまえたちは先に行け！」
カーゴに仲間たちが乗り込んだのを確かめて、リーガルは足を止めてしまった。
「リーガルさん⁉」
(そんな……)
エミルは驚いて、その場から動けなくなってしまう。
「躊躇(ちゅうちょ)している場合か！　ブルートという男、相当な手練(てだ)れだ。ここで時間をつぶして敵が増えれば、全員がヴァンガードに捕まることになるぞ！」
「確かに、相手がソルムのコアの力を利用している以上、まともに戦うのは無謀(むぼう)です」
テネブラエが、冷酷とも思える言葉をエミルに投げた。
しいなは唇を噛みしめながら、カーゴのスイッチを入れた。
「しいなっ！」
マルタが叫ぶ。しいなが声を震わせる。
「――まってなよ、リーガル！　必ず迎えに来る！」
「……行け！」
リーガルはエミルたちに背を向けたまま、早くしろと手振りで示した。
カーゴが出て行くと、入れ違いにブルートが現れる。
「うおおおおおおっ！」

リーガルは少しでもエミルたちに時間をつくってやらねばと思いながら、ヴァンガードの総帥に突進して行った。

ホテルの近くでカーゴを降りると、すでに太陽が昇っていた。
「……すっかり夜が明けちまったね。さあ、とにかく脱出するよ！」
しいなはエミルとマルタを促す。が、
「リーガルさん……パパ……」
マルタの足は重かった。
「マルタ！　ここでぼーっとしてたらリーガルさんの思いが無駄になるよ！」
エミルが言った。彼とてリーガルのことが気にならないわけはないのだ。
「……う、うん……」
「エミルの言う通りだ。さ、急ぐよ！」
再びしいながふたりを促した。
ところが、ようやく街の入り口まで戻ったとき、運悪くアリスが向こうからやって来るのに出食わしてしまった。

「も～！　どうなってるのよ！」
アリスはエミルたちを認めると、鞭を振り回して怒りを露にした。
「街の人はみんな逃げちゃってるし、あんたたちまでこんなところにいるなんて！　これじゃアリスちゃん、ブルートさまに叱られちゃう！」
どうやらアリスは街の外まで様子を見に行って戻ったところらしい。
「ちっ、面倒な奴が残ってたよ」
しいなが吐き捨てる。
「もう逃がさないわよ！」
アリスが叫んだとき、背後で斧が煌いた。
「弧月閃！」
「きゃあぁっ!?」
アリスはばったりとうつ伏せに倒れる。すると、そこに立っているひとりの少女の姿がエミルたちの目に入った。
「プレセア!?」
しいなが驚いて目を丸くする。プレセアはそれには応えず、
「ここは……危険です。こっちへ！」
と走り出した。

街からかなり離れたところまで来て、ようやくプレセアは立ち止まった。
「ここまで来れば、大丈夫……」
見通しのいい草原だが、ヴァンガード兵の姿は見当たらない。
「あの……きみは……」
まだ息を弾ませているエミルが訊ねる。
「プレセア・コンバティール……です」
「プレセアは、ロイドたちと旅したときの仲間なんだよ。けど、どうしてここに……」
しいなはエミルたちにそう説明し、それからプレセアに向き直った。
「オゼットの状況を、レザレノの皆さんに報告するため……です。けど、偶然ミズホの方にお会いして事件を知ったのでお手伝い……していました」
どうやらプレセアは、たびたびアルタミラを訪れているらしい。話を聞いたしいなは、ほっとしたように言った。
「丁度いい。このふたりをどこか安全なところに頼む。あたしはアルタミラに戻るよ」
「リーガルさんを助けるためなら、僕も！」

エミルは思わず拳を握りしめたが、「だめだ」としいなに即答されてしまう。
「あんたはマルタを守るんだよ」
「リーガルさん？　リーガルさんに何かあったんですか？」
表情に乏しいプレセアにしては、驚きを含んだ口調だった。
「ヴァンガードって奴らとひとりで戦ってるんだ。とにかく詳しいことはエミルたちにきいとくれ！　あとは頼むよ！」
じれったそうにそれだけ告げると、しいなはもと来た道を走り去った。
「しいな……」
どんな気持ちであたしたちを逃がすためにここまで来てくれたんだろう、とマルタは改めて思う。
（リーガルさんとしいなのためにも、無事に逃げのびなきゃ……！）
「事情はまだよくわかりませんが、とにかく安全な場所へご案内します。お話は……そこで聞かせてください」
プレセアが言った。
「……うん。お願いします」
頭を下げるエミルの隣で、マルタはそれでも父親の姿を悲しく思い浮かべていた。

14

プレセアは、行き先も告げずにただ黙々と歩いている。エミルはマルタと一緒に彼女について行くだけだ。

しいながロイドたちと旅をしていたときの仲間だというだけで、充分だった。

「あれは……？」

小さな茂みの横を通りかかったとき、エミルは前方に人影を認めて足を止めた。

「検問のようです」

テネブラエが言う。エミルたちは急いで茂みの方へ身を寄せた。

旅人らしき男が数人、不思議そうに彼らを見て行き過ぎる。

「私のせいだ……。私を捕まえるためにパパたちが……」

マルタはうな垂れて、自分の足元をじっと見つめる。

「迂回（うかい）したほうがいいね」

「けど……きっと他の場所にもヴァンガードが……」

エミルとマルタのやりとりを聞いていたプレセアは、
「……私に、任せてください」
と、茂みの中に入って行ってしまった。待つほどもなく戻って来たプレセアは、自分の背丈よりずっと大きい箱状のものを引きずっていた。
「これ……」
プレセアはエミルたちのところまで来ると、
「アイアンメイデンです。マルタさんはこの中に入って下さい」
と、淡々と言う。
「何でこんなものを持ってるの⁉　これデクスが持ってるのと同じだよね」
エミルは、プレセアが引きずってきたものに見覚えがあった。ただし、デクスのそれとは色違いのようだ。
「これはレザレノ・カンパニーの孫会社であるレザレノ神秘ネットが作っている開運グッズです。私も開運グッズを作っているのですが、商品の共同開発をしないかと依頼され、サンプルでいただきました」
マルタはエミルと顔を見合わせ、
「……デクスのあれは通販で買ったってことだよね。……微妙」
と、複雑な表情になる。

「参考までに聞きたいんだけど、開運って具体的にはどんな効果があるの？」
プレセアと開運グッズという組み合わせに少し驚きながら、エミルが訊ねた。
「ここに好きな人の髪の毛を入れると七六五日後に両思いになるそうです」
「プレセア、好きな人がいるの？」
マルタは女の子らしく、両思いという言葉に反応してしまう。
「……秘密……です」
プレセアの口調も、このときばかりは心なしか女の子っぽく恥らっているように聞こえた。
「しかし何故アイアンメイデンを持ち歩いているのですか？」
テネブラエが訊ねる。
「サンプルを返そうと思ってアルタミラまで運んできました。ただ、街があの状態だったので茂みに隠しておいたんです」
なるほど、とエミルは納得した。あまりに都合よくアイアンメイデンが出てきたので面食らってしまったが、いまは他に方法がないだろう。
「な……なんか変な展開だけど、とにかくマルタ、ここに……」
「えぇっ!?　本当に入るの？」
マルタはのけぞって驚いた。

「蓋(ふた)を開けられたらすぐばれちゃうと思うけど……」
「大丈夫です」
表情ひとつ変えずに、プレセアが淡々と保証する。
「……う……うん……」
マルタは気が進まないながらも、エミルが蓋を開けてくれたアイアンメイデンの中に納まった。
プレセアはすぐさまそれを引っぱり始める。
いくらなんでも重いよな、とエミルは心配になった。
「あの……僕も手伝おうか？」
「平気です。行きましょう」
プレセアは言い、まっすぐに検問所——丸太を組み合わせただけの造りだ——の入り口に向かって歩く。
文句なしに目立つ彼女の前には、当然のようにヴァンガード兵が立ちはだかった。
「オゼットの者です。通してください」
「その荷物は何だ」
兵士がアイアンメイデンを指して訊ねた。
「開運のアイアンメイデンです」



一瞬、兵士の動きが止まる。よくわからないものだということだけわかったらしい。
「中を確認させてもらうぞ」
「そ、それは……」
エミルが慌てたときだった。
「呪われます」
抑揚（よくよう）のない声で、プレセアが言った。
「……え？」
「このアイアンメイデンは願いが叶う前に開けると、開けた人間に呪いがかかります」
さーっと兵士の顔色が変わる。もちろんエミルの顔も別の理由で引きつっていた。
プレセアは続ける。
「まず開けた瞬間から七七時間、下痢（げり）と嘔吐（おうと）に苦しみます。その後七七七日の間、魔界の王が入れ替わり立ち代わり現れて鼻の穴に指をつっこんでいきます。それでも良ければ好きなだけ開けて呪われて下さい」
「……そ、そんな手にはのらないぞ」
ぶんぶん、と兵士は自分を励ますように首を振った。するとプレセアは「わかりました」とひどくあっさり頷いた。
「思う存分呪われて下さい。さあ、どうぞ」

さあどうぞと言われても、兵士に蓋を開けられるわけがない。下痢と嘔吐はもちろんたまらないが、入れ替わり立ち代わり鼻の穴に指というのもひどく怖い。
「……う……」
「さあ」
プレセアがもうひと押しすると、兵士はとうとう声を裏返らせた。
「……い、いや、やめておく。さっさと行け！」
「わかりました」
プレセアは何事もなかったかのような顔でアイアンメイデンを引きずり、検問所を通過した。

安全な場所まで遠ざかってから、マルタはようやくアイアンメイデンから外に出ることができた。
「すごい力業でしたね」
テネブラエが感心したようにプレセアを見る。
「だけどあそこで開けられてたらと思うと今でも心臓が……」

エミルが胸に手を当てると、マルタも「そうそう」と頷く。しかしプレセアは、
「このアイアンメイデンは二重蓋になっています。普通に開けただけなら何も入っていないように見えたと思います」
と、今ごろになって言う。
「そうだったの!?」
「気づかなかった……」
マルタとエミルは、なーんだと胸を撫で下ろしたが、
「この先にアルテスタさんというドワーフが住んでいます。とりあえずそこまで逃げましょう」
プレセアが話題を変えてしまったので、二重蓋の話もそれきりになった。

「ここが、アルテスタさんの家です」
ドワーフ族の人に会うのはふたり目だな、とエミルは思う。
「どんな人だろう、ダイクさんみたいな人かな」
「エミルさんはダイクさんに会ったことがあるんですか?」

プレセアはほんの少し意外そうな顔になった。
「あ、ああ。うん。実は……」
エミルが事情を説明すると、
「……それでしいなさんと一緒にいたんですね」
プレセアは頷き、
「でも……ロイドさん、ひとりで何をされているんでしょうか……。とても……心配です」
と、呟いた。
「マルタ……。もしかして疲れた？」
黙りこんでいるマルタに、エミルが声をかける。
「う……ううん……。違うの。平気……」
「……そ、そう？」
どうしたんだろう、とエミルが思ったとき、
「さあ、ひとまずアルテスタさんに挨拶しましょう」
プレセアがドアを開けてくれた。

岩肌をくり抜いた小さな家に、アルテスタ老人はひとりで住んでいた。

「……誰じゃ」
なにか細かい作業でもしているのだろうか、アルテスタはこちらに背を向けたままだ。
「オゼットのプレセア……です」
プレセアが名乗ると、アルテスタは驚いて振り返る。
「プレセア！　ん？　なんじゃ、後ろの連中は……」
訝（いぶか）しげな視線を受け、エミルたちは自己紹介をする。
「僕はエミルといいます」
「マルタです」
「センチュリオン・テネブラエと申します。お見知り置きを……」
テネブラエが名乗ったところで、
「皆さん、リーガルさんたちのお知り合いです」
と、プレセアがつけ足した。
「そうか……。しかし何故ここへ……」
アルテスタはリーガルの知り合いが何をしに来たのか、見当がつかない様子だった。
だが、
「アルタミラがヴァンガードに占拠されました」
「なに!?」

プレセアの説明を聞き、思わず大きな声を出した。
「リーガルさんが奴らに捕まってます。しいなはアルタミラに残ってひとりで助けようと……。私はこのふたりを安全なところまで連れて行くように言われました」
「それでわしのところへ？」
はい、とプレセアが頷く。
「最終的には、ミズホまで連れて行こうと思っています。でも今は、ヴァンガードの警戒が厳しいと思うので……」
「うむ。気の済むまでここに留まるといい」
事情がわかったところで、アルテスタはエミルたちにそう言ってくれた。
「ありがとうございます」
プレセアが礼を言うのを聞きながら、エミルはしいなの故郷はどんなところなんだろう、と考えていた。そのとき、
「外が騒がしいな……」
アルテスタが真っ白い眉を寄せる。確かに、数人の人間が歩き回るような気配と、物音がする。
「まさかヴァンガードでは……」
テネブラエが玄関を振り返った。

「行ってみます」
エミルはドアの隙間からそっと外の様子を窺(うかが)った。
「さっきのアイアンメイデンです！」
外に置きっぱなしにしていたアイアンメイデンを指さしているのは、呪いを怖がったあの兵士だ。そしてなによりエミルが驚いたのは、彼らを従えている上官だった。
「よし、この家を家捜ししろ」
兵士に命令を下している男は――あのマーグナーだった。
「マーグナー!?　どうして……。あいつはマーテル教会の人間じゃ……」
マルタも外の様子を見て、ハッと息を飲む。
「どうやら、マーテル騎士団を演じていただけのようですね。ルインの件もパルマコスタ同様、奴らの自作自演なのでしょう」
と、テネブラエが言った。一体どういうことなんだろう、とエミルはマルタに訊ねてみる。
「マルタは、マーグナーがヴァンガードだってこと……」
「……知らなかった」
組織の中にいながら今までマーグナーの存在に気がつかなかったことに、マルタはショックを受けている様子だった。

「プレセア!?」
外に出て行こうとしているプレセアに気づいて、エミルが驚く。
「……このままではアルテスタさんに迷惑がかかります」
「……そう……だよね」
自分のためにこれ以上迷惑はかけられない、とマルタは唇を噛みしめた。
「僕も行く！」
エミルはプレセアを追って家を飛び出した。

「あっ、マルタさま！」
エミルに続いて出てきたマルタを見て、ヴァンガード兵のひとりが声を上げた。兵士は全部で三人のようだ。マーグナーは薄く笑い、
「とうとう観念しましたか。さあ、我々とブルートさまの元へ戻りましょう」
と、マルタを促す。が、そのとき、
「そうは行きません。しいなさんとの約束は果たします」
マルタの前にプレセアが進み出た。体に不釣合いな大きな斧を手にしている少女を見て、マーグナーは馬鹿にしたような声で言う。

「おまえのような子供に、何ができるというのです！　出しゃばったことを後悔しなさい」

子供呼ばわりされても、プレセアは特に表情を変えることもなかった。

「孤月閃(こげつせん)！」

三日月状に弧を描く斧を振るい、巨漢のマーグナーに果敢(かかん)に挑みかかる。

マーグナーは軽々と槍を操ると、

「轟破槍(ごうはそう)！」

土と炎を巻き上げ、華奢(きゃしゃ)なプレセアを吹き飛ばす。

「きゃあっ！」

「プレセア大丈夫っ⁉」

ヴァンガード兵をひとり倒したところだったマルタが駆け寄った。

「平気……です」

立ち上がったプレセアの足元に、エミルに斬り捨てられた兵士が転がってきた。エミルはすでに最後の兵士の武器を跳ね除(はの)けたところだった。

「はっ、効かねぇな！」

鳳翼旋(ほうよくせん)で難なく相手を倒してしまうと、

「待ちくたびれたか？」

エミルは剣の切っ先をまっすぐマーグナーに向けた。
「冗談を言いなさい！」
マーグナーがエミルに向き直る。
「飛燕流舞！」
一瞬の隙を突き、マルタのスピナーが幾度もマーグナーの肩先を傷つける。
「うぐっ！」
怒りに任せて槍を振り回すマーグナーの胸をエミルの剣が真一文字に引き裂き、開いた傷口を抉るように斬り上げた。
「ぬうっ！」
大男の槍が、エミルに向かって突き出される。耳元でシュッという音がしたときには、エミルの頬は穂先に掠られ、わずかに傷ついていた。
「くそっ、もう許さねぇ！」
エミルはそれからしばらくマーグナーと斬り結んでいたが、
「これで終わりだっ――――！」
と、魔王獄炎波の刃を地面に叩き込む。
「孤月閃！　岩砕襲撃っ！」
プレセアが加勢した。

マーグナーの巨体が軽い木の葉のように翻弄されているのを見たエミルの唇に、冷たい笑みが浮かぶ。
「――闇に飲まれろっ。アイン・ソフ・アウル！」
エミルの放った炸裂する光の中に、マーグナーの絶叫が響いた。

「アルタミラを制圧してヴァンガードは何をしようとしているんだ」
エミルは、槍の柄に縋ってやっとのことで立っているマーグナーに訊ねた。武器を構えなおす余裕などなかったのだろう、穂先が地面にめり込んでしまっている。
「……知ったところで……おまえたちに何ができると？」
「いいから答えろ！」
声を張ると、マーグナーの巨体がびくりとする。
「……ブルート様は、アルタミラからシルヴァラント王朝の復活を宣言するおつもりです」
「そんなことしたって、すぐにテセアラの王立軍に制圧されるに決まってる」
マルタは言ったが、プレセアは冷静だった。

「……いえ、アルタミラに限っては難しいと思います。あの街はレザレノ・カンパニーの本社がある街です。資産も食料も充分すぎるほどあります」
「……ふふ……その通りですよ……」
マーグナーは強がって笑う。
「それに今、世界各地で我らの仲間が蜂起(ほうき)しています。王立軍はその対応で手一杯の筈。あとはラタトスク・コアを手に入れて魔導砲の力でテセアラ人どもに天罰を……」
「そんなことして何になるんだ」
エミルはきゅっと眉を寄せた。
「……そうしなければ文明の遅れたシルヴァラント人はテセアラ人に負ける……。ハーフエルフのように虐(しいた)げられるのです……」
苦しそうに肩を上下させると、マーグナーはそのままずるずると槍伝いにくずおれた。

「ヴァンガード……やっかいな連中じゃの」
アルテスタはそう言って白い顎鬚(あごひげ)を撫でた。ありあわせの材料でテーブルいっぱいの料理を手早くこしらえると、彼はエミルたちにふるまってくれた。

細工師（さいくし）だったというアルテスタは、料理の腕もたいしたものだった。ダイクさんも教会の修理をしていたし、ドワーフ族って器用なんだな、とエミルは思う。
「エミルさん、マルタさん。急いでミズホに向かいましょう。あそこなら安全です」
プレセアはかなり危険を感じているらしい。マーグナーたちが戻らなければ、追っ手が来るのは時間の問題だった。
「そうじゃな」
アルテスタは頷いた。
「おまえさんたちがラタトスク・コアとやらを持っているのなら、今は逃げることが第一だ」
「……は、はい……」
マルタは額のコアを気にしながらそう返事をしたが、
「けど、リーガルさんは……」
と、エミルは自分たちのために残ってくれたリーガルが気になってならなかった。しかしプレセアはきっぱりと首を振る。
「それは私たちが……以前旅した仲間が何とかします」
「……仲間……」
僕だって仲間のはずなのに、とエミルは自分が情けなくなる。

「アルテスタさんも逃げてください。ここは危険です」
「わしのことなら心配するな」
アルテスタはプレセアに言い、
「それよりあのマーグナーという男、まだ息がある。わしが捕らえて見張っておこう」
と言ってくれた。プレセアが手伝おうとするのを、アルテスタは許してくれない。
「それよりおまえさんたちは急いでミズホに向かえ」
「……はい！」
プレセアは今やるべきことを優先しようと決めたようだった。

ミズホの里は、エミルにとってひどく変わった街に感じられた。プレセアによると、テセアラ時代から独得の文化を育んでいるらしい。
「何者だ！」
里の入り口の鳥居を潜ろうとしたとき、突然煙と共に頭巾を被った若者が姿を現した。
「おろちさん。お久しぶりです……」

プレセアは少しも驚かず、挨拶をする。
「プレセア殿か……。そちらの方々は？」
おろちと呼ばれた男は、鋭い目でエミルとマルタを一瞥した。
「しいなさんに頼まれて連れてきました」
「頭領に!?　頭領はご無事なのか？」
急きこんでおろちは訊ねる。やはりしいなから連絡はないのだと思いながら、プレセアが、
「実は……」
と事情を説明しかけると、おろちが制した。
「あ、いや、お話はイガグリ老のところで伺おう。先客がおられるからな」
「先客？」
プレセアが首を傾げる。
「リフィル殿とジーニアス殿だ」
「リフィルさんたちが来てるんですか？」
驚いてエミルが聞き返すと、おろちの方でもびっくりしたようだった。
「あ……ああ。そちらはリフィル殿をご存知なのか？」
「一緒に旅をしたことがあるそうです」

プレセアが説明する。
「そうか……。とにかく詳しい話は奥で伺おう。ではな」
そう言い置いて、おろちは先に里の奥へ歩いて行った。

なぜリフィルたちがミズホにいるのか、エミルにはその理由がわからなかった。しいなを訪ねてきたのかもしれないと思いながら、小さな川のそばにさしかかったとき、
「……そう。やはり他の街でも同じ状態なのね」
リフィルの声が耳に飛び込んできた。里の者に話を聞いていたらしい。
「リフィルさん！　ジーニアス！」
エミルが思わず大声を出すと、ジーニアスが振り向いて目を丸くした。
「プ、プレセア⁉」
まずプレセアに目をやってしまってから、ジーニアスは頬を紅潮させてエミルたちに向き直る。
「それにエミルとマルタも！　どうしてここにいるの⁉」
プレセアは、

「しいなさんに頼まれて、ふたりをアルタミラからここまで連れてきました」
と、答えた。
「アルタミラ？　なんでアルタミラに……」
不思議そうな顔をするジーニアスとリフィルの前に、テネブラエが姿を現した。
「大変なことが起きてしまいました。実は……」
テネブラエの説明を聞き終わったリフィルは、軽く息をつくと、
「……そう。そうだったの。でも三人ともここへ逃げてきて正解だったわね」
と、労わるように言う。
「マーグナーという男の言う通り、今、世界中の街でヴァンガードによる暴動が始まっているの」
リフィルはジーニアスと一緒に、各地でそれを目にしたという。
燃え盛る街で武器を手に、雄叫びを上げていたヴァンガード兵たち——。

——テセアラ人を血祭りに上げろ！
——シルヴァラントの誇りを取り戻せ！
——シルヴァラント王朝を復活させ、テセアラと戦うのだ！

「テセアラ人とマーテル教会に反発する市民感情をヴァンガードが煽ってるんだよ」
暴動の光景を思い出しながら、ジーニアスはため息をつく。
「世界統合の後、まだ政治体制もまとまっていないところにこの騒ぎだもん。暴動を抑える手段もないし……」
「テセアラの王立軍は……」
プレセアが訊ねると、リフィルは力なく首を振ってみせた。
「テセアラ領の街を抑えるので精一杯でしょうね。マーテル騎士団が動けばますますヴァンガードの抵抗も激しくなるでしょうし。それにシルヴァラントにはまだ統一政府のようなものがないから」
「自警団レベルじゃ抑えきれるわけないもんね……」
ジーニアスが肩をすくめると、
「今後は魔導砲を復活させるつもりでしょうか……。あれを使われては王立軍ですら相手になりません」
と、プレセアも微かに眉をひそめた。
「……この話、イガグリ老へ報告しましょう」
リフィルが言う。
「ヴァンガードの狙いがラタトスク・コアなら、まだ勝機はあるわ」

「は、はい……！」
エミルは、おろちがイガグリ老のところで待っていることをようやく思い出した。
ミズホの前頭領だというイガグリ老の部屋は、珍しい畳敷きだった。
ブーツを脱いで部屋に上がったエミルは、正座がうまくできなくて、結局横座りになってしまう。
「……なるほど。敵の狙いは魔導砲によるテセアラ領への攻撃、か」
着物姿で背筋を伸ばし、きっちりと正座しているイガグリ老はかなりの高齢のように見受けられた。
「そうなると、狙いはむろんメルトキオじゃろうな」
イガグリ老の斜め後ろに控えているおろちは、頷いてみせた。
「魔導砲がしいなの使ったものと同じ威力なら、街ひとつを簡単に吹き飛ばせる。奴らにラタトスク・コアを渡したら終わりです」
その通りよ、とリフィルはその場にいる全員に向かって言った。
「だから今は各地の暴動よりアルタミラへ目を向けるべきだわ。今、アルタミラにはヴァンガードの総帥がいる。新興組織ほど、指導者を失えば瓦解するのも早いわ」

「それは、ヴァンガードの総師を討つということでしょうか」
行儀よく座っていたテネブラエが口を挟んだ。
「姉さん！　ヴァンガードの総師ってマルタの……！」
「別に殺せとは言っていないわ」
リフィルは弟の非難めいた目に、平然と応える。だがプレセアは、
「仮に無傷で捕らえたとしても、これだけの事件を起こしたとなれば……処刑されるかもしれません」
と、言いにくそうに呟いた。
「……マルタ……」
エミルが気遣ったが、
「……わかってます。パパは……それだけのことをしてるんです……私のことは気にしないで下さい」
とマルタは気丈に言ってのけた。
「ならば、さっそくアルタミラに我らの部隊を送り込みましょう」
イガグリ老が結論を出した。
「私も頭数に数えて頂戴」
リフィルが言うと、ジーニアスが、

「僕も」
と、座ったまま身を乗り出してみせる。
「私も……協力します。必ずお役に立ちます」
プレセアが言った。エミルだけは、
「……ぼ……僕は……」
と口をもごもごさせた。だがリフィルに、
「エミルはマルタを守ってここに残りなさい」
と当然のように言われ、驚いてしまう。
「どうして!?」
「ラタトスク・コアさえ奪われなければ最悪の事態には陥らない……。そういうことだ」
おろちがリフィルのかわりに説明してくれた。
(え……でも、それでいいのかな……)
エミルの心は急に答えが出せない。でも、すっきりしないのは確かだった。
「善は急げと申しますからな。さっそくお支度を」
イガグリ老に見送られ、エミルはリフィルたちと一緒に慌しく外に出た。

リフィルたちが準備を整えている間、エミルはマルタの姿を見失ってしまっていた。里に残ることになったのだから、のんびりしていてもいいのだが、エミルはマルタを捜して歩くことにする。

彼女はお地蔵様の前にひとり佇(たたず)んでいた。

「マルタ……ここにいたんだ」

声をかけても、マルタは振り返らない。俯いたまま、ぽつりと言う。

「これで……いいんだよね」

「……え？」

「……パパを捕まえてもらって……。ヴァンガードを解体させて……そしたらラタトスク・コアを目覚めさせて……」

(そうか。マルタもやっぱりすっきりしないんだ)

エミルはそれに気づくと、

「……本当に、それでいいの？」

と訊ねる。

「じゃあ……他にどうするの？」

「マルタ……お父さんと話をしなくていいの？」

「……パパは私の話なんて聞いてくれない！　エミルも見たでしょ！　パパのこと！」
「だけど、それじゃマルタはなんのためにヴァンガードを抜けたの」
「なんのためにって……」
「ヴァンガードの……お父さんのやり方が許せなかったって言ってたじゃない。自分もヴァンガードの一員だったのに肝心なところは人任せ（ひとまか）なの？　それでいいの？」
すると、マルタはくるりと振り向いた。
「じゃあエミルは私にパパと戦えっていうの!?」
強い光を宿した瞳が、キッとエミルを睨みつける。
「そうじゃないよ。話してみようよ！　一度や二度うまく行かなかったからってどうしてあきらめるの？　マルタとブルートさんはホントの親子でしょ」
どんな言葉を選べば、少しでもうまく伝わるのだろうか。エミルは必死に探りながら言葉を重ねてゆく。
「誰かにお父さんを捕まえてもらってそれで終わりなの？　その後もふたりはずっと親子なんだよ？」
「……っ」
マルタは言い返すことができず、再び俯いてしまう。
「勇気は夢を叶える魔法だよ」

エミルはゆっくりと伝えた。
「僕は……それで友達ができた。仲間もできた。だから——僕の勇気、マルタにあげる」
え、とマルタが顔を上げる。
「アルタミラに行こう、マルタ。あそこにはリーガルさんもしいなもいる。ふたりは僕たちを助けてくれたんだよ。それに……お父さんとも話さなきゃ」
「……エミル……」
いつの間にこの人はこんなに成長してしまったんだろう。マルタはまぶしいものを眺めるときのように、目を少しだけ細めてエミルを見つめた。
そのとき、ミズホの里の民がばたばたと走ってきた。
「大変だ！　ヴァンガードが襲ってきた！」
草履（ぞうり）が脱げかかっている。彼はエミルたちを見つけると、
「今、里の入り口でみんなが侵入を防いでいる！　あんたたちは逃げろ！」
と叫んだ。

エミルとマルタは大急ぎで里の入り口まで走っていた。

「私のせいでこんなことになってるのに、自分だけ逃げるなんてできないよ」
と、マルタが譲らなかったのだ。
侵入してこようとするヴァンガードを必死で防いでいるミズホの民の中に、おろちの姿が見えた。
「くっ……！　もはやこの里も放棄せねばならないか」
けん玉を構えたジーニアスの隣に戻って来ながら、おろちが悔しそうに言う。
リフィルと一緒にいたプレセアがエミルたちに気づいて驚いて叫んだ。
「エミルさん！　ここは私たちに任せて、イガグリ老のところへ！」
そのとき、入り口を突破したヴァンガード兵のひとりが、マルタに向かって突進してきた。
「危ない！」
テネブラエが叫ぶより早く、エミルは剣を手にしていた。兵士を鮮やかに斬り倒した彼の瞳の色が、赤に変わっている。
「里には入れさせねぇぞ！」
睨みつけるエミルの迫力に、入り口を突破したヴァンガード兵たちが、再び里の外に後退する。すでにいくらかの兵士は里の中に入り込んでしまったようだが、それはおろちやリフィルたちに任せることにした。

近くの平原まで来たところで、エミルはマルタと一緒に、一気に兵士どもを斬り捨てた。
「次はどいつだ！」
里へ向かう後発隊が平原に現れた。斬っても斬っても兵士は湧いて来る。ヴァンガードも本気なのだ。
「……次から次へときりがないな」
「………………」
剣を担ぐように肩に乗せたエミルの背後で、スピナーを操っているマルタの速い呼吸だけが聞こえた。
「初めて会ったときもおまえは追われてたな」
「エミル！　思い出したの⁉」
マルタの叫びにエミルは答えず、
「里に近づくなって言ってんだろうがっ！」
手近にいた兵士をまとめて倒す。
「あれからずっとおまえは逃げ続けてる」
新手の兵士と対峙してからやっと、エミルは後ろにいるマルタに向かって話の続きを始めた。

「ラタトスク・コアを目覚めさせればヴァンガードは何もできないと思っていたからだ」
「それは……」
マルタが言葉を詰まらせる。
「だがソルムのセンチュリオン・コアはブルートが持っている。もうブルートから逃げてラタトスクを目覚めさせることはできない」
「……」
草を踏む兵士の足音が迫る。
「うおおっ！」
エミルは一刀(いっとう)のもとに兵士を斬り捨てた。

里からおろちたちが出てきた。
「……ひとまず敵は退けたようだな」
それでも彼の目は、油断なくあたりを警戒している。
「おまえはこの先も逃げ続けるのか？」
エミルはマルタに向かって訊ねた。一体何事かと、プレセア、リフィル、ジーニアスはふたりを見つめる。

静かになった平原に、小鳥のさえずりが聞こえ始める。
「……勇気は……夢を叶える魔法……」
ぽつり、とマルタが言った。
「……私……もう一度、パパに会いたい」
「マルタ!?」
ジーニアスが声を上げる。
「だけどヴァンガードはマルタが持ってるラタトスク・コアを狙ってるんだよ」
「わかってる。だけど……私……。今まで逃げてるだけで何もしてなかった」
「マルタさんはラタトスクを目覚めさせせようとしていました」
プレセアの言葉に、マルタは弱々しく首を振った。
「それは……結局ヴァンガードを間接的に止める手段でしかなかったんだよ。私……本当はパパと向き合うのが怖かったの。変わっちゃったから……逃げてただけ」
「……今は怖くないの?」
リフィルが訊ねた。
「やっぱり……怖いです。でも……私、勇気を分けてもらったから」
(潮時だな)
ラタトスクモードのエミルは思った。勇気を分け与えたのは、自分ではない。

「……エミル。それにもうひとりのエミルも……ありがとう」
「もうひとりの僕も、マルタに何か言ったんだね」
目覚めた緑の瞳のエミルが、まっすぐにマルタを見つめていた。
「うん。私……私もアルタミラに行かせてください。私、大切なことを忘れてたから」
マルタは仲間たちに向かって懇願（こんがん）する。
「……どのみちここにマルタがいることは知られてしまった。俺は連れて行ってもかまわないのではないかと思うが？」
おろちは言い、隣にいたプレセアを見やった。
「私も……そう思います。私たちでマルタさんを守りましょう」
「姉さん……どうなの？　やっぱり反対？」
ただでさえジーニアスがプレセアに反対するわけがない。気がかりなのは姉の意見だった。
「あら、どうして私が反対だと決めつけるの」
「それじゃあ！」
全員から賛成の返事を聞き、エミルは顔をほころばせた。が、リフィルは微笑みもせず、
「……本当は……あなたを置いていきたかったのだけれど」

と小さな声で漏らす。
「え？」
それがなぜか悲しげに聞こえた気がして、エミルは聞き返した。
「なんでもないわ。マルタ、私たちと行きましょう」
「あ、ありがとうございます！」
マルタがうれしそうに言う。
「話は決まったようだな。ではマルタは貴殿らに任せる。後ほど、アルタミラの手前で落ち合おう」
おろちは約束の場所を指定すると、煙と共に消えた。
（どうしてマルタじゃなくて僕を置いていきたかった、って言ったのかな……リフィルさん……）
エミルはぼんやりと考える。
その横顔をテネブラエがじっと見つめていることに、彼は気づかなかった。

15

アルタミラの入り口にほど近い海岸が、おろちとの待ち合わせ場所だった。
海はどこまでも穏(おだ)やかで、街で起きていることなど夢なのではないかと思えてくるほどだ。
「おろちさんはまだかな……」
エミルがひと気のないなだらかな砂浜を見回していると、
「ここにいる」
突然煙があがり、おろちが姿を現す。
「び、びっくりした」
のけぞるマルタの横で、
「はい、驚きました」
プレセアが微かに頷く。ほとんど無表情だ。
「お、驚いていたようには見えないけど……」

エミルが言うと、
「さ、さすがプレセア！　冷静だね！」
あわててジーニアスがフォローする。
「いえ、だから驚いたのですが……」
プレセアはやはり無表情だ。
「頭の痛くなる会話はその辺りでやめてくれ」
たまりかねたおろちに、
「適切なつっこみをありがとう。ところで、アルタミラの様子はどう？」
リフィルが訊ねた。
「ヴァンガードはレザレノ・カンパニーの第二社屋に本部を置いたそうだ」
「第二社屋？」
「遊園地の近くに作った建物ですね」
プレセアがマルタの疑問に答えた。リフィルは、
「下手に騒ぎを起こせば、第二社屋に辿り着く前に敵に態勢を整えられてしまうわね」
と、分析する。
「じゃあ、どうするんですか？」
エミルが訊ねると、すぐにプレセアが、

「ホテルの地下に、社員用の通路があると聞いたことがあります。それを使えば、第二社屋の前に行くことができると思います」

と提案した。

「さすがプレセア！」

ジーニアスが、うれしそうに彼女を誉めそやす。

「プレセアさんは歳に似合わず冷静ですね」

プレセアの実年齢を知らないテネブラエが感心してみせた。

「我らは敵の援軍が増えないよう第二社屋の周囲を封鎖しつつ、街の中のヴァンガード兵どもを引き受ける。内部に潜入する役目は貴殿らに任せてかまわないだろうか」

おろちはあらかじめ考えていたらしい作戦を、エミルたちに説明した。

「了解よ」

リフィルがみんなを代表して頷くと、

「作戦開始は深夜零時だ。それまでは騒ぎを起こすなよ」

おろちはそう釘を刺して、消えた。

実際に街まで来てみると、ヴァンガード兵ががっちりと入り口を固めてしまっていることがわかった。
「さすがに警備は厳しそうだね」
物陰から警備兵を認めて、エミルが小声で言う。
「これじゃあ零時までに街の中に入れないよ」
「どうする？　騒ぎを起こさないであいつらを何とかしないと……」
マルタとジーニアスがひそひそ囁き合っていると、
「彼らをどかせばいいのですね」
テネブラエが事もなげに言ってのけた。
「肉球さん……」
プレセアがテネブラエをじっと見る。
「テネブラエ、です」
闇のセンチュリオンは嫌味なほどはっきりとした発音で訂正した。
「ワンちゃんだの肉球だの呼ばれるなら、まだテネブラエちゃんと呼ばれる方がマシですよ」
第一私には肉球なんかありませんし、と彼はそっぽを向く。肉球好きのプレセアはショックを受けた様子で、いつもよりよほど表情豊かにがっかりした顔になった。

「機嫌直してよ、テネブラエ。どうするつもりなの？」
マルタがテネブラエに近づいて訊くと、彼は振り向き、
「こうするつもりです」
と、たちまち美女に変身する。
「人間も魔物も美しい女性には弱いものです」
「テ、テネブラエってなんにでも変身できるんだね」
エミルたちが驚いていると、
「センチュリオンですからね。では、行ってまいります。オホホホホ……」
美女はしなをつくり、細い腰をくねくねさせながら兵士たちに近づいて行った。
（あれー？　あの女の人、なんか見たことあるような……）
ジーニアスは、青白い顔色の美女に見覚えがあるような気がしたのだが、誰だったのかは思い出せなかった。
美女は入り口の警備をしていたふたりの兵士の前を、わざとしゃなりしゃなり通り過ぎた。肌も露(あらわ)なかっこうだ。たちまち兵士たちの視線は釘付けになる。
おもむろに振り返った美女は、最高の笑顔で彼らに笑いかけ、「来て」というように白い指を色っぽく動かした。兵士たちはふらふらと美女のあとを追うと、角を曲がり、建物の向こうへ姿を消す。

エミルたちはタイミングを逃さず、ホテルレザレノの中へ走りこんだ。
しばらくすると、テネブラエが美女の姿のまま戻って来た。兵士はうまく撒いてしまったのだろう。
「うまく行ったようですわね。ホホホホ……」
「いつまでやってるの」
エミルはあきれて、口元に手をあてて笑っているテネブラエを珍しそうに見た。
「いやだわ、エミルちゃんたらツレないんだからぁ」
マルタはさすがに気持ちが悪くなってきて、
「テネブラエってこんな性格だったっけ……」
と頬を引きつらせる。
「変身すると性格も変わるんじゃない」
ジーニアスは気がなさそうだ。プレセアに至っては、
「肉球がないと淋しいです……」
まださっきのショックから抜け出せていない。
そのとき、リフィルが咳払いをした。
「とりあえず、ここで夜を待ちましょう。零時になったら行動開始よ」
「地下通路へはどう行くの?」

マルタがプレセアに訊ねる。
「エレベーターで従業員用のボタンを押せばいいと聞いています」
「では零時までくつろぎましょう。オホホホホホ」
どうやらテネブラエは真夜中まで美女でいるつもりらしかった。

ホテルの地下からエレベーターに乗り込む。作戦開始の時刻だった。
エレベーターが停まった。通路の先に、扉が見えた。
「ここが第二社屋に繋がってるんだね」
ジーニアスが確認するが、
「……」
何故かプレセアは答えず、俯いている。
「プレセア?」
「……いえ……。なんだか、頭が痛い……」
彼女は、こめかみのあたりに手をやりながら言った。
「そういえば……僕もちょっと息苦しい感じがするけど……」

プレセアを気遣いながらも、ジーニアスは自分の胸を押さえた。
「ソルムのセンチュリオン・コアが暴走している影響だと思います。よほどコアの力をあくどいことに使ったのでしょう。暴走の力が増しています」
あたりの気配を窺っていたテネブラエ――さすがにもうもとの姿に戻っている――が言う。
「それってどうなっちゃうの？」
自分はまだたいしたことはないと感じながら、エミルが訊ねた。
「ここに長時間留まれば、ラタトスクさまの加護がない皆さんがコアの暴走に影響され錯乱する可能性があります」
「……時間はかけられないという訳ね」
リフィルが頷く。
「リーガルさんもしいなも無事だといいけど……」
ここにいない仲間を想いながら、マルタが呟く。
「仮に暴走の影響を受けたとしてもソルムのコアを孵化させればすぐに収まります」
「私たちがブルートを見つけてコアを取り戻せれば何もかも丸く収まるということね」
テネブラエとリフィルは、マルタを元気づけようとしているようだった。
「……そうですね」

（パパ……）

今度は口に出せず、ブルートを想う。みんな無事でいて欲しいのだ、リーガルもしいなも、あんなに酷い父親でさえも。

「マルタ……大丈夫？」

「……大丈夫。エミルがくれた勇気があるから」

エミルの声に、マルタはまっすぐに顔をあげた。

扉の前までやって来ると、先頭を歩いていたプレセアが振り向いた。

「ここです。多分この先が第二社屋になるのだと思います」

冷たい扉はぴったりと閉まって、まるで壁の一部であるかのようだ。

「ブルートは……マルタのお父さんはどこにいるんだろう」

「単純に考えて、偉い奴は高いところに行きたがるよね」

ジーニアスが揶揄するようにエミルに笑いかけた。

「最上階か……。きっと途中で敵に見つかっちゃうね」

エミルはため息をつく。リフィルが「ええ」と頷き、

「レザレノ・カンパニーの社屋ともなると、それなりの防衛設備も整っていると思うわ。この先はどんなに頑張っても隠密行動は難しいでしょうね」

「第二社屋の見取り図とかないのかな」

　ふと思いついて、マルタが言う。
「警備室のような場所があれば、そういうものもあるとは思いますが……。その手の施設は地下にあるのではないでしょうか」
「よし。まずは警備室を目指そうよ」
　エミルが仲間たちに言う。とりあえずの目的はできた。

　警備室はすぐに見つかった。部屋の外に見張りはいない。エミルたちはいきなりドアを開ける作戦に出た。
「侵入者か！」
　案の定、中にいた数人のヴァンガード兵が飛び出してくる。ドアの両脇に身を隠していたエミルたちは、あっという間に彼らを倒してしまうと、怪しまれないように部屋の中に引きずり込んだ。
　警備室は予想以上に広かった。ただし、壁のほとんどがスクリーンや機械類で埋められており、エミルはひどい圧迫感を感じた。
「……う……。機械だらけで何がなんだか……」

「待って。今、見取り図を出すわ」
リフィルは顔色ひとつ変えずにスクリーンの前に立つと、複雑に並んだボタンを迷うことなく操作してゆく。プレセアも心得たもので、
「警報装置を切っておきます」
と、きびきび動いている。
「ふたりとも、すごい……」
エミルがただ驚いていると、画面が明るくなった。
「……出たわ。スクリーンを見て」
映し出された図面は、第二社屋全体の見取り図のようだ。
「最上階が会長室かな?」
「直通エレベーターがありますね」
ジーニアスとプレセアが見取り図を指さしながら話し合っている。
「それに乗ればすぐブルートのところに行けるの?」
エミルは訊ねた。ほとんど線と記号だけでできている図面の読み方が、どうもよくわからない。
「そうね」
リフィルが頷く。

「ただし、警戒は厳重な筈よ。だからこそここは、二手に分かれることを提案するわ」
「兵力の分散は危険ではありませんか？」
テネブラエが訝った。
「私も……そう思います」
プレセアがリフィルを見上げる。
「ええ、確かにその通りよ。でも、まともにぶつかれば数の力で私たちに勝ち目はないわ。敵の兵力を分散させなければ」
「……もしかして陽動作戦ですか」
ヴァンガード時代の経験からか、マルタが口を開いた。
「そうよ。囮は直通エレベーターの方で騒ぎを起こす。その間に、本隊は非常階段から上を目指すの」
「なら、私が囮の方に……」
名乗りを上げたマルタに、プレセアは、
「マルタさんは……お父様と話をしたいんですよね。それなら本隊に行くべきです」
と言う。が、マルタも、
「でも囮は危険です」
と譲らない。

「どっちも危険には違いないよ。そうでしょ」
ジーニアスが肩をすくめてみせた。こうしている間にも時間はどんどん過ぎてゆくのだ。
「ジーニアスの言う通りだわ。エミルとマルタとテネブラエは非常階段ルートを行きなさい」
リフィルが言えば、もう決まりだった。エミルはすぐに了解する。
「わかりました。リフィルさん、ジーニアス、プレセア。気をつけて」
「そっちもね」
ジーニアスが——主にプレセアを見ながら——エミルたちを気遣った。
「ごめんなさい……。ありがとう！」
マルタはぴょこんと頭を下げた。

非常階段に続く通路に突然姿を現したのは、アリスだった。
「エレベーターの方にいなかったからこっちのルートだと思った」
ペチ、ペチと鞭（むち）を鳴らしながらエミルたちに近づいてくる。

「……パパは……この先にいるの？」
「ブルートはどこだ！　知ってるなら……」
マルタとエミルに睨みつけられて、
「そんな怖い顔しないで……。アリスちゃん、ふたりと争うつもりで来た訳じゃないのよ」
と、アリスは甘ったれた口調で言った。
「どういうこと」
マルタは用心しながら、訊ねた。
「……こんなこと、敵対してたあなたたちに頼むのもしゃくなんだけど……」
アリスは困り果てたようにため息をついてみせる。
「３Ｋのデクスを助けて欲しいの。そのためなら、ブルート総帥の居場所ぐらい教えてあげる」
「デクスがどうかしたの？」
エミルはつい釣り込まれてしまう。
「デクスってば、ロイドに化けるためにブルート総帥からソルムのコアを渡されて、すっかり人が変わっちゃったみたいなの」
「そういえば……確かに前より凶暴になったような……」

マルタが首を傾げてデクスの様子を思い出していると、
「センチュリオン・コアは人間をも狂わせますからね」
当然でしょう、とテネブラエが頷く。
「何とか助けてあげられない？　今もデクスの錯乱が酷くて、奥の部屋に閉じ込めてあるの。かわいそうで見ていられないわ……」
(優しいところもあるんだ。やっぱり女の子なんだなぁ……)
エミルはすっかりうな垂れているアリスに同情してしまった。
「ソルムのコアを孵化させれば、錯乱も収まると思いますが、コアは今ブルートが持っているのでは……」
ううん、とアリスは首を振る。
「あなたたちと戦った後、またデクスに渡されたの。だから助けてあげて！」
「……テネブラエ。ソルムのコアの気配、感じる？」
マルタの質問に、テネブラエは即座に答える。
「それはこの街に入ってから、ずっとしています。ですが、暴走がこの街全体に影響を及ぼしていてどこにあるかまでは……」
そのとき、アリスがいてもたってもいられないという様子で、
「マルタちゃん、お願い。助けてくれたら必ずブルート総帥のところに連れて行くか

ら！」
と、懇願してきた。半泣きになっている。
「マルタ、助けてあげようよ。それにコアを孵化させる必要があるのは確かでしょ」
エミルが言うと、テネブラエはちらりとアリスを一瞥してから、
「私は賛成しかねます。それにデクスは血の粛清であなたのご両親を殺した仇ですよ」
と言い聞かせた。マルタはどうすべきか迷っているようだ。
「……罪は償わせるから！　だから……お願い！」
手を合わせるアリスの瞳には、涙が光っているようにさえ見えた。
エミルはマルタに向かってもう一度説得する。
「……今はコアを孵化させることを優先するべきだよ。それにデクスが錯乱したままなら、パルマコスタのことも聞けない」
「……わかった」
ようやくマルタが承諾すると、
「ありがとう！　デクスはあの部屋よ！　お願い！」
アリスはすぐ近くの扉を鞭で示し、先に立って小走りに走り出した。

錯乱しているというデクスは、通販で買ったアイアンメイデンの蓋に立ったまま固定されていた。蓋の装飾でもある骸骨の腕に羽交い絞めされている格好だ。

「はぁ……はぁ……ソルムのコアを……よこせぇえええええぇぇぇっ！」

白目を剝き、宙に向かって吼えている。

「……ブルート総師にソルムのコアを取り上げられてから、ずっとあの調子なの♡」

何故かアリスは急ににっこり笑うと、鞭の柄に仕込んだボタンをカチリと押した。マルタの足元の床が消える。

「きゃあっ！」

マルタは悲鳴をあげながら、暗い穴に落ちた。

「アリス！　騙したのか！」

驚いたエミルは、素早く元に戻った床をブーツで何度も踏みつけたが、びくともしない。

「デクスがおかしいのはホントよ♡」

騙したなんてとんでもない、という口調で、アリスは微笑んだ。

「ごめんね♡　ブルート総師が、どーしてもマルタちゃんを連れてこいって言うんだもの」

後ずさりながら、彼女は言い訳する。
「ペットちゃんは、デクスと遊んでてね♡　ばいばーい♡」
くるりと踵を返すと、アリスは逃げて行った。エミルはあわてて閉まったばかりの扉に手をかけたが、
「あ、開かない！」
すでにロックされていた。
そのとき、もがきにもがいてアイアンメイデンの拘束から免れたデクスが、
「ソルムのコアをよこせぇえええぇぇええええっ!!」
と、喚きながら走ってきた。エミルの肩を掴むと、思い切り投げ飛ばす。
「うわぁっ!?」
エミルは吹っ飛ぶと、壁に激突してしまう。その衝撃で、彼の荷物の中から小壜がひとつ転がり出た。転がっているうちに蓋がとれ、とたんに強烈な臭いが部屋に充満する。
以前エミルがデクスに無理矢理プレゼントされた、メロメロコウだった。
デクスは、がっくん、がっくん、とエミルに近づいてきていたが、ふっと体を屈め、壜を拾い上げると鼻へ持ってゆく。
「……お……まえ……は……。……俺のファンの少年……」
デクスの声はすっかり掠れている。

「デクス！」
体の痛みをこらえ、エミルはようやく体を起こしかける。
「この強烈な臭いがデクスを一時的に錯乱から解放したようです！」
空中に浮かんだテネブラエが叫んだ。
「……少年？　おまえ、どうしてこんなところにいるんだ？」
彼は上目遣いにエミルをじっと見た。
「……デクス……！　あなたが僕のお母さんとお父さんを……！」
エミルが立ち上がりかけたとき、手をついていた壁に軽い衝撃が走った。
(な、何だ!?)
彼はびっくりして手を離す。するとさらに驚いたことには、
〝おいおいコレットちゃん！　大丈夫かよ〟
壁の向こうからくぐもった声が聞こえてきたのだった。
〝……ご、ごめんなさい。また転んじゃった〟
(あ、あれ、この声……)
エミルがハッとするのと同時に、今度は甲高い機械音が響いた。
ピロピロピロピロピロッ……！
〝……うおっ！　なんか機械が誤作動起こしてるぞ〟

〝ど、どうしよう、ゼロス……。変なボタン押しちゃったかも……〟
ピロピロピロ、プシューッ。
壁がするりと移動した。同時に頭からばったりと倒れこんできたのは、仰向けのコレットだった。その後ろに、口をあんぐり開けたゼロスも見える。
「コレット！　ゼロス！」
突然の再会に目を丸くしたエミルは、思わずコレットに駆け寄った。しゃがみ込んだエミルの手を、寝転んだままのコレットが両手で包み込む。
「エミル！　よかった！　無事だったんだね」
「どうしてふたりがここに……」
手を握られているので立ち上がれないエミルが見上げると、
「相変わらず、コレットちゃんのドジは冴えてるねぇ」
ゼロスはにっこり笑う。それから真顔になると壁の向こう側へ戻ってゆく。
(隠し部屋……？)
エミルがぼんやり考えていると、
「おい、エミル、説明は後だ。とりあえずこっちにこい」
ゼロスが焦れた。
「けど、こいつはお母さんたちの仇……」

「悪いが今は仇討ちよりヴァンガードを追い出すのが先だ！」
エミルはゼロスとコレットに両脇から引きずられ、ずるずると奥の部屋へ滑って行く。
「あ！　おい、待て！」
デクスががっくんがっくんと追いかけてきたときには、壁は元通りに閉まっていた。
「おまえひとりか？　リーガルたちは一緒じゃないのか？」
外野がいなくなると、ゼロスは訝しげに訊いてきた。
「そ……それが……」
エミルが事情を説明しようとしたとき、
「侵入者め！　こんなところにまで！」
ヴァンガード兵が駆け込んできた。
「ちっ！　エミル、戦うぞ！」
舌打ちするゼロスの横で、エミルはあわてて剣を抜く。
(なんだか……次から次へと目が回りそうだなぁ)
幸い、兵士たちは少人数だったので、三人で彼らを退(しりぞ)けるのにたいして時間はかからなかった。
「このままここにいるとやばいな。ひとまず逃げるぞ」
ゼロスが通路側の扉を開け、きょろきょろしながらエミルを手招く。

「話はどこか安全な場所まで逃げ切ってからだ」
「はいっ」
安全な場所といっても、どこが安全なのかわからない。結局エミルたちは、コレットが見つけた別の部屋に駆け込んだ。
簡素な棚の上に木箱が並べられている。倉庫として使っている部屋のようだ。
「とりあえずここまで来りゃ大丈夫だろう。悪かったな、無理矢理連れてきて」
ゼロスはひと息ついて言う。エミルは「ううん」と首を振った。
「でもどうしてここにふたりがいるの？」
「ロイドに頼まれたの」
間を置かず、コレットが答える。
「ロイド……さんに？」
そうそう、とゼロスは頷いた。
「俺さまたち、ロイドを見つけたんだよ。ま、相変わらず何も話しちゃくれなかったけどな」
「ちょうどそのときに、アルタミラがヴァンガードに制圧されたって聞いたの。そしたらロイドがアルタミラを助けに行くって……」
「ならロイドさんもここに？」

エミルは驚いた。この厳戒態勢の下、どこで何をしているのだろう。
「ああ。まぁ、なんだか知らねぇけど一緒には行動できないっつーから別行動取ってるけどな」
もう慣れっこになってしまったのか、ゼロスはたいして不満そうでもない。ロイドを信頼しているのだ。
「エミルは？ どうしてひとりでここにいるの？」
コレットに訊ねられ、エミルは今までのことを手短に説明して聞かせた。
「それじゃあマルタも捕まっちゃったんだね」
話を聞き終わったコレットが、胸の前できゅっとこぶしを握りしめた。
「参ったな。マルタちゃんが敵の手に落ちたら、魔導砲を使われちまうんじゃないか」
ゼロスは額にぴたんと手をあてる。
「僕のせいです。僕がアリスを信じたばっかりに……」
落ち込むエミルを、床に座り込んでいたテネブラエが見上げた。
「エミル。今はそんなことを言っている場合ではありません。私ならマルタさまの気配を探ることができます。ですから……」
「そうだよ。マルタを助けに行こう」
コレットが言う。

「……はい！」
エミルは、自分はひとりではないのだと急に心強くなった。
ヴァンガード兵の気配に注意を払いながら、彼らはテネブラエを先頭にマルタを捜して社屋内を歩き回った。
と、テネブラエが脚（あし）を止めた。
「このフロアからマルタの気配がします。捜してみて下さい」
「わかったよ」
エミルたちはフロア内を端から捜索してみることにした。

「おいおいおい、テネブ。マルタちゃんいねーじゃねーのよ」
最後の部屋——資料室のようだった——を検分し終わるなり、ゼロスが思い切り文句を垂（た）れる。
エミルたちはフロアにある部屋という部屋を調べたのだが、マルタの姿はどこにもなかったのだ。
「……確かに。でもこのフロアから気配がします。それは間違いありません」

宙に浮かんでいるテネブラエは、それでもそう主張して譲らない。
「さっきエミルと会ったときみたいに、隠し通路があるんじゃないかな」
首を傾げて考え込んでいたコレットが言う。
「どうすればいいんだろう……」
エミルがそう口にしたときだった。天井から、誰かが音もなくエミルたちの前に降り立つ。リーガルを助けるためにアルタミラに戻ったしいなだった。
「しいな！」
エミルは驚いて声をあげる。
「なんだデカメロン！　無事だったか！」
ゼロスの言葉を耳にするなり、しいなは彼の顔面をグーで殴り飛ばす。
「殴るよ！」
「いてててて！　殴ったよ、の間違いなんじゃねーの……」
「あんたたちどうしてこんなところにいるんだい」
頬を押さえ、ぶつぶつ言っているゼロスは無視して、しいなはコレットに訊ねた。
「えと、それは……」
「まあ、それは後で聞くか。それより丁度いい！　力を貸しとくれ。マルタを助けるんだ」

「マルタがいたんですか⁉」
一体どこに、とエミルが身を乗り出す。
「リーガルを捜してたら偶然見つけたんだよ。せっかく逃がしたと思ってたから驚いたけどね。――この壁の奥にある倉庫だ。天井裏から行ける」
ついといで、としいなは軽やかなジャンプを決めると、天井の通気口の向こうへと消えた。
「やれやれ……ここを上れってか？」
うんざりした口調でゼロスが天井を見上げる。
「私が運ぶよ」
コレットは背中に美しい天使の羽根を出現させると、ゼロスを軽々と持ち上げて上昇する。
「……さすがコレット」
エミルが微笑んだ。
「エミルも動じなくなりましたね」
「うん。コレットだからね」
彼はテネブラエに言い、いまや膝から下だけになったゼロスが暗闇に消えて行く様を楽しそうに観察する。次は自分の番だと思うと、こんなときなのにちょっとワクワクし

てしまうのだった。

四つん這いでそろそろと天井裏を進むと、やがて倉庫の上に出た。
「下にマルタさまがいます」
鉄格子の嵌った通気口から下を覗き込んだテネブラエが囁く。
「え!?」
エミルはあわてて顔を出し、危うくコレットと頭をぶつけるところだった。
簡単なソファとテーブルのセットが見える。その手前に、後ろ手に手錠をかけられ、床に横座りになっているマルタが見えた。
(あ、マルタ――!)
「パパ！　何度言ったらわかってくれるの？」
マルタの視線の先では、ブルートがエミルたちに背を向ける格好で立っている。
「おまえこそ、何度言えばわかるのだ」
娘を見下し、ブルートは冷たい声で言い放った。

「マーテル教会はテセアラ人を扇動して、シルヴァラント人を虫けらのように撲滅しようとしている。奴らはおまえの母親の仇でもあるのだぞ！　今こそシルヴァラント王朝を復活させ、シルヴァラント人の誇りを取り戻すのだ！」

「確かに教会の人たちがやってきたことは酷かったよ」

マルタは頤を上げ、父親をまっすぐに見る。

「だけどパパたちも、教会の名前を騙ってパルマコスタを襲ってる！　教会やテセアラの人たちに文句があるならもっと別のやり方を探すべきだったんだよ！」

「正義の目的のためには手段など些細な問題だ」

「正義の目的？」

マルタは眉をひそめた。

「パパの目的はシルヴァラントの人たちを救うことじゃないでしょ？　自分が王様になりたいだけなんだ！」

「……かわいそうに。ラタトスクに寄生されているから、考え方まで狂わされたのだな」

ブルートの目に、娘を哀む色が浮かぶ。が、すぐにそれはまた尋常ならざるものにとって変わられた。

「任せておけ。私がセンチュリオン・コアを全て揃えて、おまえの体からラタトスク・コアを取り外してやる。その後で、マーテル教会とテセアラ人を血祭りにあげてやろ

う！」
「パパ！　パパこそソルムのコアに狂わされてるんだよ」
マルタは、天を仰ぐように両手を広げ、焦点の合わない目で何かを見ている父親に、必死に訴える。
「目を覚まして！　こんな馬鹿なことはやめて……」
だが、ブルートはそのまま部屋を出て行ってしまった。
「パパ……」
マルタの呟きは悲しみに満ちていた。

「マルタ……」
エミルは、胸がつまりそうだった。マルタが悲しんでいるのを見るのは、こんなにもつらい。
「……やれやれ。あの親父を説得するのは骨が折れるぜ」
ゼロスがため息をつくのに、
「何とか気絶させて、ソルムのコアを取り上げればいいのです」
と、テネブラエはあっさりと言う。
「それをマルタさまが孵化させれば、コアの影響は消えるでしょう」

「なんにしても、まずはマルタを助けるよ。この先の通気口から下に降りられる。急ごう」
しいながら天井裏の闇を指さしながらエミルたちを促した。

倉庫を警備していた兵士を倒し、中へ入る。
「マルタ！」
エミルが駆け寄ると、
「エミル！　来てくれたの！」
冷たい床の上でひとり涙を滲ませていたマルタが声を上げた。手早く手錠を壊して彼女を自由にしてから、
「ごめんマルタ。僕がアリスのこと信じたばっかりに……」
と、エミルは詫びた。
「ううん……。油断してた私も悪いんだよ」
エミルに支えられゆっくりと立ち上がったマルタの瞳が、驚きに見開かれる。そこに思いがけない仲間の顔があったからだった。

「マルタ！　無事でよかった！」
コレットがうれしそうに微笑む。
「コレット……それにしいなもゼロスも……」
マルタが声を詰まらせると、
「私もいますが」
つまらなそうに、テネブラエが自己主張した。
「ふふ、わかってるよ。ありがとう、テネブラエ」
マルタは身を屈め、闇のセンチュリオンの側に自分の顔を持っていく。
「さて、これからどうする？」
ゼロスが、再会を喜び合う仲間たちの顔をひとわたり眺めながら尋ねた。
「さっきテネブちゃんが言ってたみたいに、マルタのお父さまからソルムのコアを取り戻そう」
すぐにコレットが提案した。
「そうすればブルートさん、正気に戻るんでしょ」
うん、とマルタが頷いた。
「こうなったらそうする以外、パパには話が通じないと思う」
そして父親はここを出て会長室に向かったはずだと、マルタは仲間たちに伝えた。

　一行が会長室の前に辿り(たど)着(つ)いたとき、ふいにエレベーターの扉が開き、油断なく剣に手を伸ばしかけていたエミルは、中から出てきた三人を見て驚いた。

「ジーニアス！　リフィルさん！　プレセア！」

　コレットも三人を認めると、

「無事でよかった！」

　と微笑む。驚いたのはジーニアスたちも一緒だ。

「エミル！　まだこんなところにいたの⁉　っていうか、どうしてゼロスとコレットとしいながいるのさ」

「こっちにも色々事情があるんだよ」

　ゼロスが苦笑した。

「……そう。それじゃあ、リーガルの行方(ゆくえ)はまだわからないのね」

　仲間たちから事情を聞いたリフィルの表情が曇る。彼女たちもまた、手がかりすら見つけていないのだ。

「あたしが助けに戻ったときには、もうリーガルの姿はどこにもなかったからねぇ……」

はあっ、とため息をつくしいなに、プレセアが言う。
「リーガルさんはテセアラの世界に強い影響力を持っています。ヴァンガードが簡単に殺してしまうことはないと思います」
「ブルートを正気に戻すことができれば、アルタミラの制圧も解除されて、リーガルさんを救えるでしょう」
テネブラエはあくまでもソルムのコアに拘(こだわ)っていた。
「そうだね。……マルタ、心の準備はいい？」
実の父親と命がけの戦いをすることになるマルタを、エミルが気遣う。
「……うん。パパを取り戻す！　みんな、迷惑かけてごめんなさい。でもどうか力を貸して」
「もちろん！　ね、みんな？」
コレットの言葉に、仲間たちはみな力強く頷きあった。
「ありがとう」
「よし、頑張ろう！」
エミルはマルタに笑顔を向け、それから唇を引き結ぶ。会長室の扉は目の前だった。

会長室の壁はヴァンガードの旗や垂れ幕で覆い尽くされていた。事情を知らなければ、ここがレザレノ・カンパニーの社屋であるなどと、とても信じられないだろう。
「……マルタ！」
ブルートは娘たちが部屋に入って来たのを見ると、執務机から立ち上がった。
「パパ。ソルムのコアを渡して」
杖を手に、ブルートはゆっくりと進み出る。エミルは、
「渡してもらえないなら力尽くで奪うことになります。僕はあなたとマルタを戦わせたくない」
と、抑えた口調で告げた。
「力尽くだと？　小僧、面白いことを言う！」
ブルートは左手を上げると、
「アリス！」
グローブをはめた指をバチッと鳴らした。すると執務机の横の床が丸く口を開き、下からアリスとリーガルがせり上がってきた。
リーガルは先ほどまでのマルタと同様に後ろ手に手錠をされ、膝立ちになっているが、がっくりと首を前に倒している。半分意識がないような様子にエミルには見えた。服の

あちこちは破れ、血が滲んでいた。アリスに痛めつけられたのだろう。
「おまえたちこそ集めたセンチュリオン・コアを渡せ。渡してくれねば、あの男の命はない」
ブルートの言葉に、アリスは微笑みながら鞭を使ってリーガルの顔を仰向かせる。額や唇にも乾いた血がこびりついていた。
「や、やめて！」
「……卑怯者(ひきょうもの)！」
マルタとエミルが同時に叫ぶ。
「わからん奴らだ。いいか、正義の目的の為なら手段などかまわぬのだよ！」
ブルートが勝ち誇ったように言い放ったそのとき、
「……正義なんて言葉、チャラチャラ口にすんな！」
「きゃっ!?」
アリスが突き飛ばされ、床に激突する。
「何!?」
ブルートが目を剝いた。
声の主は——ロイドだった。彼はリーガルの体を支え、すでに少し離れた場所に移動している。

（ロイド……さん！）

エミルの心が震える。

「エミル！　今だ！」

「……はいっ！」

カジノでブルートと戦ったときの恐怖はまだ記憶に新しい。エミルはそれを跳ね除けるように、力いっぱい返事をした。

そのとき、マルタがスピナーを手に、父親の前に躍り出た。

「ロイドさんたちはもう少し下がっていてください！」

（私がやらなきゃ……いちばんにパパを攻撃しなきゃ……！　そうしないとエミルたちは……）

自分に遠慮してしまうのではないか、とマルタは危惧していた。

「シルヴァラント王に跪けっ！」

ブルートが杖を振り上げる。

「鳳凰震脚――きゃっ⁉」

マルタは大振りしたスピナーをいとも簡単に杖で叩き落とされ、悲鳴をあげた。

「俺に任せろっ！」

「そうそう、そういうこと！」

ブルートに接近するエミルの背後から、ゼロスが盾を持ち上げてマルタに合図する。
(エミル……)
マルタは、エミルが父親に斬りかかって行くのを見ていた。
「うおぉぉぉぉっ！」
だが、そのときブルートのナーストロンドが発動された。
エミルの剣はブルートの腕を確かに捉えたが、
「きゃああっ!?」
背後にいたしいなやジーニアス、プレセアたちが巨大な岩の出現に巻き込まれて倒れる。
「てめぇっ！」
ブルートの力を初めて目の当たりにしたゼロスは驚いた様子だったが、
「優しき癒しの風よ――ヒールウィンド！」
倒れた仲間たちを風の魔方陣で癒した。だが、その効果が充分に出ないうちに、ブルートのアームスヴァルトーニルの闇の波動が襲う。
「パパっ！　もうやめて、パ……」
マルタは思わず叫びかけ、言葉を飲み込んだ。目の前でエミルが戦っている。
(私も行かなきゃ！)

「マルタ！　援護するわ！」
「お願いしますっ！」
リフィルに頷きながら、エミルのもとへ走った。
長い長い戦いが続く。リフィルのハートレスサークルに助けられながら、マルタは無心になろうと努めた。父親との間合いに集中し、その体にスピナーの傷をひとつずつ刻んでゆく。
と、エミルが強く床を蹴った。魔王獄炎波（まおうごくえんは）の剣がブルートを斬り上げ、引き裂き、その体を翻弄する。
「この一撃で――沈めっ！」
「ぐわあぁぁぁぁぁぁぁ――――っっ!!!」
恐ろしい叫び声をあげて身悶（みもだ）えするブルートを凝視しているマルタに、エミルの赤い瞳が「どうする？」と訊いていた。とどめを刺すかと訊ねているのだ。
（え……？　わ、私……！）
ハッと我に返ったマルタの瞳に映ったものは、息も絶え絶えに執務机にしがみつくようにして倒れこむ父親の姿だった。
「パパ！」
マルタが悲鳴をあげながら駆け寄った。と、そのとき、

「……みぃつぅけぇたぁぁあああぁぁ‼」
会長室によれよれと入って来たのはデクスだった。目をギラギラさせ、いちだんとひどい人相に変わってしまっている。
「デクス！　あんた……」
さすがのアリスもそれきり絶句した。
「コアをよこせぇぇえええええぇぇええ！」
父親の体に覆い被さろうとするマルタを跳ね除け、白目を剝いたデクスはブルートの肩をひっ摑んで仰向かせる。
「デクス……貴様……ぐふっ⁉」
薄く目を開けたブルートの胸に、デクスの拳が埋まる。引き抜かれたとき、デクスの手には怪しく輝くソルムのコアが握られていた。
「パパ……パパ⁉」
床に倒れていたマルタは上半身だけ起き上がり、信じられない光景を凝視していた。
ずるり、とブルートの体が滑り落ちる。
「デクス――――ッ！」
エミルがデクスに飛びかかった。その拍子にコアはデクスの手を離れ、執務机の上に落ちた。テネブラエはふわりと机に着地すると、コアを前脚でしっかりと押さえる。

「マルタさま！　孵化を！」
「パパが！　パパが死んじゃう！」
マルタにはテネブラエの声など耳に入らない。みるみる血の気が引いてゆく父親を見て半狂乱になっている。
「私に任せなさい！　あなたはコアを！」
リフィルが治癒術を施し始めながら、横目で叫んだ。
「で、でも……」
だが、マルタは父親のそばから離れることができずにいる。そのとき、エミルと揉みあっていたデクスがようやく立ち上がり、
「そいつをよこせぇぇえええぇえぇぇええええ！」
震える手を伸ばしながらコアに近づいてきた。エミルにずるずると引き戻されては、また前進してくる。
「早くなさい！」
リフィルの厳しい口調にハッと我に返ったマルタは、
「は……はい！」
コアを手に、孵化の儀式を行った。
「……お……俺は……一体何を……」

デクスはぺたんとしりもちをついたまま、驚愕(きょうがく)の表情であたりを見回している。正気が戻ったのだった。

「デクス！　こっち！」

アリスが手招きして部屋から駆け出してゆく。デクスはがに股でちょこちょこ走り、アリスのあとを追った。

「待て！」

仲間たちと一緒にブルートの容態を見守っていたロイドがそれに気づき、と、会長室を飛び出して行った。そのあとをゼロス、しいな、ジーニアスが追う。

それからほどなくして、リフィルの治癒術が続くなか、ブルートがうっすらと目を開けた。

「パパ……」

「……マルタ……か……」

ようやくパパが私を見てくれた、とマルタは思う。ブルートの瞳からは狂気が消えていた。

「パパ！　しっかりして！」

「……俺は……今まで……何をしていたんだろう……な……」

ブルートは苦しい息の下で言い、胸を大きく上下させた。

「パパ！　待って！　今私も治癒術を……」
温かい指が体の上にかざされるのを感じながら、彼はとぎれとぎれに言う。
「マルタ……。俺は……パパは……大変なことをしてしまったようだ……。いつからこうなってしまったのか……もう覚えていないが……ヴァンガードの暴走を……止めねば……」
「これ以上しゃべらないで。助かるものも助からなくなるわ」
リフィルがブルートをぴしゃりと遮った。微かに頷いたブルートは、
「……リヒターに……ヴァンガード解散を伝えてくれ……」
と、エミルを見上げて囁くように言う。
「どうしてリヒターさんに……」
エミルは聞き返した。
「リヒターに教えられたんだよ……」
ブルートの視線が彷徨う。
「ラタトスク・コアと魔導砲があればシルヴァラント人を解放できる……と……。そこで俺に王になれと……。馬鹿げた話だ……。何故俺は断らなかったのか……奴からソルムのコアを渡されたあたりから……記憶が……」
そこまで口にして、彼の唇は動きを止めた。

「大丈夫。まだ息はあるわ。とにかく医者を連れてきて！」
リフィルが言う。
「は、はい！」
弾かれたように立ち上がるマルタに、
「僕も一緒に行くよ！」
と、エミルが声をかけた。
「ならば私も……」
リーガルが腕をさすりながら名乗りを上げたが、
「リーガルさんの怪我では、現状足手まといになる可能性があります」
プレセアは冷静に告げた。
「私がエミルさんたちに付き添いますからリーガルさんとコレットさんは……」
「リフィル先生を守るんだね。任せて！」
コレットが大きく頷く。
「すまない……」
リーガルは、レザレノ・カンパニーの社屋にいながら役に立たない自分を恥じているように見えた。

医者を迎えに行くためには、いったん外へ出なければならない。怪我人が総帥本人なのだからヴァンガード兵に見つかっても問題はなさそうなものだが、果たして彼らが信用するかどうか。

エミルがそんなことを考えながら、マルタとプレセアと共に第二社屋の入り口近くまで来たときだ。

思わず「あっ」と声を上げそうになる。ゼロスとジーニアス、そしてしいなが、バラバラの方角を向いて倒れている。そして彼らのほど近くでは、アリスとデクスを追って行ったはずのロイドが、リヒターと戦っていた。

「……く……っ！」

ロイドはすでに相当痛めつけられている様子だった。息も上がってしまっている。

「おまえの力は……一体……」

するとリヒターは、

「やはり世界再生の英雄といえども魔界の力にはかなわないか」

と皮肉たっぷりに唇を歪めた。

「リヒターさん！」

ロイドの横に立ったエミルが思わず名を呼ぶと、リヒターはロイドから視線をはずさぬままで、

「……エミル。俺はもう決心した。たとえおまえがその姿だろうと、俺はおまえを斬る！」

と宣言した。

「リヒター……さん」

エミルは覚悟を決めると目を閉じ、剣を抜いた。ラタトスクモードのエミルが目覚める。

斧を手にしたプレセアは、

「ロイドさんは休んでいてください」

と、テネブラエが召喚(しょうかん)した魔物(ウルフ)たちとマルタの横に立った。

リヒターがゆっくりとエミルたちに向き直る。

「崩襲撃(ほうしゅうげき)っ！」

プレセアの斧からリヒターの足元に衝撃が走った。一瞬バランスを崩しかけたリヒターは、だが、

「陽流(ようりゅう)・丙(ひのえ)！」

同じ動きで力の差を見せでもするように、噴き上がる炎でプレセアを一瞬で吹き飛ば

す。エミル以外には興味がないとでもいうように飛びかかってきたウルフを斬り捨てると、彼はまっすぐに獲物に挑みかかった。
「陽流・戊(つちのえ)！」
「くっ！」
斧と剣の攻撃を浴び、エミルは後ずさる。
「フォトン！」
マルタがリヒターの頭上で光の爆発を起こした。その隙に体勢を立て直したエミルは、リヒターに挑みかかる。
しばらくは剣と斧、剣と剣のぶつかり合う音だけが響いた。やがて頃合いを見計らったエミルが、
「遊びは終わりだ――」
魔王獄炎波を放つ。だがリヒターはものともせず、斧を投げ捨てると、両手で剣を天に向けて掲げた。
「タワーリング・インフェルノ！」
目も眩(くら)む光の帯が、激しくエミルを刺激する。
「ううっ！」
身体に受けるダメージとは逆に、冴(さ)え渡(わた)る意識の中に何かが見える予感がする。

「はぁ……はぁっ……」

繰り返す激しい呼吸を押さえつけ、構えたエミルの剣が新たな光に染まった。リヒターの視線を感じながら、エミルは光を投げつけるように、

「アイン・ソフ・アウル！」

力任せに腕を振り切った。

術を受け止めたリヒターはそれを吟味しながらも威力に押され、壁際まで後退する。

「この技。このタイミング――」

光の中でリヒターは確信する。

「やはり……おまえがラタトスクかッ！」

リヒターが返した凄まじいエターナル・リカーランスの光が、エミルに迫る。

(……効か、ない……これ、は……確か……)

呆然と見つめるエミルの脳裏に、

「っ………!!」

あ、あ、あの光景が――ついに、蘇った。

「あなたが大樹カーラーンの精霊ラタトスクですね」
白衣を着た人間の青年がまっすぐにこちらを見ている。少し緊張しているようだ。
――……そう……呼ぶ奴らもいたな。
もうひとりの男はハーフエルフだ。
「ラタトスク。今、世界の自然はマナのバランスを欠いて狂い始めている。これをただすにはあなたの力が必要だと推測するが」
――……バランスを整えても樹がなけりゃ、世界は滅びるな。
そう答えてやると、
「新しい樹が誕生したと聞いています」
人間はまるでどこかの世界のことのように喋った。
「でも調べたところ、新たな樹の精霊にはあなたのようにマナの流れを操る力はないようです」
――……ふん。それで？
「お願いです！　センチュリオンを使ってマナのバランスを整えて下さい。そうすれば、世界は救われる」
――……目を覚ませ、センチュリオンども！　魔物どもと縁を結び、マナを整えろ。
そしてこの俺の宿り木を滅ぼした『ヒト』を根絶やしにしろ！

「な……何を言うんですか！」
ヒトの青年が顔色を変える。
——世界が救われればいいんだろう？
「人間を滅ぼす必要がどこにあるんです！」
思い上がった台詞だった。
——大樹カーラーンを滅ぼしたのは誰だ？　人間とハーフエルフじゃねぇか。なら同じように滅びてもらわないとな。
「で、でも、世界には新しい世界樹が生まれました！」
——そして、それをまた滅ぼすだろうよ、おまえたちは。いいか、そもそもヒトってのは世界にとって害虫なんだよ。
「そんなことはありません！」
害虫と言われて傷ついたのか、青年は必死で訴える。
「人間もハーフエルフもこの世界を構成する大切な……」
——うるせぇんだよ！
その瞬間、青年はまともに力を喰らって吹っ飛んだ。その体はかなりの距離を転がり、止まった時にはそれこそ潰れた虫のようにただの汚い塊と化しているように見えた。
「アステル!?」



ハーフエルフが叫んだ。
――ほら。害虫一匹死んでも世界にはなんの影響もない。
手遅れとわかっているのに何故叫ぶのだ。世界はなにも変わっていないというのに。
「……貴様……っ！　よ……よくもアステルを……！」
ハーフエルフが迫ってくる。武器を振り上げる。
「うおぉぉおおおおおおおおっ！」
殺される。斬り殺される――――！

力なく膝をつくと、瞳が緑色を取り戻した。
「……そ……そうだ……。それで……」
エミルはうつむいたまま呟く。
「それで……俺は、あいつに……」
「我が友アステルの仇だ！」
リヒターが右手の剣を振り上げる。リヒターの眼鏡の奥の瞳には、怒りと悲しみを超越した強靭な意志が浮かんでいた。

同時にマルタが両手を広げ、
「……あんたも、目的のためなら手段は選ばないって言うの！」
エミルを守るために立ちはだかった。
「パパを利用して、罪のない人たちを殺して、その上、あんたを信じてたエミルを殺すの!?」
「アステルにも罪はなかった！」
駆け寄り、マルタに振り下ろした剣を、
「……ラタトスクを殺させる訳には行かない！」
ロイドの右の剣が素早く受け止め、ふたりはそのまま睨み合う。
「ロイド・アーヴィング！　おまえは何なんだ！　なんの目的で俺の邪魔をする！」
「今この瞬間は、エミルの友としておまえを阻止するっ！」
ロイドがリヒターを押しのけると、そのまま先ほどの斬り合いの続きになる。
「さっきの魔界の力、そう何度もは使えないらしいな！」
リヒターの威力が目に見えて落ちていることにロイドはすぐに気づいた。
「……くっ！」
思わずリヒターが唇を噛みしめたとき、
「サブロー！」

上方から、ティリーを操るアリスの声が聞こえた。

二体の丸い魔物が降りてくる。リヒターは一体の横腹にしがみつくと、アリスを乗せたもう一体と共に飛び去った。

「……逃がしたか。――エミル、大丈夫か？」

ロイドが心配そうに振り返る。

エミルはもうロイドの声も聞こえない様子で、そのまま前のめりにゆっくりと倒れた。

16

「目覚めたばかりで力を失っているとはいえ、ヒトの分際で……この俺に深手を負わせるとは……」
苦しい。灼けるような感覚が広がる。
男が両腕を振り上げ、
「――死ね！」
剣と斧とを叩きつける。
衝撃。
「うわぁ――――!?」
視界が回る。最後に目に入ったのは、男の足元だった。
「なんだ？　こいつは……」

コツン、と音を立てて床に落ちた赤い宝珠に、男（リヒター）が目を落とす。センチュリオン・アクアが現れた。

「それはラタトスクさまのコアよ。破壊しなければラタトスクさまは何度でも甦る」

「──裏切るつもりですか、アクア！」

センチュリオン・テネブラエは叫びざま、しっぽでラタトスク・コアを掴み取った。

「それを渡せ！」

リヒターが剣を構えるより早く、

「ラタトスクさまを殺させる訳にはいきません」

テネブラエは走り出す。そして、そのまま闇の中に姿を消した。

「……ここは……」

ハッと目を覚ましたエミルは、その明るさにあわてて起き上がった。

ホテルレザレノの一室だ。窓から見える海が煌（きら）めいている。

──我が友アステルの仇（かたき）だ！

一瞬、リヒターの姿が脳裏（のうり）に甦る。

「僕が……ラタトスク……？」
「……ラタトスクさま」
エミルの目覚めを待っていたのだろう、テネブラエが姿を現した。
「……僕はエミルだ」
「もう、完全に思い出されたのでしょう？」
「……確かに……」
エミルは苦しげに唇を動かす。
「リヒターさんに殺された記憶はあるよ。だけど、それが僕のものだなんて思えない！第一ラタトスク・コアはマルタの額(ひたい)についているじゃない」
「あれは偽物です」
さらりとテネブラエは言ってのけた。
（偽物――!?）
「あなたは血の粛清(しゅくせい)の夜、マルタさまの助けを求める声に応じて孵化(ふか)なさいました。そうすることで敵の目をあなた様ご自身から、マルタさまに向けることができるからです」
「マルタを身代わりにしたってこと!?」
エミルは弾かれたように立ち上がり、控えているテネブラエを睨みつける。
「そうです」

「……最低だっ！」

（……マルタはずっとあれが本物だと信じているのに！）

信じていたからこそ、ヴァンガードも疑わなかった。結果、何度も命を奪われそうになったのだ。

「目覚めたばかりのあなたが本来の力を取り戻すためには時間が必要だったのです。現にあなたは少しずつ本来の強さを取り戻し始めています」

「……」

マルタの今までの苦しみは何だったのだろう。

（マルタだけじゃない。僕は……僕は……）

とにかくマルタに会わなくては。エミルはふらふらと部屋を出た。エレベーターの扉が開き、マルタが降りてくる。

「エミル……。大丈夫？」

彼がひどい顔色をしているのを見て、マルタは駆け寄ってくる。

「……マルタ……。……僕は……誰？」

「エミル……」

マルタはちょうどその場に現れたテネブラエにちらりと視線を送ってから、再びエミルを見つめた。

「僕はエミルじゃないってテネブラエが言うんだ。でも僕には子供のころの記憶があるよ。ちゃんとお父さんとお母さんと……一緒に……」

「……記憶は嘘をつきます。あなたのその記憶は、エミルを演じるために後から補完した記憶です」

「テネブラエ！　やめて！」

マルタが悲しげに遮る。テネブラエが喋れば喋るほど、エミルは自分を失ってゆくというのに。

「エミルさまがラタトスクさまであることを敵に知られた以上、今までのように真実を隠しておく方が危険なのです。私はラタトスクさまにお仕えするものとして、エミルさまを守らなければなりません」

「テネブラエ！　エミルを追いつめないで！」

もう一度テネブラエに強く言ってから、マルタは、

「エミル。パパがあなたに会いたがってるの。来てくれる？」

と努めて穏やかに訊ねる。

「ブルート……さんが、僕に？　いいけど……」

「よかった。パパは今、下の部屋にいるの。一緒に行こう」

「……うん」

エミルはマルタが開けてくれた扉から、エレベーターに乗り込んだ。

「ブルート殿は重傷だ。あまり長時間話し込むのはやめてくれ」
エミルの顔を見るとおろちは言い、部屋から出て行った。
「……エミルくんだったな。娘を助けてくれてありがとう」
窓際に置かれたベッドに寝かされているブルートは、弱々しい、だが優しさのこもった声でエミルにまず礼を言った。ソルムの狂気が消えたいま、エミルの目に彼はヴァンガードの総帥というより、マルタの父親として映る。
「い、いえ……。あの……すみません。僕たちがあなたを……」
「いや、謝らないでくれ……。きみのおかげで私は自分を取り戻したのだ」
ブルートは微かな微笑さえ浮かべて、穏やかにエミルを見上げる。
「あの……お話というのは……」
エミルが水を向けたとたん、ブルートの瞳に鋭さが戻る。
「きみはリヒターと親しいそうだな。こんなことをしでかした私だが、ひとつ忠告させてくれ——ヴァンガードを今のような戦闘集団に仕立て上げたのは、他ならぬリヒター

だ」

　ひと呼吸置き、ブルートはエミルをひたと見据える。

「リヒターを信じるな」

「そ、そんな！」

　思わず声を荒らげてしまってから、エミルは彼が怪我人だったのだと気づく。が、ブルートの目は次第に力強さを取り戻してゆくようだった。

「私は自分の責任から逃げるつもりで言ってるのではない。確かに私はテセアラとマーテル教会を憎んでいる。私は私自身の意志でヴァンガードを設立したのだ。だが、リヒターがいなければヴァンガードが今ほど大きな力を持たなかったのも事実だ」

　ブルートは記憶を辿るように、

「リヒターの言葉には不思議な力があった。従わざるを得ない強い力がね」

と告げると、静かに頷いた。

「強い力……」

　確かにあの人の力は得体が知れないところがある、とエミルは思う。

「ヴァンガードの生き残りには投降するように命じた。大多数の者は命令に従うだろう。だが、リヒターに心酔（しんすい）する者も多い。彼らはどこかに集結し、再び世界を混乱に陥れるかもしれん」

エミルはブルートから視線をはずすと、
「マルタ。リヒターさんの行方は?」
と、訊ねる。
「今、リーガルさんたちが調べてるけど、まだわからないみたい」
連絡を待っているところだとマルタは答えた。
「……自らしでかしたことに決着をつけられない自分が恥ずかしい。だが、リヒターを止めて欲しい」
ブルートが再びエミルに話しかける。
「ソルムのコアの力を借りた私ですら倒せたきみだ。きっとできる」
「……ぼ、僕は……」
エミルはどんな言葉を返せばいいのかと、俯(うつむ)いてしまう。
(僕こそ世界を滅ぼす存在かもしれないのに……)
そのとき、廊下で待っていたおろちが部屋に入って来た。
「面会はそれぐらいにしてくれ」
エミルは長居をしたことを詫びると、ブルートの部屋を辞すことにする。
「頼むぞ……」
背中に届いたブルートの言葉に、振り返れない自分が情けなかった。

廊下に出ると、
「ここにいたんですね」
ちょうどやって来たプレセアがほっとしたように言った。階上のエミルの部屋を覗いてきたところだという。
「プレセア、どうしたの」
マルタが首を傾げる。
「リヒターの行方がわかったそうです。リーガルさんがレザレノ本社の屋上庭園で待っています。行きましょう」
「！」
エミルたちは本社へと急いだ。

プレセアの案内でレザレノ本社の屋上庭園まで昇ると、そこにはリーガルだけでなく、仲間たち皆が待っていた。
円形にしつらえられた花壇には咲き乱れる花こそないが、周りを流れる水のおかげで緑の芝生が青々と茂っている。

らしい」

「それより、リヒターの行方がわかった。奴は異界の扉と呼ばれている遺跡へ向かった

ロイドでいい、と彼は微笑んだ。

エミルはその中にロイドの姿を見つけた。

「ロイドさん!」

「異界の扉? どうしてそんなところに……」

マルタがふしぎそうに訊ねると、

「あそこからはギンヌンガ・ガップへ行けます」

テネブラエが芝生の上に姿を現して言った。

「ギンヌンガ・ガップ? 伝説の、世界の裂け目があるという?」

遺跡の話題に、リフィルの目が光る。

「ギンヌンガ・ガップは魔界ニブルヘイムへ繋がる裂け目——そこに扉を作って守って

いたのがラタトスクさまです。アステルが殺された場所でもあります」

と、テネブラエは頷いた。

ロイドはハッとし、眉をひそめる。

「まさかリヒターの奴、そのギンヌンガ・ガップから新たな魔族の力を借りようとして

いるんじゃ……」

「魔族⁉　どういうことですか？」
急きこむエミルに、ゼロスが応えた。
「リヒターは魔界ニブルヘイムに棲む魔族と契約して、力を借りているらしい」
「そ、そんなことができるんですか？」
マルタが目を丸くした。ウルフたちと契約するのとは訳が違いすぎる。ロイドは確信を抱いているようだった。
「奴は魔族の力を使って俺たちを攻撃してきた。魔族と契約しなければできないことだ」
「馬鹿な！　ニブルヘイムの奴らが見返りもなく力を貸し与える訳がない」
テネブラエは事の重大さに困惑している様子だったが、すぐに真相に思い当たった。
「……そうか……奴の狙いはラタトスクさまの死……。ならば魔族どもと利害が一致する！」
「どういうこと？」
コレットが訊ねる。
「ギンヌンガ・ガップはラタトスクさまの存在によって守られています。ラタトスクさまが生きている限り、魔族どもも扉を開くことができない」
それで、とプレセアは、
「リヒターさんがエミルさんを殺す代わりに、魔族が力を貸しているんですね……」

テネブラエの言葉に頷いた。
エミルは、ラタトスクが話題に出ているのに自分だけが置いていかれている気がして、
「僕……本当にラタトスクなの？　まだ信じられないよ」
と、弱々しく呟いた。するとテネブラエが、
「実感がなくて当然でしょう。今のエミルさまは、ラタトスクさまが姿を隠すために作られた擬似人格です。ラタトスクさまご自身の記憶は、皆さんがラタトスクモードと呼ばれている方のエミルさまが持っていらっしゃいます」
と説明した。
「擬似人格なんて言わないで！」
平然とそんな言葉を使うテネブラエが許せず、マルタはつい感情的になってしまう。
「つらいかもしれないけれど、テネブラエの言うことは恐らく正しいわ」
「リフィルは最初からエミルがもうひとりのエミルを守るために作られた仮の人格だと考えていた」
「リーガルさんたちまでエミルを否定するんですか？」
マルタは、テネブラエに同調するリフィルとリーガルをキッと睨んだ。プレセアが、
「違います。ふたつの人格のどちらもラタトスクでありエミルさんなんです」

と補足してやらなかったら、エミルのためにもっと激しく抗議していだろう。エミルは気遣わしげにマルタを見ていたが、その視線が彼女の前髪あたりに止まる。
「それじゃあマルタの額のコアは……？」
「多分それはただの偽物だよ。取り外せるのはラタトスク――エミルだけだと思う」
しいながが複雑な表情でエミルを見た。
（僕しかコアを取り外せない、ってこと……？）
「僕が……ラタトスク……？」
ますます頭を混乱させているエミルのために、ロイドがおもむろに口を開いた。
「……オレは、エミルの疑問に答えをあげられると思う」
「どういうこと」
マルタが身を乗り出すと、ロイドは、
「契約がある。今のオレからは何も話せない。だが答えを知っている人に会わせることはできる」
と言う。
「会わせてください」
エミルは間髪を入れずに頼み込んだ。
「俺さまも興味あるねぇ。そいつに会えば、ロイドくんが何をしていたかもわかるんだ

ろう」
ゼロスが腰に手を当てて言う。彼は他の仲間たちと同様、事情を明かされないままここまでロイドを信じてきたのだった。
「知りたいなら、世界樹の元へ来てくれ。世界樹の守人(もりびと)が話してくれる。オレもそこでおまえたちを待つ」
ロイドはそれだけ言うと、庭園を横切ってゆく。
「ロイド！　待って！」
コレットが呼び止める。一瞬立ち止まりかけた彼は、だがそのまま歩み去る。先に世界樹の元へ出発したのだろう。
「で、エミルくん。おまえはどうするよ。行くのかい」
ゼロスが試すような目でエミルを見る。
行きます、とエミルは迷わず頷いた。
「リヒターさんのことも気になるけど、今は僕が誰なのか……それをはっきりさせたい」
「エミル。私も連れてってくれるよね」
マルタに言われ、エミルは驚いた。
「……ど……どうして？　僕は……人間を滅ぼそうとしているラタトスクかもしれないのに……」

「そんなの関係ない！　今まで一緒に旅したエミルはそんな奴じゃないって、私知ってるもん」
すると、ジーニアスが、
「もちろん僕たちも知ってるよ。ね？」
と、仲間たちを見回した。全員がエミルへの信頼を胸に大きく頷き合う。
「みんな……ありがとう……」
ひとりで決着をつけるしかないと思っていたエミルの胸が、熱くなった。

ロイドが世界樹の守人と繋がっていたという事実は、特に世界再生時の仲間たちを興奮させた。世界樹の元へ向かう道すがら、彼らの興味はロイドがひとりで何をしていたかより、守人がどんな人物なのかということに移ってしまったようにさえ見えた。
山あいには清冽な水が湧き、まだほんの若樹である世界樹の成長を助けている。水煙のなか、世界樹をはさむようにして、ロイドと一緒に立っていたのは——ユアンだった。
エミルは、青い髪を長く伸ばしたこの守人とどこかで会ったことがあるような気がした。が、思い出せない。

「ユアン……」
リフィルが声をあげる。
「あなたが世界樹の守人だったのね」
ユアンは頷くかわりに、
「ロイドから話は聞いた。ラタトスクが覚醒（かくせい）を始めたようだな」
と、エミルに視線を当てる。
「あなたは……あなたたちは何を知っているんですか？」
エミルは訊ねたが彼はそれには答えず、
「エミル。おまえは自分をなんだと思っている？　精霊ラタトスクか、それとも人間か」
と訊いてきた。
「僕は……人間……でありたい……」
エミルは、願望だけを口にする。それを聞いたマルタがユアンに向かって言った。
「エミルが何者かってことに意味があるの？　心の中にもうひとつの人格があったって
エミルはエミルだよ！」
「……そうであることを信じたい。人間エミルの優しさが精霊ラタトスクの優しさでも
あると」
ユアンは目を閉じて言う。それが守人の願いに過ぎないと感じたエミルは、

「じゃあ、僕はやっぱりラタトスクなんですね……」

と、自分に言い聞かせるように呟いた。

「本質的にはそうだ。我らは、ラタトスクによる人類の消滅を阻止するために動いていた」

「じゃあ……リヒターさんと同じように、僕を殺そうとしているんですね……」

「違う。ラタトスクは大樹カーラーンの精霊であると同時に、ギンヌンガ・ガップの守護者だ。ラタトスクがいなくなればギンヌンガ・ガップが開き、世界はニブルヘイムの領土となる。それだけは避けねばならない」

ユアンの言葉が終るのを待って、ロイドが口を開く。

「俺たちは、精霊マーテルの依頼でラタトスクをギンヌンガ・ガップへ封じるために動いていた」

「ギンヌンガ・ガップへ、封じる？」

その意味がわからず、マルタは聞き返した。

「ラタトスクとセンチュリオンのコアをギンヌンガ・ガップの扉に埋め込んで鍵にする。そうすればニブルヘイムの干渉(かんしょう)を避けて人類を守ることができる」

封じるとはそういうことだ、とロイドは説明した。

「それならどうして私たちに話してくれなかったの？」

ロイドの心配ばかりしてきたコレットが、首を傾げて訊ねた。
「ラタトスクに、俺たちの計画を知られるわけにはいかなかったからだよ。ラタトスクは魔物たちのネットワークを持っているんだ」
「我らもこの計画は、新たな名前を得たことでラタトスクの影響を受けない世界樹の側でしか話せなかった」
ロイドとユアンは世界樹を振り返る。あの日——ロイドはユアンに呼び出され、ここを訪れたのだった。
「それにこれがマーテルの指示だとわかれば、ラタトスクは世界樹の新たな名前を調べ、マーテルから奪おうとしただろう」
「奴が樹を手に入れれば、我らは対抗手段を失ってしまう。おまえたちは世界樹の名を知っているしな」
するとしいなが、
「あたしたちの口は軽くないよ。樹が安定するまで新しい名前は口にしない。それがマーテルとの約束だ」
と心外だとばかりに言う。だが、ユアンは首を振った。
「コアの存在がある。あれは悪意を呼び寄せ所有者と周囲の人間を狂わせる。おまえたちが狂えば樹の名前はたやすく知られる」

マルタはソルムのコアのことを思い出し、そっと俯いた。
「でも、ロイドさんは……」
プレセアが疑問を口にすると、ロイドは笑った。
「俺は世界樹の名付け親としてマーテルの加護を得た。コアは精霊の加護を得た者には作用しない」
コレットが安堵のため息を漏らすのが、仲間たちの耳にも届く。
「でもいいんですか。僕にこんな話を聞かせて。僕はラタトスクなんですよ」
エミルが問うと、ロイドはまだ微笑んだままの顔を彼に向けた。
「ユアンも言ったろ。エミルを信じたいって」
「え……？」
「エミルが一度だって喜んで誰かを傷つけようとしたか？　ラタトスクの心が表に出始めても、エミルは消えなかった。俺たちはその心を信じたい」
エミルはじっと聞き入っている。
「エミルは作られた人格じゃない。ラタトスクの中にあるもうひとつの心——良心なんだよ」
（ロイド……さん……！）
悪いことばかり考えながらここ——かつて救いの塔があった場所——まで来た。それ

なのにロイドの言葉の心強さときたらどうだろう。
「それって……ラタトスクが目覚めても人間を滅ぼさない可能性があるってこと？」
マルタは半信半疑だったがその瞳には希望の色が浮かんでいる。
「ああ。ラタトスクが人類の敵でなければギンヌンガ・ガップに封じる必要はない」
ロイドはエミルに近づくと、右手を差し出した。
「だから俺は、エミルを——ラタトスクの良心を守る。一緒にみんなが幸せになれる方法を探そうぜ！」
おずおずとエミルも手を出した。ロイドはがっちりと握ってくれる。
「……ありがとう。ロイド」
グローブ越しの握手は温かく、力強かった。
「我らがやるべきことは、エミルとラタトスクというふたつの人格をひとつに戻すことだ」
ユアンが言う。
「その時エミルの人格が消えなければ、ラタトスクは敵ではなくなる」
リフィルの言葉にも願いがこめられている。
「……僕が消えてしまえば？」
「ギンヌンガ・ガップに封じることになる」

ユアンが目を伏せた。ジーニアスは、
「人格がひとつになるとエミルの記憶はどうなっちゃうの」
と、ユアンに訊ねた。
「わからぬ。存在の強い方が残るのか混じり合うのか……」
「そ……そんな……。それじゃあ、エミルに死ねって言ってるようなものじゃない」
結局確かなことはないのだと、マルタは不安に押し潰されそうになる。
するとロイドが言った。
「ああ。だから何か方法はないかマーテルに聞いたんだ。マーテルは、イセリアで心の精霊の加護を受けろと教えてくれた」
「！」
驚きの表情を見せたのはしいなだった。ユアンはそれには気づかず、
「おまえたちにレアバードを託す。それがあれば自由に移動できるだろう」
と言ってくれた。
「ありがとうございます」
「エミル。これでおまえを守れるっていう確証はない。でも今はこれしか方法がない」
頭を下げるエミルに、ロイドが訊ねる。
「どうする？　これはエミルの問題だ。エミルの判断にゆだねる」

仲間たちは黙ってエミルを見守った。
「……心の精霊に会ってみます」
やがてエミルが出した答えに、
「わかった。じゃあ行こう」
ロイドは満足そうに先に立って歩き出す。

やがて、ひとり残されたユアンが、世界樹を振り返った。
「これでいいのだな。マーテル——」
若樹の柔らかな葉が、微かに揺れた。

エミルたちはレアバードでイセリアまで飛んだ。
以前の旅を思い出して懐かしがる仲間たちを、エミルは頼もしく眺めた。空もまたラタトスクが守るべきこの世界の一部なのだと思う。
マーテル教会へ続く階段の下まで来ると、
「コリン……」

一番うしろを歩いていたしいなが足を止め、呟いた。
「コリンって誰の名前なんですか？」
エミルが振り返った。
「あたしの友達の名前だよ。メルトキオで作られた人工精霊さ」
「とても可愛い肉球の持ち主でした……」
プレセアが言うと、リーガルも、
「……うむ。そうだったな」
と、顎を撫でる。肉球好きはふたりの共通の嗜好なのだ。
「そういえばしいなは召喚を使えるんだもんね。今も一緒にいるの？」
精霊と聞いて、マルタが訊ねた。
「……今はもういない。心の精霊ヴェリウスに生まれ変わったんだ」
（えっ!?　それって……）
エミルは驚く。
「これから会いに行く……精霊……」
そうさ、としいなは教会を見上げる。
「だからちょっと懐かしいね」
「ヴェリウス……。僕と同じ精霊……」

どんな存在なのだろう、とエミルはこれから加護を受けるかもしれないヴェリウスを想った。

階段を昇りきったところで、エミルたちは教会から出てきたダイクと鉢合わせした。まだ修理作業は続いているらしい。
「ロイド！　ロイドじゃねぇか！」
息子の姿を見つけたダイクが大きな声をあげる。
「親父！　ただいま」
「……おう、よく帰ってきたな」
ダイクは言い、それからぐるりと息子の仲間たちの顔を見回す。
「あともう少しだけノイシュを頼むよ」
「わかった。おめぇは何も心配しないで自分のやるべきことをしっかりやれ。それが一人前の男ってもんだ」
「ああ！」
何も聞かない。早く戻れとも言わないで、ダイクはただ息子を信頼している。エミル

はどうしても叔父のアルバと自分の関係を思い出さずにはいられなかった。
「……うらやましいな。ロイドとダイクさんの関係。僕には……作れなかった」
「おまえにその気があるなら、今からだって間に合うさ」
「え？」
顔を上げると、ロイドと視線が合った。
「あきらめなければ、なんでもできる。……本当はそうじゃないことがあるってのもわかってるぜ。でも……だからってあきらめたら駄目なんだ」
「ロイドは強いね」
思わずエミルがそう言うと、
「なんか、よくそう言われるよ」
ロイドは笑い、
「でもさ、俺が本当に強いんだとしたら、それをくれたのは親父やみんなだ。だから俺も自分の強さを誰かにあげたい。もちろん、エミルにもな！」
と、肩を叩いてくれる。
「……みんながロイドをかばった気持ちが……わかった気がする」
エミルはため息混じりにそう漏らす。
「僕はロイドみたいにはなれないかもしれないけど、ロイドと知り合えてよかったよ」

「俺は俺、エミルはエミル。みんな違うから必要なんだろ。だから、エミルを消させないためにもヴェリウスに会おう」
ロイドは家に戻るところだというダイクにちょっと手をあげてみせ、教会へ足を踏み入れた。
教会の内部は相変わらず薄暗く、冷んやりとしている。
「ここにヴェリウスがいるんだね」
前に来たときよりあたりの気配に敏感になっている自分を感じながら、エミルが言った。
「正確には人の心の中にいるんだ。だからどこにいても会えるんだと思う。ただ、多分ここがいちばんコンタクトを取りやすいってことなんじゃないかな」
しいなは応えた。彼女もまた、コリンを感じ取ろうとしているようだった。
「そうなんだ……」
「エミル……」
遠慮がちにマルタが呼びかけた。
「ん？　どうしたの、マルタ」
「……ううん。ごめん。やっぱなんでもない」
変なの、とエミルは思う。元気がない。

祭壇のある聖堂へ上がる階段の途中でも、マルタは遅れた。
「……マルタ、どうしたの？　さっきから変だよ」
わざわざ戻ってきたエミルに顔を覗き込まれて、
「エミル……。これから私、酷いことを言う」
マルタは思い切ったように言った。
「マルタ？」
「私……エミルに残って欲しいって思う。それは嘘じゃない。だけどそうしたらラタトスクは消えちゃうんだよね」
「………………」
「ラタトスクもエミルと同じように私のことを助けてくれた」
「……うん」
エミルは頷いた。実際、ラタトスクがいなかったらマルタはここに来ることもなかったに違いない。
「ロイドはみんな違うから必要だって言ったよね。じゃあ……ラタトスクは？」
マルタはエミルをじっと見つめた。
「私……エミルが大事だよ。だけどラタトスクが消えるのも変だって思うの」
「………………」

「ごめん。私、最低だ。そんなことエミルに伝えても、困らせるだけだってわかってるのに……」
「ううん。僕……僕も同じことを考えてたから」
うなだれるマルタに、エミルは微笑んでみせた。
(そうなんだよ。もうひとりの僕だって、僕なんだから……だから……)
「ふたりとも、はぐれちゃうよ！」
そのとき、コレットが階上からふたりを呼んだ。
「あ、今行く！」
エミルはあわてて返事をしてから、
「マルタ。僕、ちゃんと考えてるから。だから、心配しないで」
と、早口に告げる。
「……う、うん……」
マルタはエミルの本心を探ろうとするかのように、上目遣いで返事をした。

聖堂まで上りつめたエミルたちは、真ん中にしつらえられた丸い祭壇の前に立った。

譜陣が描かれているだけで、そこには何も置かれていない。
「……どうやってヴェリウスを呼ぶんですか」
エミルの問いに、
「ヴェリウスは心の精霊だ。きっと、もうすぐそこに……」
と、しいなが答えたときだった。
「私を呼びましたね、しいな」
祭壇の上に、ヴェリウスの姿が現れた。首に三つの鈴をかけている。大きな狐（きつね）みたいだな、とエミルは思った。美しく輝く黄色の毛皮は、背中から九本の尾にかけて緑色に変化している。それが尾の先にゆくと、穏やかな青色に染まっているのだった。
「コリン！」
しいなは叫んだ。コリンではないのだが、気配には確かに同じものがある。
「あなたが心の精霊ヴェリウス……」
エミルは吸い寄せられるように、祭壇へ一歩進み出た。
「ラタトスク……いえ、エミル。あなたの心は今、とても悲しい色をしています。あなたは……迷っていますね」
ヴェリウスは性別を超越した声で問いかけてくる。
「それは……」

見透かされて、エミルは口ごもった。
「私との契約は心でするもの。エミル、あなたの心が決意を固めたとき、私もそれを助けます。ですからよく考えなさい。あなたがどう生きるのかを」
「ヴェリウス、それはどういうことなんだ」
ロイドが聞く。
「私はエミルの心が望む通りに、彼の心を守ります。ただエミルはまだ自分をどうしたいのか迷っている。時間が必要です」
ヴェリウスの言葉に、
「……そうだよね。急に自分の心をどうしたいのか決めろなんて難しいよね」
コレットが胸に手を当て、エミルを気遣う。ヴェリウスは深い瞳でエミルに視線を移した。畏怖（いふ）の念を抱きつつも、彼は精霊が微笑んですらいるのを感じる。
「あなたが望めば、いつでも現れ力を貸しましょう。迷いを断ち切ったとき、また会いましょう」
そう言って、ヴェリウスは消えてしまった。
しばらくの間、聖堂に沈黙が流れる。やがて、エミルは仲間たちに向き直った。
「ごめんなさい。ここまで連れてきてもらったのに……」
「そんなこと気にするなよ」

ロイドがすぐに首を振る。
「エミルの心の問題は、エミルがつけるしかないんだ。待つよ」
「ありがとう」
迷いを断ち切らなければ、とエミルは自分に言い聞かせた。

彼は待っていた。
(開く。もう少しだ……)
エイトセンチュリオンのコアを模したこの扉が開けば、絶大な力が得られるだろう。
(待っていろ、ラタトスクめ――!)
ほどなく、彼の目の前に光が差し始めた。
彼――リヒターの唇に、ゆっくりと笑みが広がる――。

「きゃっ!」

ただろう。出口に戻りかけたエミルたちを、激しい揺れが襲っていた。

「地震⁉」

ジーニアスは壁に手をついて体を支えている。みんな、立っているのがやっとだった。

しばらくすると、ようやく足元が安定した。

「収まったみたいだな」

ため息をつくゼロスに、

「でも……嫌な気持ちです。重苦しい何かが流れてくる……」

と、プレセアが苦しそうな表情を見せる。マルタは、聖堂の床にうずくまってしまっているエミルに気づいた。

「エミル……？　どうかしたの」

「う……うぅ……」

彼はただ苦しげに呻くだけだ。テネブラエがハッと顔を上げる。

「この感覚……！　ギンヌンガ・ガップの扉が開こうとしています！」

「そんな！　ラタトスクが生きている限り扉は開かないんじゃ……」

コレットはテネブラエとエミルを見比べて言う。

「ま、まさかリヒターの奴、そのためにヴァンガードを……！」

テネブラエの緊迫した声を掻き消すように、突然エミルが体を起こすと、叫んだ。
「やめろぉ――っ!! 俺の許可なく、扉に触れるなぁっ!!」
上半身は反り返り、体から発せられる光は目を開けていられないほどの激しさで聖堂を駆けめぐる。
「エミル!?」
マルタが呼んだが、彼は答えない。天を仰ぐ赤い瞳は、焦点が定まっていないように見える。
「魔族の侵入をくい止めていらっしゃるのでしょう! せめて、センチュリオンを全員従えてお力を取り戻されていれば、こんなことには……」
テネブラエは労しげに言うと、数歩後ずさる。
「エミル、俺たちにできることはあるか?」
ロイドが声を張った。あれだけまぶしかった光が、エミルの体に収束されてゆく。
「――あるさ。それはな……」
言いざまエミルは剣を抜き、ロイドに躍りかかった。
「な、何をする!」
あわてて跳び退るロイドの服から、コアがひとつ転げ落ちた。エミルはそれを素早く拾い上げると高く掲げ、叫んだ。

「ルーメン！　俺に従えっ！」
ルーメンのコアから溢れた光で、あたりは再び何も見えなくなった。

壁際に追いつめられた少女が、ラタトスク・コアを両手に持って助けを呼んでいる。
「……助けて。助けて、ラタトスク!!」
白い髪飾りが震える。と、彼女は意識を失い、その場に倒れた。
兵士たちの足音が近づく。彼らはあっという間に少女を取り囲んでしまった。
「よし。マルタさまを捕まえろ」
「いや、奪うものさえ奪えば後はどうしようとかまわないんじゃないか」
そのとき、背後から声がした。
「——何をしている」
彼は両刀を構え、兵士たちににじり寄る。
「おまえたち！　パルマコスタに何をした!?」

兵士たちの顔色が変わった。
「ロイド・アーヴィング！」
青年は彼らをたちまち斬り捨てる。
「う……うわぁ!?」
最後のひとりが逃げ出した。
「待て！」
青年が追いかけてゆく——。
火の手があがっている。このあたりは特に物騒だ。このままでは——。
どうすればいい？
そうだ、ヒトの世界ではヒトの姿に——。
倒れている少女の前に、ヒトが姿を現した。これは確か、アステルと呼ばれていた若い男——。
「……ここは……どこだ？　僕は……誰だ……？」
つぶやくと、倒れていた少女が目を覚ます。
「……ん……」
「大丈夫か？」
赤い宝石の埋まった額を押さえ、彼女はまぶしそうにこちらを見た。

「エミル！　しっかりして！　お願い！　戻ってきて」
耳元で何度もそう繰り返され、エミルはマルタの腕の中でぽっかりと目を開けた。あのままここで倒れてしまったらしい。
ひとりで体を起こすと、エミルはマルタを見ずに告げた。
「……マルタ……。僕は……やっぱり……ラタトスクだったんだ……」
「……エミル」
近くに立っていたロイドが声をあげる。エミルは座ったままゆっくりと緑の瞳で彼を見上げた。
「ロイド……ごめん。僕……ルーメンのコアを奪って信頼を裏切ってしまった……」
「……いや。おまえはこうして戻ってきた。裏切られてなんていないよ」
ロイドが言う。
ひとまず外に出ようというリフィルの提案で、彼らは聖堂を後にした。

教会の外に出ると、新鮮な風がエミルの頬を撫でてゆく。ほんの少し気分がよくなった気がした。が、そのとき、
「教会には近寄らせねえぞ！」
風に乗って誰かの声が聞こえてきた。
「親父の声だ！」
ロイドがハッとする。エミルがマルタと顔を見合わせたときには、すでに彼はもう階段を降りきるところだった。

ロイドを追って行くと、魔物を相手に草地で木槌を振るっているダイクが見えた。
「親父！」
ロイドが走り寄りながら叫ぶ。ここで魔物を食い止めなければ、教会はめちゃくちゃにされてしまうだろう。
「助けよう、エミル！」
「……う……うん……」
エミルは、マルタと一緒にロイドを追う。駆けつけた仲間たちもすぐに数体の魔物の

もとに散った。

「親父、怪我はないか」

ロイドがダイクに訊ねる。

魔物を片付けたエミルたちは、念のため教会まで戻ってみたところだった。幸い、魔物には侵入されていないようだ。

「おう。ドワーフには力だけはあるからな」

ダイクが太い腕に力瘤(ちからこぶ)を作ってみせる。

「何が起きたの、おじさん」

ジーニアスに訊かれ、

「さっき地震があっただろう。あの後、突然魔物が村の中に入ってきたんだ」

と、ダイクは答えた。

「……先程ギンヌンガ・ガップの扉が開いたために魔界の悪しき波動が流れ込んでいるのでしょう」

テネブラエが深刻な表情になる。

「でも、どうして扉が開いてしまったのですか。ラタトスクが生きている間は開かないはずでは……」
プレセアが、さきほどコレットが口にした疑問をもう一度テネブラエに向けた。
「ですがラタトスクさまは、一部のセンチュリオンを失っているため、力も半減しています。そこにヴァンガードが魔族の好む波動をまき散らした」
「各地の暴動……ね」
リフィルはジーニアスと共に目のあたりにしてきた惨状を思い出す。
そうです、とテネブラエは頷いた。
「血の臭いが、扉を緩めてしまった。リヒターはこれを狙っていたのでしょう。今はラタトスクさまが何とか押さえていらっしゃいます。しかしこのままでは魔物が我らセンチュリオンとの縁を断ち切って、世界がニブルヘイムになってしまう……」
「……そうだ。後はこの俺が力を取り戻して扉を封じるしか道はない」
エミルはその場にいる者たち全員に言い聞かせるように言った。
「エミル……ううん、ラタトスク」
マルタは赤い瞳のエミルを本来の名で呼ぶと、
「だからロイドからルーメンのコアを奪ったの？」
と、訊ねる。その瞬間、彼はカッとなった。

「俺のものを俺の手に取り戻して何が悪い。邪魔するってんならおまえら全員たたきつぶして……」

「やめろぉっ！」

エミルの体の中から、本来のエミルが出てきたのが仲間たちにもわかった。エミルの体は、そのまま目を閉じてしまった。

どことも知れぬ空間で、ふたりのエミルは向かい合って立っていた。

「俺の邪魔をするってのか」

ラタトスクのエミルが、今にも飛びかかりそうにエミルに文句をつけた。

「みんなを……やっとできた僕の友達を傷つけるのは許さない」

エミルも負けていない。

「うるせぇっ！」

「じゃあ、リヒターの奴が開いた扉はどうするんだ！　俺が力を取り戻さないとどうにもならないんだぜ」

勝ち誇ったように、ラタトスクのエミルは唇を歪(ゆが)めて笑う。

「もうひとつ方法がある」
エミルは澄んだ瞳をもうひとりの自分に向ける。
「……てめぇっ！　まさか……」
赤い瞳に動揺が走る。
「僕はきみだ。僕らは、僕らのしたことに責任を取らないと」
「その意味がわかってるのか!?」
ラタトスクのエミルは喚いたが、エミルはおかまいなしに左腕を天に向けて挙げる。
その先にあるものをエミルは知っていた。
「——ヴェリウス！　力を貸して！　僕の考えていること、あなたならわかるよね」
すると、彼方から聞き覚えのある声が降りてきた。
——……ええ。わかりました。
同時に、ラタトスクのエミルは光に包まれ、消滅した。

「エミル!?　大丈夫？　エミル！」
マルタが呼んでいる。エミルは目を開けた。

「……ごめん。もう大丈夫だよ」
教会の前で自分を心配そうに見つめている仲間たちに、彼はそう告げた。
「エミル、何があったんだい。コリンの……ヴェリウスの気配がしたよ」
しいなが身を乗り出してくる。心の精霊の名を聞いて、ロイドが驚いた。
「まさか……心を決めたのか？」
「……うん。ラタトスクの人格を封じてもらった。後は他のセンチュリオンを取り戻して、開きかけているギンヌンガ・ガップを閉じるだけだ」
エミルは言い、仲間たちをひとりひとり見る。
「マルタ、ロイド、みんな。僕に……力を貸して」
真っ先に進み出たのはリーガルだった。
「おまえは精霊ラタトスクとして生きていく決意をしたのだな。ならば私は友として協力しよう」
「私もエミルが扉を守れるように力を貸すよ」
「僕だって。僕とエミルは友達だもん」
コレットとジーニアスは笑顔を見せる。
「今感じている圧迫。これが魔界の干渉なら、私も取り除くお手伝いをさせて下さい」
「コリンがあんたに力を貸してるんだ。貸さない訳がないだろ」

プレセアもしいなも、そして全員がエミルに協力すると約束してくれた。
「テネブラエも、いいね」
ひとり黙っているテネブラエに、エミルは念押しをする。闇のセンチュリオンはなにか言いだけだったが、
「……は、はい……」
と、返事をした。
「……エミル。俺の持っているセンチュリオン・コアを渡しておく」
「ありがとう、ロイド」
エミルは、ロイドの手からトニトルスのコアを受け取った。

エミルたちはそれぞれに準備を整えるため、いったん解散することになった。集合場所はアルタミラだ。
それぞれに散ってゆく仲間たちの背中を見送りながら、
「エミルはどうするの？」
マルタが訊ねる。

「う……うん……。多分一度ルインに戻るよ」
（たぶんこれが……僕がエミル・キャスタニエとして生きる最後の時間なんだ……）
エミルとして、やり残したことを片付ける必要がある、と彼は強く感じていた。
「私、アルタミラでパパの様子を見たら、残りの時間はエミルと一緒に過ごしたいな」
マルタはもじもじしながら、最後は一気に気持ちを伝える。
「え……！　う、うん……いいけど……」
「ホント!?　それじゃ、アルタミラで待ち合わせね！」
マルタはうれしそうに何度も振り返っては手を振りながら、走って行った。

橋を渡って、街に入る。二度と戻りたくないと思っていたルインだ。午後の日差しが傾き始めている。
「……ルイン……か。いろんなことがあったね」
エミルがしみじみと、隣を歩いているテネブラエに言った。
「……はい」
そのとき、向こうからひとりの女性が歩いてきた。エミルを見て声をあげる。

「……エミル！」

「フロルおばさん……」

ドキドキしてしまう。覚悟してきたのに、心の準備がまだできていない。

「……あの……」

それでもエミルは勇気を出して叔母をまっすぐに見た。

「今まで……ありがとうございました。――おじさんは？」

「多分……そろそろ家に戻ってると……」

フロルはもっと何か言いたそうだったが、口をつぐんでしまった。

「行ってみます。ありがとう」

エミルは頭を下げると、足早に叔父の家へと歩き出す。

幸い、アルバは帰宅していた。

「お……おまえ……」

エミルの姿を見るなり、アルバは顔を強張らせた。

「……挨拶(あいさつ)に来ました」

「………」

叔父は黙っている。

「今までありがとうございました」

エミルは感謝をこめて礼を言った。短い間だったが、眠る部屋と温かい食事を与えてくれた。世話になったのは事実だ。

「……ふん。心にもないことを」

アルバはエミルを睨みつける。今までだったら、ここで折檻（せっかん）がはじまるところだ。だが、エミルはもう俯きはしない。

「どうしてそう決めつけるんですか？　確かに僕は……あなたが嫌いでした。でも感謝してない訳じゃない」

アルバの目に驚きの色が浮かんだ。

「できれば、ちゃんと叔父と甥（おい）の……いえ、父親と息子としての関係を作り直したかったけど、もうそんな時間も僕には残されていないんです――だからせめて最後の挨拶に来ました」

そのとき、扉を開けてフロルが入ってきた。少し前から聞いていたのかもしれない。

「エミル……あの……あのね……」

言葉を探している妻を遮（さえぎ）るように、

「……時間がないことはないだろう」

と、アルバが言った。

「……え？」

「おまえがアルタミラでの暴動を止めたっていう噂が流れてきた。何だか知らないが、大変なことに巻き込まれてるみたいじゃないか」

アルバはエミルの顔を覗き込み、

「最後の挨拶ってのも、その大変な事件か何かに関わってるからなんだろ？」

と訊いた。心配していたんだ、とその顔は雄弁に語っている。

「……は、はい……」

（僕のことなんか、興味ないと思ってたのに……！）

「……だったら、そいつを全部終わらしてからここに戻ってくればいい。俺にも……俺とフロルにも、やり直す機会をくれ」

（おじさん！）

エミルの瞳が潤みかけているのに気づいて、アルバはあわてて後ろを向く。そして、

「……うまくいかないかもしれないがな」

わざとどうでもよさそうに言った。

フロルの方は、涙を拭いながら、

「私……おまえが帰ってくるのを待ってるわ。気をつけて……」

やっとそれだけ伝える。

（充分だ……もう、これで）

「……ありがとう、おじさん、おばさん」
これ以上長居すると、ふたりをよけい心配させてしまう。エミルは懐かしい家を飛び出した。

広場まで走り、ごしごしと目をこする。
気づくとテネブラエがエミルを見上げていた。
「やっぱり勇気は夢を叶える魔法なんだね」
エミルは泣き笑いの表情になる。
「エミルさま……」
「怖かったし、話しかけるのも嫌だなって思ってたけど、ちゃんと歩み寄れば相手も応えてくれる……」
「……はい」
「……よし。最後の思い出に、噴水の『ロイドさま』に挨拶していこうっと」
エミルは顔を上げると、ロイドの像の前まで行く。
「あはは。こうして見ると、本物より少し幼いね。昔のロイドなんだろうな」

（ここで双子にからまれた……。魔物が増えたのは僕のせいだって。ロイドに挨拶してないって）

エミルは今こそ深々とロイド像に向かって頭を下げる。

「エミルさま……」

「何、テネブラエ」

エミルは笑顔を見せた。

「間違っていたらすみません。あなたは、ラタトスクとして扉を守る決意をした訳ではない——アステルを殺した罪を悔いて何らかの方法でコアに戻り扉の鍵として封じられようとしている。違いますか？」

「……どうしてそう思うの？」

エミルは静かにテネブラエに視線を向ける。

「あなたはもうひとりのあなたを自分の心に封じることをよしとする人ではありません。もうひとりの自分を封じた以上、同じ存在である自分も封じられようと考えたはずだ」

「……自分からコアになるためには、この前のテネブラエみたいに強いダメージを受ければいいんだよね」

確認するように、エミルが言う。

「あなたは力を取り戻して強くなった。瀕死に陥るには、それなりの使い手に本気で戦

きゃいけなくなるよね」

「！」

テネブラエがハッとする。

「……それを演じるおつもりですか」

「テネブラエ。お願い。どんなときもきみはラタトスクの味方だった。――最後まで、ラタトスクの味方でいて」

じっと見つめられて、テネブラエは辛そうに顔を背けた。

「……あなたはいつも私にむごいことを強要しますね」

「ごめん……」

テネブラエが吐息（といき）を漏らした。

「私はあなたのセンチュリオンです。あなたがそう決めたのなら私はどこまでもあなたに従います」

ありがとう、とエミルは心から感謝の言葉を口にした。

夜の海は静かに凪いでいた。
またたく星と波の煌めきの区別がつかないほど、空と海は寄り添っている。
海上にかかる橋は緩やかなカーブを描き、街灯の光を柔らかく受け止めていた。マルタはひとり手すりに凭れ、月に照らされた雲が動いてゆくのをほぼんやり眺めている。
と、足音が近づいた。
「ごめん、待った？」
マルタはゆっくりと振り返る。
「ううん。来てくれて、ありがとう」
「お父さんの具合、どうだった？」
エミルはマルタと適当な距離を置いて並ぶ。
「……うん。もうずいぶん落ち着いてた。近いうちにメルトキオの地下牢に連れて行かれるんだって」
「……そう……か……」
「私も、この戦いが終ったら、ヴァンガードの関係者として、ちゃんと処罰を受けなきゃ」
「マルタも？」

エミルは驚いてマルタを見た。
「そりゃそうだよ。パパの代わりにヴァンガードの解体をやって、それからちゃんと罰を受けて……」
マルタはそこで言葉を切り、
「その後は……」
と、呟いた。
「その後は？」
エミルを心配させてはいけない、とマルタは思う。他のことを考える暇がないくらい忙しいのだと伝えたい。
「ヴァンガードとは違うやり方でシルヴァラントとテセアラの対立をなくす努力をする。コレットたちも手伝ってくれるって」
マルタは眼下の海を覗き込んだ。
「うん。きっとうまく行くよ。僕……僕もホントは何か手伝いたいんだけど……」
言葉を濁すエミルに、マルタは前を向いたまま訊ねた。
「……扉の守護者って、やっぱり普段はギンヌンガ・ガップで扉を守らなきゃいけないんだよね」
「多分……」

エミルも海を見つめたままだ。
「……旅が終わったら、もう会えないのかな」
「……うん」
「……もう！」
マルタはたまらなくなってエミルに体ごと向き直る。
「どうしてそんなに冷静な顔でそんなこと言うの！　こんなに長い間一緒にいたのに、結局私のこと……」
「マルタ！　あの……そういうつもりじゃ」
言い訳をしようとあわてるエミルの胸に、マルタが飛び込んできた。
「エミル……！　離れたくないよ！」
もう二度と会えないかもしれないエミルにしがみつき、泣きじゃくる。
旅の終わりは、明日なのだ。
「マ……マルタ……」
マルタはエミルにほっそりした手首を握られたまま、
「エミルが精霊だろうとなんだろうと、私……いつも一生懸命なキミが大好きだよ」
と、残り少ない時間に刻みつけるように伝えた。
「……ぼ……僕も……。僕も……マルタが……」

マルタがゆっくりと顔をあげる。
「いつも僕のこと支えてくれるマルタが好……」
き、と言わないうちに、エミルの唇は塞がれた。温かくて、少ししょっぱい。
やがてエミルから離れたマルタの瞳に、寄り添う月が映った。

「……ラタトスクの力を取り戻したら、私と契約してよ」
歌うようにマルタが言う。海の色が変わってきたように見える。
「え？」
「そしたらいつでも会いたいとき会えるのに……」
「……マルタ……」
「……でも、私には召喚の力なんてないもんね」
言ってみただけ、というように、マルタは肩をすくめる。
「──契約するよ」
「え？」
マルタは驚いてエミルの顔を見た。
「もうマルタと会えないかもしれないけど、僕は精霊だからこの世界にずっと存在する



——。存在し続ける限りずっとマルタのことを想い続けるよ」

(エミル……！)

「……いつかマルタが大人になって、他に好きな人ができても」

「……バカ！」

マルタは思わず強く言ってしまってから、

「そんな人……できないんだから……」

と、口の中で呟いた。

夜明けの時刻が近づいている。

17

異界の扉は、夜でもないのに薄暗い場所だった。

見渡す限りの平原に、巨石がいくつも転がっている。ひときわ大きな三つがその中心に立っていた。

エミルは、アルタミラを出発したときは朝だったのに、と思う。

マルタとテネブラエと一緒にホテルレザレノを出ると、そこにはすでに支度を終えた仲間たちが彼らを待っていてくれた。

リーガル、リフィル、ジーニアス。しいなとプレセア。ゼロス、コレット、そしてロイド——。

彼らの生きるこの世界を何が何でも守らなくては、とエミルは決意を新たにレアバードに乗り込んだのだった。

「異界の扉……。私たち姉弟は、この場所に縁があるみたいね」

巨石を眺め、リフィルがしみじみと言う。
「でもまさかここが魔界に繋がっていたなんて。世界再生前は、ふたつに分けられた世界を行き来できる場所だったのに」
ジーニアスも、俄かには信じられないといった口調だ。かつてこの姉弟がここに捨てられたことを知っている世界再生の旅の仲間たちは、黙ってふたりの言葉を聞いていた。
テネブラエが言う。
「大樹カーラーンは、今、世界樹がある場所に幹を伸ばし、この先にあるギンヌンガ・ガップへ根を張っていました。樹は三界を繋ぐ橋です。だからこそふたつの世界を行き来する扉になり得たのでしょう」
「……僕は、ラタトスクの人格を封じて自分がラタトスクになった。扉は僕が必ず閉じる」
エミルが決意を述べると、「わかりました」とテネブラエが頷いた。
「扉はあなたの意志に反応します。エミルさま、あなたの意志をソーサラーリングにこめて大地を撃つのです」
「うん」
エミルは三つの巨石の前まで進み出ると意識を集中し、大地――石が描く三角形の中心――めがけてリングを撃った。たちまち、地面に輝く譜陣が出現する。

「ここからギンヌンガ・ガップへ行けます」
「わかった」
エミルはテネブラエに返事をすると、仲間たちについてくるようにと合図をする。彼らは譜陣の中央から噴き上がっている光の中に進んだ。

「ここがギンヌンガ・ガップへの道か……」
ロイドがあたりを見回しながら言う。彼らの周りには先ほどと同じ巨石が三つ立っていたが、全体が青白く発光している。譜陣の外には無数の樹の根が垂れ下がり、下を覗き込んだゼロスは、底知れぬ深さにぶるっと身を震わせた。
「リヒターたちもここにいるんだよね」
マルタがテネブラエに訊いた。
「ええ。かなりの人間の気配がします。それと魔族の気配も。危険です。エミルさま、くれぐれも気をつけて」
「わかってる。行こう」
エミルは頷くと再び譜陣の中央に立った。

下降を強いられる感覚があった。下の階層に出たらしい。周りには靄のようなものが蠢き、樹の根が霞んで見える。
「……ここは今までとちょっと違う雰囲気だね」
マルタが言ったときだった。
「きゃあっ!?」
突然、コレットが悲鳴をあげたかと思うと、掻き消すように見えなくなった。続いてジーニアスとリフィルが、しいなが、悲鳴をあげながら消えてゆく。
「!?」
エミルは何が起きたのかわからず、ただその場に立ち尽くす。
ゼロス、リーガル、プレセアが消え、最後に残ったロイドも、
「デリスエンブレムが……！」
と言いかけ、消えてしまった。
「ロイド！　みんな!?」
「ど、どうなっちゃったの？」
エミルとマルタは、自分たちも消えるのではと思ったが、何も起きない。
「まさか、ロイドさんたちはデリスエンブレムを持っていたのでは……」

テネブラエがエミルを見上げた。
「デリスエンブレムって、何？　それを持っているとどうなるの？」
「デリスエンブレムはデリス・カーラーンと呼ばれる世界で作られたものです。周囲のマナを使って、持ち主を守ります」
そんな、とマルタが声をあげる。
「ロイドたちが持ってたなら、全然守られてないじゃない！」
「それは、ラタトスクさまがデリスエンブレムの持ち主を避けていたからです」
「僕が……？」
どういうことだろう、とエミルは思う。
「はい。デリスエンブレムはラタトスクさまが、あるハーフエルフの少年とその仲間に与えたものです。しかしラタトスクさまは彼らに裏切られてしまった……」
「それで、デリスエンブレムの持ち主がここに近づけないような罠を作ったってこと？」
やっと少しだけ事情が飲み込めたマルタは、テネブラエにそう確認した。
「そうです。皆さんはこのギンヌンガ・ガップのどこかに囚われています。助けられるのはラタトスクさま——エミルさまだけです」
「わかった。急いでロイドたちを捜そう！」
「うん。みんなに助けてもらった分、今度は私たちでみんなを助けなきゃね」

エミルとマルタは、靄の中に続く道を並んで辿り始めた。

こんな道がどこまで続くのだろう。あたりの風景は次第に殺伐とし始め、骨らしきものが足元に転がっている。ここで命を落とした魔物のものだろうか。

突然、マルタが小さく声をあげた。

「どうしたの――!?」

エミルも前方に立つふたつの人影を認めて、息を飲む。

「ようこそ、魔物の墓場へ」

ペチペチと鞭を鳴らしているのは、アリスだった。隣には、デクス。

「とうとう来ちゃったんだな、少年」

彼はアイアンメイデンに手をかけ、斜に構えたポーズを決めている。

「デクス……」

エミルは唇を噛みしめる。マルタはふたりの方へ身を乗り出すようにすると、

「デクスもアリスもセンチュリオン・コアの暴走で我を失ってただけなんでしょう?こんなこともうやめようよ」

と説得した。

「誰が操られてたって？」
アリスがおかしそうに微笑む。
「そりゃ、総帥（そうすい）や３Ｋデクスはそうかもしれないけど、アリスちゃんは正気よ♡」
「え……」
「正気で戦ってたの。だってアリスちゃん、マルタちゃんが大嫌いなんだもん♡」
「ど……どうして……」
好（す）かれていると思っていたわけではないが、正気で大嫌いと言われると、やはりつらい。
「自分にはなんの力もないくせにわざわざしゃしゃり出てきて、やめてパパ～、助けてラタトスク～って」
アリスは身振り手振りでマルタを大げさに表現すると、
「すっごく目障（めざわ）りなんだもん。解決能力ないくせに」
と、結んだ。
「確かにそうだった。でも……」
マルタにはそれ以上返す言葉がない。
「私、あんたみたいな偽善者、大嫌い。いつか思い知らせてやろうと思ってた。リヒターのそばにいればあんたが来るってわかってたから」

勝ち誇ったようにアリスは笑った。

エミルは先ほどからデクスを睨みつけたままだ。ソルムのコアの影響が消えてデクスが正気に戻った今、聞いておきたいことがある。

「デクス。パルマコスタの血の粛清——あれはおまえがやったんだな」

「ああ」

あっけないほど簡単に、デクスは頷いた。

「どうしてっ！　いくらシルヴァラントの人たちを救いたかったからって、そんなやり方……」

「俺はな。アリスちゃんのためなら悪魔にだって魂を売るって決めてるんだ。アリスちゃんのために俺は戦う」

ひと筋の迷いもなく、デクスが言い切る。アリスは彼の横に並んだ。

「私は、この世界で生きるための揺るぎない力を手に入れる。リヒターが魔族を呼ぶならそれすら利用する。私は私のために世界を従えるの。リヒターとの取り引きのために——」

アリスは鞭を構えて、言った。

「死んで♡」

デクスも大剣を振り回し始める。

「アリス！」
スピナーを手にしたマルタが床を蹴った。
「自分が力を手に入れるために世界を魔界にするなんて、おかしいと思わないの⁉」
「くっ！」
よけきれず、腕に傷を負ったアリスは「別に」と強がってみせた。
「私は自分の力で生き抜いてみせる！——冬の日の幻想♡」
「きゃあっ！」
鞭を連続で振るわれ、マルタは吹き飛ぶ。
デクスと激しくぶつかりあっていたエミルが走ってきて、マルタをかばう。
「——負けられない！」
魔王獄炎波の刃が、アリスを幾度も斬りつけた。
「きゃあっ、うそっ！」
「アリスちゃんっ⁉」
デクスが顔色を変え、
「ぶっ飛びな！　D・トロンベ！」
エミルに回転蹴りを食らわせた。その隙に体勢を立て直したアリスが、
「太古より引き継がれし盟約に従い、その義務を果たせ——フィンブルヴェト！」

よろけるエミルの足元に鋭い氷柱を出現させる。それでもかろうじてエミルがアリスにひと太刀浴びせると、アリスはふたたび悲鳴を上げ、倒れた。

「ああっ⁉　アリスちゃんを傷つけるヤツは許さないっ！」

恐ろしい形相になったデクスは胸のポケットからアリスの写真を取り出した。ひと目見たとたんにデレデレになる。

「んふ、ふふふふっ……シュトルム・ウント・ドランク！」

「エミルに何するの！」

マルタは、大剣が氷柱に捕まっているエミルに向けられたのを見るや、デクスの脇腹にスピナーを浴びせた。

「ぬぅっ⁉」

攻撃の矛先がマルタに変わる。

「きゃっ！」

デクスが大剣を振るうたび、ピンク色のL・O・V・Eの文字が躍り出た。

氷柱を突破したエミルがデクスに突進する。

「アリスちゃあああ――――――んっ！」

天を仰いで絶叫するデクスの頭上から、エミルは一気に剣を振り下ろした。

「……？」

デクスはマルタの近くまでふらふらと歩くと、そのまま崩れ落ちた。
「……マルタちゃん」
倒れ伏していたアリスは、マルタの名を呼びながらようやく上体を起こした。深い傷を負い、ひどく苦しそうだ。
「アリス……」
マルタの瞳に動揺が走る。
「マルタちゃん、私……私ね……」
アリスは一歩、また一歩と懸命に歩み始めた。
「アリス！」
思わずマルタは駆け寄り、アリスの体を支えようとする。
その瞬間、アリスの左手がマルタの頬を打った。
「っ!?」
「あんたが大嫌い！」
そのままマルタに馬乗りになり、鞭を振り上げる。
「や、やめろっ！」

エミルはとっさにアリスを突き飛ばしたものの、めちゃくちゃに鞭を振るわれ、再び剣を抜く。アリスを遠ざけるために真一文字に振り払う。

「ぐうっ……」

「！」

思わぬ手ごたえに、エミルは絶句した。デクスがこちらに背を向けている。アリスをかばって飛び出したのだった。

「デクス……！」

エミルはデクスの背中の深い傷に目を奪われていた。

「今日で……七六五日目……。今回も……偽物を掴まされた……かな」

彼はもはや立っていられず、アリスの両肩を掴んでふらふらしている。が、渾身の力を振り絞ると、

「アリスちゃん……キモイって言われると思うけど……」

と、アリスの顔を覗き込んだ。

「好きだったよ……」

それだけ呟くと、彼はドウッと仰向けに倒れた。

「デクス！」

アリスの悲鳴が魔物の墓場に響く。彼女の膝がガクンと落ちた。

「――……私も……好きだったのに。ホントに……好き……だったのにっ！」

デクスの足元ににじり寄り、アリスは大粒の涙をぼろぼろとこぼした。そして同じように地面に膝をついているエミルを、キッと睨みつける。

「あんたなんか！　あんたなんかぁっ!!」

エミルに飛びかかり、鞭を振るう。

「くっ……！」

歯を食いしばるエミルに、何度も何度も打ちつける。

テネブラエが跳躍した。体当たりされたアリスは鞭を落とし、地面を転がる。が、目の前にデクスの大剣を認めると、それを両手で拾い上げ、エミルに向かって振り上げる。

「死んじゃえっ!!」

が、そのとき、肉を斬る鈍い音がした。アリスの両眼が驚きに見開かれる。

「……な……マルタ……ちゃん……」

スピナーが回り続ける音を聞いたアリスの手から、デクスの大剣が落ちる。

マルタは、アリスに背を向けて立つと、

「……いいよ。思い切り恨んでくれて。だけど、エミルを傷つけるのは許さない」

と目を閉じたまま告げた。

「……マルタちゃんが本気で来るとは思わなかった。不覚だわ……」
アリスは再びうつ伏せに倒れ、必死でデクスの元へ這い寄ろうとする。
「デクス……。今……アリスちゃんも……」
か細い指が、デクスの手に重なる。
「追いかける……から……」
アリスは、そのまま動かなくなった。
ふたりの死を目の当たりにして、マルタは声を震わせる。
「私が、パパをちゃんと止めてれば……ヴァンガードなんてできなかったし、アリスたちも……」
「僕にはアリスの生き方は理解できないけど、でも彼女はヴァンガードに運命を狂わされたんじゃないよ」
エミルは言った。
「自分の望むままに生きたんだと思う。助けたかったたって思うのは……多分、僕らのエゴだ」
「それでもこんな結果はやだよ」
マルタが俯いて涙ぐむ。
「……そうだね。デクスもアリスも助けたかった。リヒターさんも……助けたい」

「エミル……」
マルタは、ふっと顔をあげた。
「原因を作ったのも僕だから……これはやっぱりエゴだけど。でもリヒターさんは弱虫のエミルに初めて勇気をくれた人だから」
「……私もリヒターには生きていて欲しい。言っとくけど、エミルみたいな優しい気持ちじゃないよ」
マルタはそう前置きしてから、
「ヴァンガードの幹部としてパパと一緒に責任を取ってもらうために」
と言った。
「うん。わかってるよ」
エミルの瞳はもう先を見ている。
「さあ、行こう、マルタ。僕らの旅を終わらせよう」
「うん」

仲間たちが消えてしまったところまで戻ったふたりは、そこからさらに下へと降りた。

目の前が急に暗くなる。通路を走る赤い光がなかったら、どこを歩いていいのかわからないほどだ。

少し目が慣れてきたとき、向こうから走ってくる人影が見えた。

「ふたりとも！」

なんとそれは、エミルとマルタが捜していたロイドだった。

「ロイド！」

「無事だったんだね！」

ふたりはほっとして笑顔になったが、ロイドは、

「いや、それが助かったのはオレだけなんだ」

と言う。するとテネブラエが、口をはさんだ。

「もしや、皆さん、石化されているのでは……」

「どうしてそれを⁉」

ロイドが驚く。エミルは「すみません」と頭を下げた。

「どうやら僕が——ラタトスクが、デリスエンブレムの持ち主に罠を仕掛けていたみたいです」

「……そうか。だからあの時光ったのか……」

体が消えるとき、ロイドが持っていたデリスエンブレムは光を放ったという。

「でもどうしてロイドさんは無事なのでしょうか」
不思議そうにテネブラエが首をひねる。
「……マーテルの加護が関係してるのかな」
ロイドにもよくわからないようだった。
「そんなことより、みんなを助けてあげようよ。エミルなら、助けられるんでしょ」
マルタが焦れたようにエミルの顔を覗き込む。
「う、うん」
「ほらっ、早く早く！」
マルタは、ロイドから場所を聞き出すと、走り出した。あとに続こうとするエミルを、ロイドが引き止める。
「ひとつ聞きたい」
エミルは、「はい」と振り返った。
「おまえは自分がラタトスクだってことを受け入れて、ラタトスクとして扉を守っていく決心をしたんだよな」
「……は、はい……」
エミルは、そのことかとぎこちなく頷く。
「アステルのことに責任を感じて、自分がリヒターに殺されることでコア化して扉の鍵

になるつもりじゃないよな」
「……」
「エミル！　もしそのつもりなら……」
エミルは、つっと顔を上げると、
「——僕は！　僕はリヒターさんに殺されるつもりはありません」
とロイドを見た。
「みんな！　いつまでそんなところでぼーっとしてんの！」
そのとき、一向にやって来ないエミルたちをマルタが呼んだ。
「ご、ごめんっ！　今いくよ！」
あわてて駆け出すエミルの背中に、
「……エミル。信じてるからな」
ロイドが念を押す。
テネブラエは黙ってその様子を見つめていた。

「ここだ」
ロイドが石化した仲間たちを示す。その変わり果てた姿に、

「ひどい……！　エミル、何とかしてあげて！」
マルタは思わず声をあげ、エミルを急かした。
「う、うん！　えっと、テネブラエ？」
「あなたが触れることで石化の呪いはとける筈です」
「わかった。やってみる」
エミルが一人ひとり触れていくだけで、仲間たちは元の姿に戻ってゆく。
アリスとデクスのことを思い、全員が無事だったことにエミルは心の底からほっとしていた。

果てしなく続くこの通路の先に、魔界の扉がある、とエミルは思う。
(今ごろリヒターさんは……)
リヒターのことを考えた、ちょうどそのときだった。
エミルたちの前に、スーッとセンチュリオン・アクアが姿を現した。
「アクア……」
テネブラエが足をとめる。

「今、リヒターさまは魔族と契約を交わしてる。邪魔はさせないんだから」
エミルたちを睨みつけ、アクアは言い放つ。
「アクア、自分が何をしているのか分かっているのですか？」
「ええ、もちろん」
アクアはテネブラエに答えた。
「アタシは今、ラタトスクさまをブチのめしてさしあげようとしてんのよ」
「……何故そうまでしてリヒターに肩入れするのです！」
テネブラエが語気を荒らげる。
「リヒターさまに仇（かたき）を討たせてあげるためよ」
その声が微かに震えているのに気づいたエミルたちは、宙に浮かんでいるアクアをじっと見上げた。
「リヒターさまと親友のアステルさまは、精霊の研究の過程でラタトスクさまの存在を知った。アタシを見つけたリヒターさまたちは、ラタトスクさまにセンチュリオンの暴走を伝えたいって……アタシはギンヌンガ・ガップの——この先にある魔界の扉までリヒターさまたちをお連れしたわ」
アクアの色素の薄い大きな瞳に、通路の脇を流れてゆく靄（もや）が映っている。
「でも、ラタトスクさまはおふたりの話に耳を傾けようとはしなかった。そればかりか

……人間を憎むラタトスクさまはふたりに襲い掛かり、アステルさまは殺され、リヒター さまも瀕死の重傷を負った。生き延びたリヒターさまは――アステルさまを甦らせる力を手に入れようとしたの」
「まさか、それが魔族との契約ですか！」
テネブラエが驚愕の声をあげた。
「そうよ。親友を甦らせる代償として、魔界へ続く扉を開くってね」
「おいおい、冗談じゃないぜ」
ゼロスが低くつぶやく。
(アステルを、甦らせる……!?)
エミルもリヒターの真の目的を知って、驚きを隠せなかった。
「ラタトスクさまはヒトを滅ぼすように命じているのよ。そんなラタトスクさまに、力を貸してるあんたたちの方がおかしいんじゃない。しかも――」
アクアはエミルを見下ろし、
「自分で殺したアステルさまの姿で、リヒターさまの前にのこのこ現れるなんて！」
と吐き捨てるように言った。
「リヒターさまを苦しめるヤツはアタシが許さない。リヒターさまに仇を討たせるためなら、願いを叶えてあげられるなら……アタシは！」

アクアが胸の前で腕を交差させ、身を縮めた。
「ラタトスクさまだって……殺してさしあげるわ！」
再び体を起こしたとき、彼女は魔物に変化していた。
「ディジーズです！」
テネブラエが叫ぶ。
ディジーズは三首の竜だった。固い鱗に包まれた体で、エミルたちを先に進ませまいと通路を塞ぐ。
「俺たちに任せろ！」
ロイドが両刀を抜き放った。エミルに余力を残しておいてやりたいと思ったのだった。
「ああ、ふたりはそこで待ってな！」
しいなが札を放つ。
リフィルとジーニアスが、リーガルとプレセアが、そしてふたりの神子たちも参戦する。皆、考えていることは同じだった。
「ロイド……みんな……」
エミルはいつでも戦いの中に入れるように抜き身の剣を握りしめる。だが、勝負に時間はかからなかった。アクアがたったひとりで戦うのは、分が悪すぎた。
鈍い音を響かせて、ディジーズが倒れる。その体はすぐに魔物からアクアのそれへと

戻ってしまった。
「はぁ……はぁ……」
床にくずおれたアクアは、荒い呼吸を繰り返しながら身を震わせている。
「アクアが苦しんでる……？」
エミルの横で戦いを目の当たりにしていたマルタが、気遣わしげにアクアを見守っていた。
「自分の体を魔物化させたため、アクア本体にもダメージがいったのです……」
テネブラエはそう説明し、アクアに憐れみに似た視線を向けた。
「アクア……。あなたはセンチュリオンでありながらリヒターを……」
ついにアクアの輪郭はぼやけだし、コアを形作る。青く輝くそれは、
「……リヒターさま……時間稼ぎしかできなくてごめん……なさい……」
悲しげな声を響かせながら宙を舞い、エミルの手のひらに収まった。
「……マルタ、預かってくれる？」
エミルはコアを大切そうにマルタに手渡す。
「え……でも、契約しないの？」
受け取りながらも、マルタは訊ねた。
「うん。後でいいんだ。今アクアを孵化させて契約させるのはかわいそうだから」

「う、うん……」
なんだか変だなと思いながらも、マルタはヒップバッグにコアをしまった。

「この先がラタトスクの間です」
テネブラエが、通路の先に見える部屋の入り口を鼻先で示した。施(ほどこ)された装飾は神秘的にも不気味にも見える。蠢(うごめ)く靄は黒々として、いやがうえにもエミルたちの緊張を高めた。
「そこにギンヌンガ・ガップがあるんだね」
マルタがこくりと喉を鳴らす。
「はい。リヒターはこの中にいるはずです」
ロイドがエミルの肩を叩く。
「エミル。いよいよだな。ラタトスクとしての力を取り戻し、ギンヌンガ・ガップを閉じる——これがおまえの選んだ方法だな」
「……う、うん」
エミルは目を伏せて頷くと、
「みんな、もう少し僕に力を貸して」

と、仲間たちに頼んだ。

巨大な円形の広間の両側から、まっすぐに立ち上る炎の柱が見える。床には数々の譜陣が描かれ、時おり明滅を繰り返している。

正面にはエイトセンチュリオンの紋章を象った扉が見えた。そこから目に見えないものが出入りする気配が微かに感じられる。

扉の前に立ち、こちらに背を向けている男に、エミルは呼びかける。

「リヒター……さん……」

ゆっくりと、リヒターが振り返る。眼鏡の奥の彼の瞳はエミルを捉え、仲間たちを見てから、再びエミルに戻る。

「遅かったな……エミル。いや、ラタトスクよ……。俺はすでに新たな魔族を召喚した」

「アクアからすべて聞きました。あなたの本当の目的を」

「そうか」

俯くリヒターの返事が低く響いた。

「あなたが親友を失った苦しみはとても大きくて、重い……」
エミルは、表情の見えないリヒターに語りかける。
「でも、ひとりの人間のためにこの世界をニブルヘイムにするなんて、間違ってます。魔族の支配する世界に甦っても、アステルさんは喜ばない筈だ」
その名を聞いたリヒターの拳が、ぎゅっと握られる。バチバチと火花の爆(は)ぜる音がする。
「……おまえがそれを言うのか。アステルの顔でアステルを殺したおまえが！」
魔族の業火(ごうか)に包まれ、リヒターが絶叫する。エミルは剣を抜き、
「なら……力尽くでどかすまでです！」
と、叫び返した。
エミルの横に仲間たちが並ぶ。
「私たちも、戦うよ！　やらせないんだからっ！」
最初に飛び出したのはチャクラムを手にしたコレットだった。
「スターダスト・クロス！」
輝く星屑(ほしくず)がリヒターの頭上から降り注ぐ。
「スケッギォルド！」
リヒターは斧を床に叩きつけ、コレットとその隣にいたプレセアもろとも焼き払おう

と炎を巻き上げる。

一瞬早く飛びすさったプレセアは、

「斧顎襲砕撃（ふがくしゅうさいげき）っ！」

斧から衝撃波を発し、リヒターの足元を狙った。

「スルーズ！」

だが彼は剣でそれを払いざま、切っ先から爆風を起こし、プレセアを吹き飛ばした。

「むっ!?」

返す刀を止められる、金属音が響いた。ロイドだった。

「驟雨双破斬（しゅううそうはざん）っ！」

リヒターの剣を跳ねのけると、速い動きでリヒターを突き続ける。

「甘いな」

振り上げられたロイドの剣を上から叩きつけ、両手でロイドを挟みこんでしまう。

「ぐわあぁぁっっ！」

「ヒールウィンド！」

ロイドの動きをよく追っていたゼロスが、背後からロイドを癒（いや）した。

「ふん……」

ロイドの様子を一瞥（いちべつ）したリヒターの目が、部屋の隅で目立たぬよう詠唱を始めていた

ジーニアスを捉えた。
フレックを発動し、ようやく立ち上がろうとしているプレセアの元へ叩きつける。
「うわあっ！」
「リヒター！　もうやめて！」
マルタが叫んだ。
「――プリズムソード！」
ラタトスクの間の暗がりが、光の剣に照らし出される。リヒターは思わず腕を上げ、目を覆う。
その僅かな隙に、
「リザレクション！」
リフィルが仲間たちの回復を試みた。ジーニアスは、
「ありがとう、姉さん」
と言いながら、プレセアの手を取り、立たせてやる。
「よーし、次はあたしたちだよ！　風刃縛封っ！」
「三華猛蹴脚っ！」
足元を札――数十枚はあるだろう――に巻き上げられ、宙に浮いたリヒターに、リーガルの回し蹴りが三連発で決まる。

「ぐうっ……！」
リヒターは鳩尾（みぞおち）を押さえ、つんのめるように蛇行した。
「！」
殺気にハッと顔を上げると、そこにはエミルの姿があった。
「こんなことして……本当にアステルさんが喜ぶと思うんですか？」
「うるさいッ！　おまえに……おまえに何がわかる！」
リヒターはぎりりと歯噛みをすると、エミルを睨みつけた。
暗闇の中、鈍く光る床の明かりを映して、新たな魔族を召喚したリヒターの形相は恐ろしく見えた。
「ラタトスク……覚悟はいいか……」
エミルは重心を落とし、身構える。リヒターが斧を投げ捨て、両手で剣を掲げた。
「苦しむのは一瞬ですむ……はあああああああああっ！」
エミルは突進してくるリヒターに向かって、剣の柄（つか）を握りなおす。
「炎帝剣舞連（えんていけんぶれん）っ!!」
「っ!?」
止めてみせる、と強く念じていたエミルの剣がいとも簡単に弾かれ、床に落ちて滑ってゆく。

「ぐわあっ！」

圧倒的な強さの刃に何度も翻弄され、エミルはよろよろと後ずさり、しりもちをついてしまう。間髪を入れず、振り下ろされた剣が頬を掠ってゆく。エミルは仰向けに倒れたまま転がり、逃れた。

「エミル！」

床を滑る剣を止めたマルタが、ブーツでそれを蹴ってよこす。エミルは起き上がりざま柄を掴むと、リヒターに向き直った。

「ここで終わるわけにはいかない！　うおおおおおおっ、魔王獄炎波っ！」

リヒターに飛びかかり、

「負けるものかぁぁっ！」

斬りつける。

「ぐわあああっ！」

闇の中にリヒターの叫び声が響いた。

あとにはもうどちらが倒れてもおかしくない死闘が続く。

先に膝をついたのは――リヒターだった。

剣でやっとのこと体を支えているリヒターの脇をエミルは通り抜け、扉の前に立つと、右手を高く挙げた。手のひらから発せられた光が、センチュリオンたちの紋章をひとつひとつ打ちつけるように叩いてゆく。

目にも止まらぬ速さで扉が閉まった。と、その直後、向こう側から何かが扉に激突する衝撃が伝わってきた。

それはラタトスクの間を揺るがし、震わせ、耳を塞ぎたくなるような恐ろしい音で繰り返される。

「……くうっ！」

エミルは腕を挙げたまま、衝撃に耐えた。

「魔族が総力をあげてこの扉を開けようとしています」

テネブラエが扉を睨みつける。が、どうすることもできない。

そのとき、

「……これを……使え……」

エミルの背後から、苦しげな表情のリヒターが白い石を差し出した。

「それは封魔の石!?」

煙のような気を吐いている石を見て、ロイドが声をあげる。

「そうだ……。体内のマナを炎に変える石……魔族にとってマナは毒だ。それで一時的

に扉は閉じる」
「どうしてそれをあんたが……」
石がエミルの手に渡るのを見ながら、ロイドは訊ねた。
「エルフの隠れ里に隠されていたのを取りに行かせた。それと神子の持つクルシスの輝石があれば、ラタトスクを殺してもこの扉を封じることができるからな」
リヒターは扉を見上げながら答えた。ロイドはそれをじっと聞いていたが、
「……クルシスの輝石は装備者の体内時計を止めて永遠の命を与える……おまえ、自分のマナを永遠に燃やして扉を守る人柱になるつもりだったのか……」
リヒターの真意に気づいて、深い吐息を漏らした。
「……そうすれば、アステルは甦り、ラタトスクは死に、扉は守られ、世界は救われる――結局……ラタトスクを倒せなかったがな」
リヒターが自嘲の笑みを浮かべる。
と、魔物たちの扉を攻撃する音が止んだ。エミルが掲げた封魔の石が効いたのだ。
「……く……くく……」
突然、エミルが笑い出した。
「どうしたの、エミル」
マルタが驚いてエミルに歩み寄る。ほかの仲間たちもただ呆然とこちらに背を向けた

のままのエミルを見つめる。
「……はーっはっはっはっ！」
笑い続けていたエミルは、次の瞬間、
「ううっ!?」
振り向きざまにマルタの首を締め上げていた。
「これで邪魔者は倒した！　後はアクアを従えて全ての力を取り戻すだけだ。さあ、アクアのコアをよこせ！」
「……く、くるしい……エミ……ル……」
マルタの狭められた喉からは、声らしい声も出ない。
「さあ、早くアクアのコアをよこすんだよぉっ！」
そのとき、傷の痛みをこらえながら走り寄ってきたリヒターがエミルに体当たりした。
エミルの手が離れる。よろけたマルタの体を、ロイドが抱きとめた。
「ちっ！」
エミルは舌打ちし、リヒターを睨みつける。
「……げほっ……う……エミル……どうして……」
激しく咳き込みながら、マルタは必死にエミルに手を伸ばす。
「俺はエミルじゃねぇ！　ラタトスクさまだ！」

鞘から抜き放った剣を、力尽きて蹲っていたリヒターに振り下ろす。すんでのところでリヒターが跳び退ると、

「うおおおおおおぉぉぉっ!!」

今度はロイドに挑みかかった。ロイドはマルタから体を離しながら、ぎりぎりのタイミングでエミルの剣を受け止める。

「エミル！　やめて！」

マルタがまだ苦しさの残る喉を押さえながら絶叫する。が、エミルは、

「わはははははっ！　死ね！　死ね！　死ねぇっ！」

笑い声を上げながら、幾度も幾度もロイドに斬りかかる。が、

「……ぐぅ……！　でて……くるなっ！」

突然、彼は自分の喉元を掴んで苦しみだした。その手から剣が落ちる。

「マルタ！」

「エミル！」

マルタはおろおろしながらも、エミルに近づく。

「ごめん……マルタ」

エミルは喉を掴み、目を閉じたままでマルタに伝える。

「ヴェリウスの加護を受けても僕が消えないだけでラタトスクをとめることはできない

みたい」
「そんな、諦めないで！」
マルタが叫んだとき、
「……邪魔を……するなぁっ！」
ラタトスクのエミルがマルタを片手で払いのけた。
「く……っ、マルタ、お願い。僕を止めて！　僕をコアにして扉を封じる鍵にして……」
「……やらせるか……！」
「……も……もう……だめ……。自分を抑えきれない……お願い……マルタ……」
エミルはばったりとうつ伏せに倒れこんだ。
「エミル――っ!!」
どうしていいのかわからないマルタは、エミルの名を叫ぶしかなかった。
「……ふ……くくく」
倒れていたエミルが笑い始める。
「……く……くく。ようやく押さえこんだ。さあ、アクアをよこせ！」
ゆっくりと立ち上がるエミルに、
「エミル！　自分を取り戻せ！　エミル！」
ロイドが叫ぶ。

「うるせぇっ！　甘ちゃんのあいつは消えたんだよっ！」
そのとき、マルタが口を開いた。
「……エミル……。私……私……」
「何だよ、やるってのか？　おまえ、俺にも消えて欲しくないってそう言ってただろ？　おとなしくアクアのコアを渡せば、おまえだけは生かしておいてやってもいいぜ」
エミルが差し出した手に首を振り、
「……私……戦う」
マルタはまっすぐに顔をあげた。その瞳には強い決意の光が宿っている。
「何だと？」
「エミルのために、あんたを倒す！」
「あはははは！」
エミルはおかしそうに笑い出した。
（これでいい。これでいいんだ――）
「俺を倒すだと？　人間風情が……笑わせる！　さっさとくたばりやがれ！」
彼の前にはマルタとロイドがいた。このふたりが相手なら、きっと怪しまれずにやれるだろう。
「魔神剣！」

ロイドの剣が閃（ひらめ）く。
「……ふん、効……かねぇな」
まともに刃を浴びたエミルは、ロイドに鳳翼旋（ほうよくせん）で挑みかかる。僅かに逸（そ）らした切っ先を、ロイドは難なく受け止め、
「獅吼旋破（しこうせんぱ）っ！」
「魔神双破斬（まじんそうはざん）っ！」
次々とエミルの身体に損傷（ダメージ）を与えてゆく。
「ディバインセイバー！」
マルタが出現させた雷が、エミルを貫き、轟き渡る。
「……き、効かねぇ……な」
そのとき、ロイドが傍らを駆け抜けた。傷口を抉（えぐ）る激しい衝撃と苦痛がエミルを襲う。
「ぐあああああああっ……」
頤（おとがい）をあげて叫ぶと、ガクンと床に膝をついた。
「……さよなら、ラタトスク！」
マルタがスピナーを構えた。
（うん、うまくいった……）
「……！」

僅かに浮かんだ安堵の表情を、マルタは見逃さなかった。
カツン、カツンとブーツの音を響かせてエミルに近づき、アクアのコアを差し出す。
「……な、に？」
驚いて、エミルは顔を上げた。
「きみは——エミルだよね」
エミルはあわてて否定する。緑色の瞳に微かな気弱さが揺れた。
「……ち、違う。俺はラタトスクだ！」
「ううん。私、やっと気づいた。きみはエミルだよ」
「……エミル……。そうなのか!?」
ロイドが驚いて訊ねた。仲間たちも一様にエミルを見つめる。
テネブラエがスーッとエミルの横に移動した。
「エミルさまは、ラタトスクさまを自分の中に取り込む代わりに、ラタトスクさまの罪を背負うつもりなのです。アステルの命を奪った罪滅ぼしに、封じられようと……」
「そんなのおかしいよ！」
マルタが強い口調で言った。エミルは静かに応える。
「……けど、僕はもうひとりの僕をヴェリウスの力を借りて力尽くで押さえ込んだ——殺したも同然だよ。ラタトスクの命を奪った僕だけがのうのうと生きるの？」

「……バカ！」
マルタがエミルに飛びついた。拳で彼の胸を叩く。
「バカバカバカバカ！　エミルが言ってたちゃんと考えてるって、こんなことだったの？　私は……私は、エミルがラタトスクを受け入れるってことだと思ってた」
「受け入れるって……だって、封じ込めたらラタトスクの意志は消えちゃうじゃない」
そんなことはできない、とエミルは言った。
「だったら！　だったら封じ込めないで向き合ってみればいい！　エミルが……エミルとラタトスクが言ってくれたんだよ。私にパパから逃げるなって！」
それでもエミルは納得できない。
「それで僕とラタトスクが融合したら、僕は今までのことなんて忘れて人間を滅ぼそうとするかも……」
「……勇気は夢を叶える魔法」
マルタが俯いたまま小さな声で言う。リヒターがハッとした。
「私はエミルを信じてる……ううん、エミルとラタトスクを信じてる」
「マルタ……」
顔をあげたマルタを、エミルは間近に見つめる。
「マルタの言う通りだ」

ロイドの声に、エミルは視線を巡らせる。いつの間にか集まってきていた仲間たちがみな、そこにいてくれた。

それに、とロイドは続ける。

「おまえがやろうとしたことは、おまえを信じた仲間に、仲間殺しの苦しみを負わせることなんだぞ——俺たちはおまえを信じてる。なのにおまえは信じないのか？　おまえ自身を」

仲間たちがエミルへの信頼を胸に、次々に頷いてみせる。

エミルは立ち上がり、

「……僕は……」

と、ゆっくりと目を閉じた。

あの空間に、ふたりはまた向かい合っていた。

「ヴェリウスに俺を封じさせて、おまえもギンヌンガ・ガップの扉に封じられるんじゃなかったのか？」

エミルの姿をしたラタトスクが訊ねる。



「……僕が考えていること、きみにはわかるよね」
答えのかわりにエミルは言った。
「――なら、俺の中におまえがいる余地があるのかどうか、試してみろよ」
強気な赤い瞳が挑発してきた。
「……それじゃあ、行くよ！」
「ああ。おまえの意地を見せてみろっ！」
上も下もわからない、重力さえ覚束（おぼつか）ない空間に、剣がぶつかりあう音が響いた。
もう逃げない、とエミルは思う。ラタトスクと向き合うのだと自分に誓う。
ラタトスクの剣が襲いかかる。受け止める。斬りかかる。弾かれる――。
はじめは敵（かな）わないと思っていた相手の呼吸が読めてくる。
はぁはぁと息が上がる。だが、それはラタトスクも同じことだ。
「ほらっ、本気で来いよ！」
ラタトスクが喚いた。
「うん。僕の力を――見せるよ！」
エミルが跳ぶ。応戦しようと体をひねるラタトスクの動きが見える。遅いくらいだ。
「うっ!?」
赤い瞳が見開かれる。

もうひとりの自分を深々と刺し貫く感触が、エミルの腕に確かに伝わってきた。
「俺が、負けるとはな……」
「ありがとう。きみが僕でよかった——」

ふたりはまた向き合って立っている。
「……まいったな。おまえみたいなひ弱な坊やは俺じゃないってずっと思ってたのに」
ラタトスクはため息をついた。エミルは、まっすぐにもうひとりの自分を見つめる。
「今度の旅が、僕たちを変えたんだよ。僕はきみの強さが必要なんだって気づいて……」
「俺はおまえの優しさがただの弱さじゃないって気づいた……か」
ふっ、とラタトスクが笑う。
「仕方ねぇ、受け入れてやるさ。おまえのなけなしの『勇気』に免じてな」
彼はそう言うと消えて行った。

「……僕もラタトスクを信じる。だってきみは僕だから」

エミルは緑色の瞳を開いた。彼の前にセンチュリオン・アクアのコアが差し出される。マルタからそれを受け取ると、彼はそれを高く掲げ、孵化させた。輝きが紋章に吸い込まれると同時に、扉が固く閉ざされる音が響き渡る。

その音が消えないうちに、エミルもまた光に包まれた。

光が散って消えたとき、マルタは彼が彼でなくなったことを知った。

「エミル……。ううん、ラタトスク？」

マルタが見つめると、

「……そんな顔をするな。ヒトを滅ぼすってのは取り消すよ」

少し困ったように赤い瞳が揺れた。仲間たちがほっと胸を撫で下ろす。

「……だが、このままじゃ扉を守りきれない」

「どういうことだ」

ロイドが訊ねる。

「俺以外の存在が強引に扉を開けたために、古（いにしえ）の封印が狂ってしまった」

「……フ……、俺のせいか……」

リヒターは苦笑し、

「ならばやはり俺自身が封魔の魂魄（こんぱく）となって……」

と、言いかける。もとよりそのつもりだったのだ。

「おまえにそういう気持ちがあるなら、俺も力を貸そう」
「……何……」
リヒターは視線をあげた。
「リヒターが人柱として扉を守る間に世界の理(ことわり)を変える。そうすればリヒターも少しは苦しまずにすむ」
「新たな理？　それは……」
マルタが首を傾げる。
「元々この世界にはマナが存在していなかった」
ラタトスクは古の記憶を辿るような目をすると、
「彗星(すいせい)デリス・カーラーンの恵みと俺——大樹カーラーンが移されたことでマナが命の源となったのだ。だから、世界を構成するものからマナを取り上げ、それをこのギンヌンガ・ガップの封印とする」
「そ、そんなことをしたら大地が滅びるよ」
驚いたジーニアスが、とんでもないという風にラタトスクに数歩駆け寄った。
滅びない、とラタトスクは即座に否定する。
「そのように理を引く。時間はかかるがな……。この地に根付く全ての命がマナを必要としなくなるだろう。ヒトもエルフも大地も、何もかも」

「精霊も？」
しいなが訊ねた。彼女の胸の中には、まだコリンが息づいている。
「それは無理だ。精霊はマナによって生かされている。我ら精霊は本来この世界の住人ではないからな」
「それじゃあマナがなくなったら困るじゃない」
マルタが言うと、ラタトスクは首を振る。
「世界を構成するものからマナが消えるだけで、マナは世界に残る。新たな世界樹がマナを生み続ける限り、マナは世界にあふれ、世界を巡って扉の封印に注がれ続ける」
彼は扉をちょっと振り返ってみせた。
「俺はその流れを操り、見守ろう。もうひとりの樹の精霊として、このギンヌンガ・ガップでな」
「俺たちの世界は何か変わるのか」
ゼロスが訊く。ふたつの世界はひとつになったが、まだ問題が山積している。この先のことを聞いておきたかった。
「マナの庇護から切り離されたことで、必ず滅びを迎える世界となる」
「必ず、滅ぶ……」
プレセアが、ラタトスクの言葉を繰り返した。

「そう。大地の寿命が来れば滅ぶ。何百億、いや、何千億年以上も先のことだろうがな――。だがそれも、この大地があるべき姿に戻っただけだ。大樹カーラーンが移される前のな」

じゃあ、とマルタはラタトスクの顔を見上げた。

「エミルも……あるべき姿に戻ったの？」

「……マルタ……。ああ、そうだな。俺はエミルでもあり、ラタトスクでもある。これが正しい姿なのかもな」

「私たちのこと、ちゃんと覚えてるんだね」

マルタの唇に浮かぶ微笑は、淋しそうにもうれしそうにも、見える。

「……もちろんだ。おまえたちと旅した時間は……ムダじゃなかった……」

ラタトスクは、

「……人間も、案外悪くない」

と、目を閉じた。

「ラタトスク……」

マルタの額に埋まっていた偽のコアが、光となって散る。それはエミルが命をかけて守ろうとしていた輝きだった。

「さあ、行け。二度と人類が扉に触れぬよう、ここを封じる」
ラタトスクは、仲間たちの間をすり抜け、通路に立つと振り返った。
最初に歩き出したのはゼロスだった。ラタトスクを追い越しざま、
「じゃあな、エミル。妹を助けてくれてありがとよ」
と、あくまでも軽く背中を叩いてゆく。
「あんたのこと、忘れないよ。元気でね、エミル」
次はしいなだった。ラタトスクと頷き合い、片手を上げて去って行く。
「君と旅ができたこと、私は誇りに思う」
最後まで礼儀正しいリーガルが握手を求めた。
ラタトスクの赤い瞳が孤独の予感に曇ってゆくのを、プレセアが見上げていた。
「あなたは、ひとりじゃないから」
彼女はそう告げると、通路の隅に木彫りのクマをそっと置き、出て行く。次はリフィルとジーニアスだった。
「あなたみたいな生徒、受け持ってみたかったわ」
「精霊の友達ができたなんて、すごい自慢だよ。僕のこと、忘れないでね」
ふたりは気丈でにこやかだ。ラタトスクはハーフエルフの姉弟を頼もしく見送った。

「あなたが生かしてくれた世界、わたしたちが守り続けるからね」
コレットが行ってしまうと、ロイドが歩み寄る。
「エミル……。また会えるって信じてる。だからさよならは言わないぜ」
肩を叩かれて、ラタトスクは小さく頷いた。ロイドの後ろ姿を見送ってから、彼は体ごとゆっくりと、振り返った。
ひとり残ったマルタが肩を落とし、下を向いている。
「キミは……ずっと生きるんだよね。ここを封印しても、ずっと……」
「そうだ……」
ラタトスクは、こんなに頼りなく弱々しく見えるマルタは初めてだと思う。どんなときにもエミルを支え、誰より気の強い少女を、彼はずっと見てきたのだ。
思い切ったように、彼女は歩き出した。ラタトスクの前まで来ると、潤んだ瞳で彼を見上げる。
そうだ、いつもマルタの瞳はこの青に澄んでいた、とラタトスクは思う。
「私もさよならは言わないから。私とエミルの心はずっと一緒だから……」
それだけ告げると、マルタは唇を引き結び、彼の脇を通り過ぎる。
背中合わせのふたりの距離が開いてゆく。
部屋の出口の手前まで来て、マルタのブーツが止まった。呼吸を整えるわずかな時間

のあと、
「エミル、ずっと大好きだよ……」
マルタは微笑みながら振り返る。
ラタトスクの背中が一瞬震え、彼もまた振り向いた。
「僕も大好きだよ、マルタ」
その瞳が緑色に輝いているのを、マルタは強く強く心に刻む。
再び歩き出すマルタの背後で、永遠の別れを告げる扉の音が響き渡った——。

「……儀式は終わったのか」
振り返ると、リヒターが立っていた。
「ああ……。これでおまえはこの部屋から出ることはできなくなった」

ラタトスクは、リヒターの肩越しに魔界の扉を見つめる。

「……永遠の地獄、か。魔族に魂を売って世界を破滅させようとした男の末路(まつろ)にはふさわしいな」

リヒターは言い、ラタトスクの視線の先へと向き直る。

「じゃあ、さっそく人柱になるとするか。神子の輝石なしでどこまで体がもつかわからないが」

「一〇〇〇年だ」

え、とリヒターは意味を図りかねるという顔でラタトスクを見た。

「全ての命あるものからマナを切り離すのに一〇〇〇年かかる。一〇〇〇年が過ぎ、マナで世界を支える必要がなくなれば、余ったマナで新たな封印を構成できる」

ラタトスクは伏せていた目をあげ、

「そのときには、おまえを解放してやる」

と約束する。

「――ならば俺も言わせてもらおう」

人柱になる前に言わなければと思っていた言葉を、リヒターは口にした。

「おまえはコアと実体とに分かれることができる。しばしの間、エミルとラタトスクに分離して暮らすことはできないのか……。必要なら、俺の体を宿り木にしてもいい」

ラタトスクは驚きの表情でそれを聞いていたが、すぐに「無理だ」と首を振った。
「マナを切り離す作業がある」
そのとき、ラタトスクの間にテネブラエの声が響いた。
──それはあなたの命令で我らセンチュリオンと魔物たちが行うこと。連絡さえ取ることができるなら、ふたつに分かれていようと問題はないでしょう。
ラタトスクの視線が一瞬リヒターのそれと絡み合い、伏せられる。
──ラタトスクさま。
今度はアクアの声が聞こえた。
──人間の一生なんてアタシたちに比べたら一瞬でしかないでしょう？
ラタトスクの顔に迷いの表情が浮かぶ。
「俺は……ひとりの人間を殺した。それが今回の事態を招き、さらに多くの犠牲を生んだ。そんな虫のいい話は……」
「……だがエミルは」
リヒターは静かに反論する。
「……もうひとりのおまえは、アステルの死を悼（いた）み、自分の意志ではなかったのに罪を償（つぐな）おうとしてくれた……。俺はそんなエミルに、人間として一生を全（まっと）うしてもらいたい」
「……リヒター……さん……」

ラタトスクがエミルとして呟いた。

——ラタトスク。

「ヴェリウス……？」

ラタトスクは心の精霊の声を聞き、姿がないのをわかっていながら、あたりを見回した。やはり心に寄り添っている、と彼は感じる。

——あなたの心の一部が告げています。自分が殺めてしまったアステルの分を生きろ、と。私はその心に従いましょう。

「アステルも……あの馬鹿なお人好しも喜ぶだろう」

リヒターが微笑んだ。

(ラタトスクが、エミルとしてアステルの分を生きてくれるなら本望だ。俺は、喜んで一〇〇〇年を過ごそう——)

それは失われた友を甦らせるより、はるかに意味のあることに違いなかった。彼はそう信じることにする。

「……ありがとう……」

ラタトスクが告げると、リヒターの額に独得の感覚が生まれた。近づけた手のひらが光に赤く染まる。ラタトスクのコアが埋められたのだった。

それは次第に輝きを増し、同時に色は影を潜め、澄んだ光となってラタトスクの体を

包み込む。

そのまばゆさに、リヒターは祈りを込めて目を閉じた――。

エピローグ

空も海も、どうしてこんなに美しいのだろう。
橋の手すりに凭(もた)れ、マルタは目を細めた。
隊列を組む海鳥たちが、その白い羽根に波頭のきらめきを映しながら、羽ばたいてゆく。
マルタの背後を、子供たちが駆け抜けてゆく。
この街――パルマコスタで、血の粛清(しゅくせい)と呼ばれる惨事が起こったことなど、信じられないくらいだ。
街は次第に活気を取り戻している。世界中で起きていた暴動もすっかり収まりつつあると聞く。
（エミル……キミのおかげだね）

マルタは、彼がギンヌンガ・ガップで最後に見せた、あの笑顔を想い描いた。
(この街で初めて出会ったとき、まさかキミが精霊だなんて思わなかったよ——。でも、たまたま私は人間に生まれて、キミはそうじゃなかった……それだけのことなんだよね)
ヒト、エルフ、精霊——。そんなこと関係ない、とマルタは思う。
世界を変え、未来を決めるのは、ただ心のありようなのだ。
そう信じている限り、マルタにとってエミルは永遠の存在であり続ける。
(……エミル。見てて。私、パパとは違うやり方で、テセアラの人たちにシルヴァラントのことを認めてもらう)
風が変わったのだろう、海鳥たちが戻ってきた。
(エミルが守る世界を平和にしてみせる。それが、私の罪を償うことにもなると思うから……)
足音が近づく。
気弱そうで、遠慮がちで、でもまっすぐこちらに歩いてくる足音——。
マルタはゆっくりと振り向いた。
目が合うと、彼は少し照れて頭を掻いてみせる。

「うそ……！」
見開いた瞳を潤ませる間もなく、
「エミル……！」
マルタは彼に走り寄ると、その首にしっかりと腕を回す。
ヒトの命の一瞬を、共に生きるために。
エミルは、マルタの温かい体を抱きしめた。

【『テイルズ オブ シンフォニア－ラタトスクの騎士－ 世界(とき)の願い』完】

あとがき

こんにちは、矢島さらです。
『テイルズ オブ シンフォニア―ラタトスクの騎士―』メインシナリオ編、完結です〜。
例によって、巻を追うごとに厚くなっております（笑）。
さて、この小説のエピローグは、トゥルーエンドを元に書いてあります。そうでなくちゃエミルとマルタが救われないですから。
きっとこのあとふたりは、シンフォニアキャラの皆さんのところへ挨拶回りでしょう。どういうやりとりがあるのか、見てみたいですね。リーガルさんが〝リゾートへご招待〟の件を忘れていないといいのですけど。たとえエミルがマルタのおしりに敷かれても、ふたりには幸せになって欲しいです。
この最終巻を書いている途中で、お芝居を見に行きました。その名も『表裏源内蛙合戦』。もうヒッカリカエルことノストロビアも出てこないし、かえる禁断症状で。

平賀源内の表人格と裏人格が登場するのですが、これってまるでエミルとラタトスク……な部分もあり、面白かったです。が！　なんとかえるは一度も出てきませんでした。鳴き声だけ数回聞こえましたが、本筋とはまるで関係なし。

だーまーさーれーたー（泣）。

帰り際、「ねえねえ、かえるなんて出てこなかったよねー！」とプンスカな女性を発見。「あなたもまにあですか」と声をかけたかったです。

『蛙合戦』の意味が気になるかたは調べてみましょう。以上、かえる日記番外編でした。

今回もバンダイナムコゲームスの奥村大悟氏に、たくさんのオリジナルイラストを描いていただきました。シナリオの実弥島巧先生にも引き続きお世話になりました。ありがとうございました！

それでは、またお会いしましょうっ！

二〇〇八年十一月

矢島さら

矢島さらの著作リスト

テイルズ オブ デスティニー
運命(とき)をつぐもの上下
青の記憶
蒼黒の想い上下

テイルズ オブ ファンタジア
はるかなる時空(とき)上下
真紅の瞳　　紺碧の絆
琥珀の回廊　瑠璃の夢

テイルズ オブ エターニア
永遠(とき)のきざはし全3巻
蒼天の星上下　暁の約束上下
リッドのとかげ　　キールの希望(ゆめ)

テイルズ オブ デスティニー2
蒼黒(そうこく)の追憶(とき)上中下
朱鷺色(ときいろ)の風

テイルズ オブ シンフォニア
久遠(とき)の輝き全4巻
青翠(みどり)の器

テイルズ オブ リバース
第一話 落日の瞬間(とき)上下
第二話 偽りの再誕(とき)上下
第三話 新たなる時代(とき)

テイルズ オブ ジ アビス
緋色(あか)の旋律上中下
真白(しろ)の未来(あした)上下
黄金(きん)の祈り上下

テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-
世界(とき)の願い全3巻

ISBN978-4-7577-4584-1
C0193 ¥640E

9784757745841

1920193006407

定価 本体640円 ＋税

発行◯エンターブレイン

Famitsu Bunko

ラタトスクの騎士としてマルタと共に旅を続けるエミル。途中、仇と憎んでいたロイドが実は偽者だったことを知るが、その頃エミルは、別人格に支配されるようになっていく。そんな彼を、アステルという若き研究者と見間違える人々が現れる。アステルは、どうやらリヒターに殺されたらしいのだが……？
人気RPG完全ノベライズ、いよいよ最終話の登場です!!